
ノーデルシアの勇者 第二章

bunz0u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーデルシアの勇者 第二章

【Nコード】

N7606P

【作者名】

bunzou

【あらすじ】

幾多の戦いを乗り越え、旅に出たタマキとカレンがある王国に渦巻く陰謀に立ち向かっていく

<http://ncode.syosetu.com/n50631/> の続編です

パブでも掲載しています <http://p.booklog.jp/book/21884>

あてのなさそうな旅人

森の中の細い道を、二人を乗せた荷馬車がゆっくりと進んでいた。一人は御者台に座っている眼鏡をかけてレザーアーマーを装備した地味な女。もう一人は荷台で寝転がっているマントと皮のジャケットを付けた男だった。

そこに突然弓や剣を構えて、顔を布で隠した賊と思われる男達が現れて荷馬車を囲んだ。

「怪我をしたくなかったら有り金を置いていけ！」

いくつもの弓が二人に突きつけられたが、当の二人は何事もないようにそれを見回した。それから男は体を起こしてあくびをした。その様子を見て、声を出した男は険しい顔になった。

「金を置いていくんだ！」

そこで荷馬車の男と女は顔を見合わせた。

「どうしますか？」

「そんなに性質が悪い連中には見えないし、ちょうどいいかもな」

男はそう言って頭上に手をかざした。

「ファイアボール！」

空に火の玉が放たれ、派手な爆発が起こった。その衝撃に賊達はひるんだ。男は今度は手を水平に構えた。

「俺としては平和的に話し合いたいんだけど、どうかな？」

さっきの威力を見ていた賊達は完全にその雰囲気飲まれていた。弓や剣はすでに二人には向けられていなくて、ただ取り囲んでいるだけだった。

「よしよし、それじゃあなんでこんな強盗してるのか聞かせてもらおうか」

男は荷馬車から飛び降りて賊達と正面から対峙した。

「おっと、そういえばまだ名乗ってなかったっけ。俺はタマキでこっちはカレンだ。よろしくな」

場違いな名乗りに緊張した雰囲気が一気に崩れた。賊は一箇所に集まって何かを相談していたが、何か決まったようで、首領らしき人間は顔に巻いていた布を取った。

その顔はくたびれた感じの中年の男だった。男はタマキとカレンの目の前に立って、意を決したような感じで口を開いた。

「まず、さきほどのことを謝罪します。あなた方を見込んで頼みたことがあるのですが、ついてきてもらえますか？」

さっきまでとはまったく違った雰囲気になった男に、タマキは気楽な感じでうなずいてみせた。

「ああ、いいよ。案内を頼む」

それだけ言ってタマキは再び荷台に横になった。

その妙な一行はゆっくりと進んでいって、さびれた感じの村に到着した。タマキは荷馬車から飛び降りてあたりを見回した。

「なんだか寂しい村だな」

「そうですね、どうも妙な雰囲気です」

タマキとカレンは言葉を交わしてから、中年の男を見た。

「さて、どういうことか聞かせてもらえるよな」

タマキの質問に中年の男はうなずいた。

「荷馬車はこちらで預かりますから、どうぞこちらに」

中年の男は歩き出し、タマキがカレンにうなずくと、カレンは御者台から降りてタマキと共に中年の男の後について歩いた。

到着したのは村の建物の中でもひとときわ大きい建物だった。三人はそこに入って、比較的豪華な部屋に集まって椅子に腰をおろした。

「私はアディソンといって、この村の者です」

「なるほどね。で、なんで強盗なんてまねをしてたんだ？」

タマキの言葉に、男は苦痛に満ちた表情になった。

「しばらく前から、この村の近くに魔物が出没するようになったのです。そのせいで農作業が思うように出来なくて、このままでは税でほとんど手元に何も残らないことになってしまいそうなんです」

「それで盗賊の真似事ですか」

カレンの一言にアディソンはうつむいた。

「それしか手がなかったんです。魔物の退治なんて私達にはできませんし、こんな小さな村には兵隊達も中々来てはくれません」

「なるほどね、それで見ず知らずの俺達の力に目をつけたわけだ。これは相当、切羽詰ってるな」

アディソンは大きくうなずいた。

「そうです。お礼はしますから、ぜひ魔物の退治をお願いします」

「そうだな。じゃあ、この村に無期限で滞在させてもらおうか」

「極秘でお願いします」

タマキとカレンの妙な申し出にアディソンは一瞬妙な表情を浮かべたが、すぐに首を縦に振った。

「わかりました。できるだけ協力はさせてもらいます」

その返事を聞いてタマキは手を叩いた。

「よし、決まりだ！　じゃあ、早速魔物が出るってところに案内してもらえるか？」

「はい、ではすぐに」

アディソンとタマキはほぼ同時に立ち上がった。そこでタマキはカレンの方を向いた。

「カレンは念のためにここに残っててくれ」

「わかりました。タマキさんもお気をつけて」

二人で建物を出てから、アディソンは少し遠慮気味に口を開いた。
「あの人は、強いんですか？」

「ああ、強いよ。カレンさえいれば何も心配いらない」

そう言ったタマキはアディソンの顔を見てにやりと笑った。

「それこそ、ここから見渡せる限り、魔物が現れたって大丈夫だ。まあ、俺でもそれくらいなんとかできるけど」

アディソンはタマキの言葉を冗談とも本気とも受け取りかねて、あいまいな表情をしていた。

それからしばらく歩いて森の中に入ってから、タマキは突然立ち止まってアディソンの肩に手をかけた。

「お客さんが出てくる。下がってくれ」

「わかりました」

タマキのただならぬ様子にアディソンはおとなしくその言葉に従って後ろに下がった。

「なにか妙な気配だと思わないか、サモン」

タマキがそう言いつと、首から下げている狼のようなアミュレットが動き出した。

「そうだな、ただの魔物ではない。しかしその名前はなんとかならんのか？」

「ドゥームデーモンなんて長すぎるし、それにお前には名前なんてあつてないようなものだろ」

「わかった。それより、くるぞ」

それまで何の気配もなかったところに、突然普通の人間の二倍はありそうなサイズの影が現れて襲いかかってきた。

タマキは後ろに飛び退いてそれと距離をとってから、上から下までその襲いかかってきた魔物を観察した。

「オーガみたいだけど、何か違うな」

「そうだな。だが、雑魚なものには変わりはない」

「ああ」

タマキは手のひらをその巨体の魔物に向けた。だが、魔物はそんなことはおかまいなしに突進してきた。

「バースト！」

次の瞬間には魔物が爆発に包まれ、文字通り粉微塵になっていた。アディソンはその光景を呆然として見ていた。

タマキはゆっくりとそちに歩いていった。

「まさかあれ一体だけじゃないよな」

「は、はい。でも村の近くをうろついていたのはあの魔物だけのはずです」

「そうか。それじゃあとりあえず村に戻ろう」

村の守護神

時間は少し戻って、タマキ達が出かけた後の村。カレンは滞在するための空家を案内されていた。

カレンは外をざっと見てから、中も同じように確認した。

「これなら少し手を加えればよさそうですね」

そうつぶやいて、カレンは案内の男のほうに顔を向けた。

「では、荷馬車をここまで持ってきてください。それから、この村のことに關して一番詳しい人を呼んでもらえますか？」

カレンがそう言っていると、案内の男は言われた通りにしようとしたが、そこに別の村人の女が焦った様子で駆けつけてきた。

「大変！ 畑に魔物が！」

案内の男は女の肩をつかんだが、おろおろしてどうすればいいのかわからないようだった。そこにカレンが歩み寄って女の肩に手を置いた。

「案内してもらえますか？」

その落ち着いた様子に取り乱していた女も少し落ち着いたようで、深くうなずいた。

「こっちです」

女が先導して、カレン達三人は畑に向かった。到着してみると、そこには四足の大きなトカゲのような魔物が三体ほどうろついていた。

「こんなところにキラリザードが出ますか。妙ですね」

カレンはそれだけ言うと、腰の剣に手をかけて、止める間もなく、どんどん魔物に向かって進んでいった。

当然そこにキラリザードが飛びかかったが、それはあつという間に剣で切り捨てられた。そして、残りの二体もあっさりと切られた。

その鋭すぎる剣に村人は声も出なかった。そこにカレンが何事も

なかったような表情で戻ってきた。

「あれで全部でしょうか？」

「は、はい。とりあえずは」

「そうですか。では、戻りましょう」

そうして村に戻ったカレンは帰ってきたタマキとちょうど合流することができた。

「とりあえず、妙なやつを片付けてきたけど、カレンのほうはどうだった？」

「こちらも三体ほど相手をしてきました。ですが、少し気になることがあります」

「俺のほうもだ。まあその話は後にして、当面の家を見ておきたいな」

「そうですね。手を加えないといけないところも多いですから」

タマキはうなずいてからアデイソンの方に向き直った。

「そういうわけだから、何かあったら教えてくれ」

「それから、後で村に詳しい人に家まで来てもらえるようにしてもらえますか？」

「はい、そうします」

アデイソンがそう返事をする、タマキとカレンは用意された家に向かつていった。

取り残された三人の村人達は、あれだけのことをやったというのにマイペースな二人に驚いていた。

「本当にあの人は何者なんだ？」

アデイソンはそう言って首を横に振ったが、それに答える者はいなかった。

一方、タマキとカレンは早速提供された家の整理を始めていた。
「しかし、思ったよりも汚れてるな」

タマキは雑巾を片手に室内を磨きながらため息をついた。

「こんな状況ですから、掃除する余裕がなかったのでしょうかね」

「まあ普通は魔物がうろついたりしたら大変だしな」

「はい。しかし、いくら小さな村だといっても、兵が送られてこないのは妙ですね」

カレンの言葉に、タマキは雑巾を持ったまま椅子に腰かけた。

「そうだな。魔物もおかしな感じだし、やっぱりこの国はおかしい。俺達が来た理由と関係あるかもな」

タマキとカレンはしばらくの間黙り込んだ。そこにドアがノックされる音が響いた。タマキがドアを開けると、アディソンが立っていた。

「どうしたんだ？」

「村のことに一番詳しいのは私なので」

「そういうことなら、入ってください」

カレンがアディソンを迎え入れた。三人はそれぞれ適当に椅子に座った。

それからカレンが村のことから、魔物に関することまで、徹底的に質問をした。

「この村のことは大体わかりました。次はこのロベイル王国に関する噂を聞かせてもらいたいのですが」

「噂、ですか？」

「そうです。何でもかまいません」

「最近は何かおかしいらしいです。なんでも女王様が何か妙なことに熱中しているとか、そういう噂があります」

「どこでも聞く噂話だな」

そう言ったタマキにカレンもうなずいた。

「具体的なことがなにもわからないのは気分がよくないですね」

「そうだな。ま、その話はいいや。それよりアディソン、食料を売って欲しいんだけどさ」

「食料、ですか？ それはもちろん大丈夫ですが、お金を払っていただけるんですか？」

「もちろんだろ。じゃあ、明日頼むよ」

「はい、わかりました」

アディソンはそう言うと言ち上がって出て行った。タマキとカレンも立ち上がって室内の整理を再開した。

夜になる頃には、家の中はすっかり整理されて見違えるようになっていた。

「そろそろ夕食にしよう」

タマキは体を伸ばして、さっきから火にかけている鍋のほうに近づいていった。カレンは食器類をテーブルの上に並べ始めた。

とにかく色々入ったシチューを大きな容器によそってから二人で食べ始めた。

「それにしても、どこに行っても同じ噂ばかりだな」

「そうですね。本来の目的を隠すためにわざと流している噂かもしれません」

「やっぱり実際に見てこないと駄目か」

「私が行きましょうか」

「いや、俺が見てくるよ。カレンはこっちのほうを頼む」

「わかりました。気をつけてくださいね」

「ちよつと見てくるだけだから大丈夫だよ。明日の朝出発する」

それから二人は部屋の隅に寝具を敷いてから、並んで眠りについた。

翌日、朝一番にタマキは多少の食料だけ持って村を出て行った。

一人村に残ったカレンは事情をアディソンに話し、農地の巡回に向かった。

虜囚

朝を向かえ、部屋は寒くないはずなのに、塩焔恵美は自分の体を抱いて震えていた。

ある日突然おかしな世界に召喚されて、それからはほとんど軟禁されているので、いくら豪華な王宮らしき場所で、不便なことは何もなくても恵美はまったく安らげなかった。

「おはようございます」

今朝もいつものように侍女が部屋に入ってきた。手には朝食を載せたトレーを持っていて、そこにはスープの入った皿とパン、それとりんごのような果物が乗っていた。

侍女は足音を立てないようなゆっくりとした動作で、ベッドの脇の小さなテーブルにそのお盆を置いた。

「必要なことがあればなんでもおっしゃってください」

そう言うってから頭を下げると侍女は静かに部屋を出て行った。

最初は着替えだなんだと色々やらされそうになったが、恵美がそれを強く拒絶したので、今はこれだけになっている。

恵美はベッドからゆっくりと起きると、スリッパを履いて朝食の置かれたテーブルに歩いた。

とりあえずスプーンを手にとって、野菜がたっぷり入ったミルク風味のスープを口に運んだ。元気ならおいしいと感じただろうが、今の恵美にその余裕はなかった。

とにかく、食べないと駄目だという意識だけで出されたものは全部胃袋に入れた。

その後は用意されている服、やたらと長いワンピースみたいなものに着替えてベッドに座り込んだ。何かをすべきなのだろうが、何も思いつかないし、何かができるとも思えなかった。

「エミ、気分はどうだ？」

いきなりドアが開けられ、豪華だが派手すぎない格好をした笑顔

の女が一人で部屋に入ってきた。

「あまりよくはありません。女王様」

女の笑顔とは対照的に、恵美は無表情だった。だが、女は笑顔を崩さない。

「私のことはキアンと呼んでくれてかまわないと言っているだろう」「いえ」

恵美はそれだけ言っつつむいた。キアンと名乗った女はその向かい側の椅子に腰かけた。顔は相変わらず気味が悪いくらい笑顔。「どうだ、そろそろ我がロベイル王国をもっと見てみないか？」

恵美はそれに無言で首を横に振った。キアンはふっと息を吐いた。「今回のことはエミには悪いことだっただろう。だが、何度も言っただよつに、我々には必要なことだったのを理解して欲しい」

「何で、私だったんですか」

「それも何度も言っただろう。エミの力が必要なんだ」

「でも、私には力なんて」

「間違いなくある」

キアンは恵美の言葉を力強く遮った。

「今はまだそうでなくても、かならず力が発現する時がくるはずだ。エミは救世主になれるのだぞ」

そんな言葉も恵美にはまったく届いてない、というか、それは恵美の求めているものではなかった。

キアンはうつむいて黙り込んだ恵美をしばらく見ていたが、おもむろに立ち上がった。

「あまり部屋に閉じこもっていると体に毒だ。声をかければ案内の者がいるから自由にするといい」

そう言っキアンは立ち上がると足早に部屋を出て行った。

部屋に残された恵美は窓に近づいて外を眺めた。そこには城下町が広がっていて、たくさんの人が生活しているのが想像できたが、恵美にはそれがひどく遠いものを感じられた。

しばらくそうしていると、窓の縁に真っ黒な小さい鳥みたいなも

のがとまっているのに気がついた。

恵美はそれになんとも言えない妙な雰囲気を感じた。鳥はそのまま恵美をじっと見つめていたが、いきなり空気に溶け込むようにして消えてしまった。

「え？」

恵美は思わず窓に手をついて鳥がいた場所を見つめた。そこには最初から何もなかったとしか思えなかった。

ロベイル王国首都

「何か見つかったか」

サモンの声に、ベッドに座って目を閉じていたタマキは息を吐きながら目を開けた。

「いや、はっきりとはわからない。まあ怪しい感じのところは何ヶ所が見つかったけどな」

「それで、どうするつもりだ」

「そうだな」

タマキは立ち上がって室内を見回した。そこそこの宿の一室なので、それなりの広さがある。

「とりあえず、次は人から情報収集だ。あの鳥さんは便利だけど、何を探すかわかってないと駄目だしな」

「わかってるなら最初から楽をしようとするな」

「はいはい」

タマキは生返事をして部屋を出た。下の食堂件居酒屋にはまだ今の時間ではあまり人はいなかった。

「ここは夜だな」

それだけつぶやいて宿を出た。

そして向かった先は町の中心にある公園。今は露天がたくさん出店されていて、多くの人で賑わっていた。

タマキはとりあえずテーブルと椅子を並べて軽食を売っている店に行った。なにやら色々並んでいる。

「なにかおすすめは？」

「はいよ」

店の親父は串に刺さったフランクフルトみたいなものを差し出した。タマキは硬貨と引き換えにそれを受け取って、適当なテーブルまで行つて椅子に座った。

それから周囲の会話を聞くことに集中した。

「あの噂聞いた？ 最近はこの町にも魔物が出るとか」

「聞いた聞いた、なんでも夜のアップータウンを魔物がうろついてるらしいじゃない」

「まったく、警備兵は何をしてるんだかね」

そこでタマキは影を自分の足元に戻した。

「これは面白そうだな」

それだけつぶやくと、タマキはフランクフルトを一気に食べて立ち上がり、そこらへんの通行人にアップータウンまでの道を聞いた。そして目的地に到着してみると、そこはそれなりに高級な住宅街で、警備の兵士が巡回もしていた。

タマキはそこをざっと歩き回って様子を見てから、ベンチに腰かけた。

「おいサモン。お前は何か感じたか？」

「なにやら魔力の残滓はあったようだが、それだけではなんとも言えんな」

「じゃあ、夜になるまで待ってみるか」

「おい、そんなことが目的だったのか？」

「いや、違うけど。まあ面白そうじゃないか」

「相変わらずもの好きなことだ。まあ我はかまわんがな」

「じゃあ、適当に宿に戻って夜にそなえないとな」

それからタマキは町を少しづらついでから宿に戻った。

日が完全に落ちるまで部屋で昼寝をしてから、タマキは下に降りていった。さつきとは違って、今は多くの人でこった返していた。

タマキは適当な席に座って、飲み物を注文してから隣の若い大工風の男に声をかけた。

「仕事帰りがい」

「え、ああ。あんたは？」

「俺は旅をしてるんだ」

「へえ旅か。それは面白そうだ」

「まあ、それなりに楽しいけどね。それより、最近この町の中に魔

物が出るって噂を聞いたんだけどさ」

「ああ、アップータウンの話か。特に被害は出てないみたいだし、警備のほうもあんまり力いれてない雰囲気だな」

「ふーん。なんか他にはおもしろそうな噂はないかい？」

そうしてタマキはしばらく男と話してから宿を出た。夜の町は人通りが少なく、何となく怪しい雰囲気漂っている。そんな中をタマキは黙ってアップータウンのほうに向かった。

アップータウンでは警備兵が巡回していて、タマキのような旅人がうろつくのはあまり都合がよくなさそうな雰囲気だった。

「これは上から行くか」

そうつぶやいて、タマキは辺りを見回して人がいないのを確認すると、手近な家の屋根まで軽やかに飛び上がった。

そのまま音もなく屋根から屋根に飛び移って、一番背の高い家の屋根の縁に腰かけた。

「さて、何が出るのか楽しみだな」

「どうだろうな」

そして、それなりに時間が経ち、すでにほとんどの住人が眠りについた頃、タマキは何かの気配を感じた。

「やつとお出ましだな」

そうつぶやいてからタマキは立ち上がると、気配を感じた方向に跳躍した。数分後、入り組んだ路地でタマキは噂の魔物と対峙していた。

「こいつは、いわいる狼男ってやつか？」

「ああ、ウェアウルフだな」

「確かすごいタフな奴だよな」

「この世界の奴にしてはな」

「で、元は人間か」

サモンとのんきに会話するタマキの前のウェアウルフは、口からよだれを垂らしながらタマキのことを威嚇するように低く唸っている。タマキはそれにたいして、挑発するように手招きをした。

「来いよ、狼さん」

それに応じたのか、ウェアウルフは地面を蹴ってタマキに跳びかった。

「バースト！」

タマキの手から放たれた爆発でその突進は弾き返された。その勢いのまま壁に叩きつけられたウェアウルフだったが、まるで何事もなかったかのように立ち上がった。

「なるほど、タフだな」

タマキはそうつぶやいてから、手をその方向に向けた。

「マシンガンライトニングボルト！」

小さな雷の矢が連続で放たれ、次々とウェアウルフに着弾した。だが、それをものともしない感じで、ウェアウルフは前進する。

そして、雷の矢が途切れたタイミングで前方に勢いよく跳躍しようとした。

「おっと、そいつは遠慮してもらおうか」

いつの間にかその背後にまわっていたタマキがウェアウルフの背中に手を置いた。

「プロテクション！ 反転！」

魔力で作られた盾がウェアウルフの全身を覆い、その動きを拘束した。

「さてと、ここじゃ人が来るだろうし、場所を変えようか」

そう言ったタマキは、屋根の上に跳んでからウェアウルフの体を魔力を使ってそこまで引つ張りあげた。

「後はこいつが人間に戻るまで待てばいいわけだな」

「さっさと始末すればいいだろう」

「それじゃ面白くないし、俺は人間を殺す気はないよ。それに、こなくなった事情は知りたいしな」

「まあ好きにしろ」

タマキは屋根の上に座って、じつくりと待つことにした。

狼の呪い

日が昇ると、拘束されていたウェアウルフは人の形になっていた。タマキは魔法を解除してそのぐったりしている男をじつくりと観察した。

男は元気な状態ならいかにも精力的な感じのひげ面の中年の男で、身なりもなかなか高級そうだった。

「さて、まずはあんたの名前を聞かせてもらおうか。ああ、俺はタマキ、たんなる旅人だ」

中年の男はぼんやりとタマキの言うことを聞いてから、自分がおかれている状況をやっと認識したようで、その顔から血の気が引いていった。

「その前に落ち着ける場所に行ったほうがよさそうだな」

そう言うのとタマキは男を抱えて屋根から人気のない路地に飛び降りた。

「歩けるか？」

「あ、ああ」

男はそう返事をする、なんとか自分の足で立った。

「さて、この時間じゃ店も開いてないし、どこに行ったもんかな」

「それなら、私の店がいい。この時間ならまだ誰も来ていない」

「そりゃ好都合だ。案内を頼むよ」

そういうわけで、中年の男が先導して二人は中々立派な店舗に到着した。

「大きな店だな。あんたの店なのか」

「そうだ。入ってくれ」

男が鍵を開けて店内に入ると、そこには様々な家具の類が置かれていた。

「家具屋か、けっこうよさそうな物が揃ってるな」

タマキの言葉に男は少し胸を張った。

「この王国で最高の店だ。私の誇りだよ」

そう言いながら男は店の置くの扉を開けた。そこは事務所らしく、いくつかの机が並んでいた。二人は応接用のテーブルに向かい合って座った。

「それじゃ、あらためて自己紹介から始めようか」

「ああ、私はロドック。見ての通り、この町で商売をやっているんだ」

「で、なんであんな狼になってるんだ？」

タマキの質問に、ロドックは深く深くため息をついた。

「一週間ほど前からだ。毎日夜になると体があの狼になってしまうようになった」

「ほう。その間はあるたの意識はなくなるのか？」

「狼に変わった直後と、戻る直前以外はそうだ。今のところ人を傷つけたりはしてないらしいが、いつまでそうしていられるか」

「呪いの一種だろうが、そういうことなら、俺がなんとかできるかもな」

タマキの一言にロドックは身を乗り出した。

「本当か！」

「まあ、魔法に関してはけっこうできるからな。ところで、あんたはもしその狼の力が自分で自由にできるようになったら、どうする？」

「こんな力など欲しくもない。大体あんな姿では商売が続けられん」

「わかった、じゃあまた夕方に会おう。どこか邪魔が入らない場所を知らないか」

「それなら今日は店を早めに閉めておこう。ここでいいのか？」

「ああ、問題ない。じゃあ、また後でな」

タマキはそう言ってその場を立ち去った。そして、首から下げたアミュレットをいじりながら歩き出した。

「さて、一番いいのは呪いの元を探すことだけど、これは面倒くさいからな、何かいい方法はないか？」

「お前の魔力で呪いを押さえ込んでやればいいだろう。まああれは普通の人間だから、せいぜい狼になった時に意識を失わない程度だろうがな」

「やっぱり、インスタントにできるのはそんなもんだよな。まあとりあえずはそれでいいだろ」

タマキは頭をかいてあくびをしてから、足を宿の方向に向けた。「とりあえず寝よう。徹夜で疲れた」

そして夕方。タマキは体を伸ばしながらロドックの店に向かった。すでに閉店していて人気のなくなった店の前ではロドックが不安そうな様子で立っている。

「それじゃ、始めよう」

タマキがそう言うのと、ロドックがドアを開けて二人は店内に入った。それからロドックだけが椅子に座った。

「さて、これからあんたの狼化をなんとかしようというわけだが、最初に言っておくと、完璧には解決できない」

「そうなのか」

ロドックは明らかに落ち込んだ。

「まあ、呪いの元を断てればそれでいいんだが、そんなこともしてられないから応急措置だ。俺の魔力でその呪いを押さえ込めば、あんたが狼になった時も意識を失わずに普通に行動できるようになるはずだ」

「つまり、少なくとも町を騒がせたりすることはなくなるのか。とりあえずはそれで十分だ、頼む」

そこまで言ってからロドックは何かを思いついたような表情をした。

「そつえば礼の話をしていなかったな。何か欲しいものはないのか？」

「ものはないな。欲しいのは、情報ってところか」

「情報？」

「ああ、最近王宮絡みで色んな噂があるだろ。それに関して噂じゃない、もっと詳しい話が知りたいんだよ」

「それなら私の得意とするところだ。協力させてもらおう」

「決まりだな。じゃ、始めよう」

そう言つてタマキはロドックの胸元に手を伸ばした。

「落ち着いて、動かないようにしてくれ」

そのまま手をロドックの胸元に置いて目を閉じる。タマキはロドックの中の呪いを探り、それを拘束するような形で自分の魔力をゆつくりと流し込んでいった。

しばらくしてからその手を放し、一歩下がった。

「これで終わりだ」

ロドックは少し拍子抜けしたような表情をした。

「もう終わりなのか？　なんともないが」

「まあなんともないようにしたからな。これで狼になってもあんたの思い通りに動けるはずだから、部屋にでも閉じこもってればいい」

「ああ、そうしよう」

「じゃあ、明日また会おう。ここでいいか？」

「いや、宿を教えておいてくれればこちらから迎えを寄越そう」

「そうか、じゃ、楽しみにしてる」

それから宿の名前だけ告げてタマキは店からさっさと出て行ってしまった。

噂の掘り下げ

翌日の夕方、宿で待っているタマキのところにロドックの使いが来た。

「タマキ様ですね。私はロドックさんからの使いの者ですが」

「ああ、待ってたよ」

二人で宿の外に出てみると、そこには地味だがしっかりとした感じの馬車があった。

「どうぞ」

使いの男はタマキを先に馬車に乗せてから、御者に声をかけて自分も乗り込んだ。馬車が出発してしばらく経ってから、男はタマキに話しかけた。

「最近ロドックさんは様子がおかしかったんですけど、今朝からいつもの調子に戻ったんです。あなたが関係しているんでしょうか？」

「いつもの調子っていうことは、うまくいったんだな、そりゃよかった。ところで、これは店に向かっているのか？」

「いえ、自宅のほうです」

「自宅ね。それはアップタウンのほうかい」

「そうです。ロドックさんはこの町でも有数の商人ですからね」

「高級な家にも住めるわけだ。でもあんまり成金趣味な感じはしないな」

「いつも商売のことばかり考えている人ですから、そういうことには興味がないんですよ。アップタウンに住むのも裕福な顧客との取引のためです」

「ふうん。面白いな」

そうやって話しているうちに、馬車は目的地に到着した。

「到着しました」

「ああ、ありがとう」

タマキは馬車から降りると、けっこうな豪邸の前に立った。

「なかなかたいしたもんだな」

「しばらくお待ちください」

使いの男はそう言つて家の中に入っていった。しばらくして、ロドックが自らタマキを迎えに出てきた。

「よく来てくれた！ さあ、入ってくれ」

ロドックは満面の笑顔でタマキを家に迎え入れ、自室まで連れて行つた。二人は向かい合わせになったソファに腰かけた。

「まず礼を言わせてもらいたい。君のおかげで狼になつても自分の意思で行動できたから、町をうるついたりしなくて済んだ」

「それはよかった。で、俺の話はどうか」

「それなら早速動いている。いくつか噂を仕入れたが」

「聞かせてくれ」

「まず、最近は兵士達が城に集められたり、どこかに派遣されたりしているらしい。だからこの町ですら警備が手薄になっている」

「でも首都だろう。ここが手薄になるほど兵士をどこかに派遣するなんて、ちよつとありえないか」

「そうなんだ、王宮で何かがあつたとは思えない。口さがない連中は女王様が乱心したなどと言うが」

「女王様ご乱心ね。でもそれなら、もつと何か大事になつてもよさそうだけど、もしかしたら、何かが起こり始めていて、それに対応するために必死になつてゐるのかも」

タマキの言葉にロドックは首をかしげた。

「その様子だと、何か知つてゐるのか？」

「いや、知つてたらわざわざあんたに聞いたりしないだろ」

「では、なぜただの旅人である君がこんなことに興味を持つ？」

「俺の同郷の人間がこの王国で厄介なことに巻き込まれてる、んじゃないかと思つてね」

ロドックはそれを聞いて一瞬不思議そうな表情を浮かべたが、すぐにそれは引つ込めた。

「それだけのためにここに來たのか？」

「そうだ。まあ俺の出身は特別だから、いるだけで大変な事なんだよ」

「それは、もしかして」

何か思い当たることがあったようで、ロドックはタマキの顔をじつと見る。

「タマキはノーデルシア王国から来たのか？」

タマキは何も言わずに、にやりと笑っただけだった。ロドックはその表情を見て、それ以上そのことに関して何か言おうとはしなかった。

「そして噂はもう一つある。何でも王宮の魔導師が災厄の到来を予言したっていう噂だ」

「そんな噂まであるのか。終末感がすごいな」

「信じているものはあまりいないはずだ。今はまだな」

「よくわかった。ありがとうな」

タマキは立ち上がったが、何かを思い出した様子で、腰に付けているカード入れから、数十枚のカードを取り出してテーブルの上に置いた。

「このカードには俺の魔力を込めてある。一日一枚、いつも身に付けるようにしておけば、ひょっとしたら狼になるのを防げるようになるかもしれないな」

「そうか、ありがとう。ところで、ここにはいつまで滞在するんだ？」

「とりあえず今回はこれくらいにしておこうと思ってる。ああ、ひょっとしたら俺の連れが一人で来るかもしれないから、その時はよろしく」

「その人の名前は」

「カレンだ。眼鏡をかけてる。まあ会えばわかるよ」

「わかった、楽しみにしておこう」

ロドックは笑いを噛み殺しながら、立ち上がって手を差し出した。タマキはその手を軽く握り返した。

「じゃ、また」

タマキはロドックの屋敷を出てまっすぐ宿に戻った。

「これからどうするんだ？」

部屋に入るとサモンが話しかけてきた。

「もちろん村に戻るさ。ちよっと見てくるって言ってきたしな」

「そうか」

翌日、タマキは宿を引き払うと、食料だけ調達して村に向かって出発した。

平和な村と魔物の出所

タマキが村に到着すると、どうやって知ったのか、カレンが迎えに来ていた。

「お帰りなさい」

「ただいま。村のほうはどうだった？」

「大したことはありません。魔物は多少でしたが、対応できないほどではありませんでしたから」

「そっか」

そこに村の子供が数人走ってきて、カレンの手や足に抱きついた。

「お姉ちゃん、一緒に遊ぼうよ」

「それより縫い物を教えて」

「それはまたあとでお願いしますね」

カレンも微笑を浮かべて子供に應對していた。タマキはその光景を見て頭をかいているだけ。

「すっかり人気者みたいだな。おいお前ら、遊びなら俺が付き合つてやるよ」

タマキはそう言つと子供を二人抱えあげた。

「どこに行きたい？」

子供は少し戸惑つたが、すぐに氣を取り直した。

「じゃあ、丘のほうに行こう！」

「よしきた！　じゃあカレン、また後でな」

それだけ言つてタマキは子供と一緒に走つていった。カレンはそれを見送りながら、優しい笑みを浮かべていた。

そして夕方。借りている家でタマキとカレンはのんびりした雰囲気に向かい合つて座っていた。

「それで、首都のほうはどうだったんですか？」

「けっこう収穫はあったよ。狼男に会つたりしたし」

「ウェアウルフですか、また変わったものが出ましたね。それでど

うしたんですか」

「まあ、とりあえず狼になっても本人の意思で動けるようにしてきたよ。おかげで貴重な協力者も確保できたし」

「どのような人なのだろうか」

「家具屋の経営者のおっさんだよ。けっこう羽振りはよくて、話もわかる感じの。勘もいいみたいで、俺の正体にも感づいたようだけど」

「それは、大丈夫でしょうか」

「平気だと思うけどな、狼化の呪いなんて他では話せないだろうしさ。あとは勘だ」

「またそんなことを」

カレンは眼鏡の位置を直してため息をついた。

「でも俺の勘はよく当たるだろ」

「そうですね、他にあてもありませんし。ところで目当ての人は見つかったんですか？」

「何人か候補はいるけど、まだなんとも。それで、こっちの村のほうの見通しはどうか」

「魔物がどこから現れているのかをつきとめる必要があります。これは何者かが仕掛けていることだと思えませんか」

「そうか、こっちのほうを先に片付けないと思うようには動けないよな。その場所の見当はついてるのか？」

「それが、どうやら魔物の発生地点は移動しているようなんです」

「それはやつかいだな。いつそのこと、ここらへん全部焼き払うかやめてください」

カレンの鋭い一言にタマキは頭をかいて笑った。

「いや、冗談だよ。でもどうしようか、カレンにも首都のほうを見に行つて欲しいと思つてただけだな」

「先にこちらの問題に集中すべきだと思います」

「そうだな、そうしよう」

そう言つてタマキは立ち上がると、首をぐるっとまわした。

「俺は先に寝させてもらっよ」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ」

そして翌朝。

「タマキさん、朝ですよ」

「ん？ ああ」

「もう朝食の用意はできています」

「そうか、悪いな」

タマキとカレンは食卓について、パンと焼いたベーコンの軽い朝食を始めた。

「で、どこから手をつけようか」

「魔物が出るまで待ったほうがいいのではないですか。魔物が出てくれば、その方向に発生源があることが推測できますから」

「そうだな。じゃあ、俺はその発生源のほうに集中するよ」

「はい。魔物は私が対応しますから、そちらのほうはお願いします」

「ああ、任せろ」

朝食を終えた二人は、まず村のはずれに向かった。タマキは周囲を見回してから、アミュレットをつかんだ。

「おい、起きてるか」

「当然だ。何か用か？」

「魔物の発生源を見つけるから、ちょっと力を貸せよ」

「ああ、好きにしる」

タマキは目をつぶってマントに手をかけた。すると、その体を中心として闇の波動が生じて、マントが深い闇に染まっていった。

タマキの目が開かれると同時に、その波動はおさまったが、マントは闇に染まり、闇そのものともいえる状態のままだった。カレンはそれを見ると魔物を見つけるために歩き出した。

数十分後、巨大なオーガが三体現れると、カレンとタマキは目配せをして、タマキは一気に上空に飛び上がっていった。

一方、カレンは眼鏡を外してから腰の剣を抜き、オーガ達と対峙

した。

「すみませんが、今回はすぐに終わらせてもらいますよ」

剣とカレンの髪、そして瞳が白銀に輝く。そして、その足が地面を蹴り、目視できないほどのスピードでオーガ達の間を切り裂き、気がついたときにはその後ろに立って剣を鞘に収めていた。

オーガはどこを切られたかわからず、まるで何もなかったかのように塵となって消滅した。それからカレンは上空を見上げた。

「頼みます」

頼まれた上空のタマキは、早速魔物の発生源らしきものを見つけていた。

「あれは転移門だな」

「それはお前の力で使えるやつと同じなのか？」

「いや、それよりも大きい。お前がもつとしっかりしてればあれくらいは簡単に使えるはずだがな」

「うるさいな、少し黙ってる。行くぞ！」

サモンの小言を遮ったタマキは一気にその転移門目掛けて降下する。近くで見ると、それはなんとというか、空間が歪んでいるとしか形容できないものだった。

「これはまた妙なものだな」

サモンの言葉にタマキは不思議そうな表情になった。

「お前が知らないものなのか？」

「ああ、出来が悪くてな」

「そうかい。まあさっさと閉じようと思うんだが、方法はわかるか？」

「魔力をぶつければ消滅するはずだ」

「じゃ、やってみるか」

タマキは片足を一步引いて構えると、拳に自分の魔力を集中させて、その歪みに突きを叩き込んだ。

歪みはあっさりとそれに打ち砕かれ、その場所はまるで何もなかったかのように正常な状態に戻っていた。

ロベイル王国の闇

恵美はなぜかずっとあの黒い鳥のことが気になっていた。朝食の後、椅子を窓の前に持つていつてぼんやりしていたが、突然部屋にノックの音が響いた。

「失礼しますよ」

ドアが開けられると、そこには長髪の顔に薄ら笑いを貼り付けたような、ローブを着た男が立っていた。

「ご機嫌いかがです？ エミ様」

恵美はこの男とはほとんど会ったことがなかったが、自分が召喚された時に女王の横に立っていたのは覚えていた。それ以降、こうしてたまに突然訪ねてくる。

「なんの用ですか」

「そう硬くならないでもらえるとありがたいですね」

男はそう言うのと全く遠慮せずに部屋の中をぐるぐると歩き回った。「少しほこりっぽくはありませんか？ きちんと侍女に掃除させるべきでしょう」

「別にいいんです」

「よくはないと思いますけどね。ところで、魔法の訓練はやってみないんですか？ この国の魔法は大したことないものですがね」

「そんなこと、やりたくありません」

男は立ち止まって、恵美の顔をじつと見た。

「あなたが元の世界に帰る方法など、この部屋にいたところで見つけたりはしませんよ。まあ、出たところでそんなものはありませんけど」

「何をしている！」

そこにキアンが勢いよく部屋に入ってくると、男を睨みつけ、恵美との間に立ち塞がった。

「私はこの部屋にお前が来ることを許可してはいないぞ、ファスマ

イド」

ファスマイドと呼ばれた男はキアンの剣幕をいなすような笑顔で軽く頭を下げた。

「これは失礼しました、女王陛下。それでは僕はこのあたりで下がらせてもらいましょう」

そして、部屋にはキアンと恵美の二人だけが残された。キアンは振り返ると、すでにその表情からさっきまでの激しい感情は消えていた。

「すまなかつたな」

「いえ」

「あの男が簡単に入れないように対策は講じておこう」

それだけ言うのとキアンは足早に部屋を出て行った。ドアが閉まる音を聞いた恵美は椅子から立ち上がった。

部屋に閉じこもっていたところで安心なんてできない。それは最初からわかつているべきことだったが、さっきのことで嫌でも思い知らされた。

だからといって、ここから外に出ることはできそうにないし、出たところでたった一人でこんな見知らぬ世界でやっていけるとは到底思えなかった。

さっきのファスマイドという男が言っていたように、魔法というのを覚えれば、ひょっとしたら何かが開けてくるのかもしれない。その日はそうして部屋の中をうろろしながら、ずっと考え事をしてすごした。

翌朝、早く起きて着替えておいて、侍女が来るのをベッドに座って待った。

「おはようございます」

「頼みがあるんだけど」

侍女がトレーをテーブルに置く前に恵美は思い切って口を開いた。

「どういった御用でしょうか？」

「女王様に会わせてもらいたいの」

「わかりました」

侍女はトレイをテーブルに置いてから頭を下げて部屋を出て行った。恵美はとりあえず朝食を食べてから、外を眺めて自分の行動の結果が出るのを待った。

しばらくして、部屋のドアが開き、心なしか明るい表情のキアンが部屋に入ってきた。

「どうした？ 何か欲しいものでもあるのか？」

「魔法でも武器の使い方でもいいから、教えて欲しいんです」

一瞬だけ複雑な表情を浮かべたキアンだったが、すぐにそれは笑顔に上塗りされた。

「とにかく何かをしようという気になってくれて嬉しい。早速手配させよう」

「ありがとうございます」

「他に欲しいものか、やりたいことはないか？」

「いいえ、今はそれだけで十分です」

「そうか。これからは遠慮せずに何でも言ってくれ」

キアンは部屋を出て行き、恵美はとにかくこの世界での一步を踏み出したことに、何か新しいような気分になっていた。

恵美の部屋を出て廊下を歩くキアンだったが、その前方にファスマイドが立っているのを見ると、顔を歪めた。

「何を笑っている」

「いえ、エミ様がやる気を出されたようで何よりでした。これで女王様の気も少しは軽くなりますかね？」

「黙れ」

それだけ言ってキアンは歩き出したが、ファスマイドはそれを見てにやりと笑った。

「そろそろ観念してはいかがです？」

だが、キアンは振り返らずにすれ違いざまに一言ぶんだけ唇を動かした。

「貴様の思うようにはいかんぞ」

二人で首都到着

「魔物はこれで大丈夫だと思うけど、いざという時のためにこれを渡しておく」

アデイソンはタマキの差し出した数十枚のカードを受け取り、それを妙な表情で見つめた。

「これはなんですか？」

「それはインスタントスペルカードって言ってね、一度だけ決まった魔法が使える代物だ」

「魔法が、誰にでもですか？」

「そうだ。ほとんど攻撃系のカードにしておいたから、使うときには注意してくれてよ。これがファイアボール、爆発する火の玉を撃つ魔法だ。小さい魔物が複数出たときにはこれがいいけど、周りに被害がでるから注意してくれ。こっちはアイスバイト、氷の牙を撃つ魔法だ。打撃力があるから、でかい魔物に向いてるし、周りへの被害も出にくい。そしてこれがライトニングボルト、雷の矢を撃つ魔法でまあ二つの中間くらいの特性って感じだな」

アデイソンはタマキの説明にうなずきながらカードを確認した。

「それで、攻撃系以外はまずヒーリング、これは怪我を治せる魔法だ。それとプロテクション、魔力で盾を作り出すんだが、まあこのあたりの魔物なら、まず破られないはずだ。持続時間はそれほどでもないけどな」

タマキの言った順番でアデイソンはカードを全て確認し終え、顔を上げた。

「それで、これはどうやって使うのでしょうか？」

「カードを持って、発動って言えばそれでいい。使う対象をしつかり見て、集中してやれば大体うまくいくはずだ」

「わかりました」

「ああ、それからまた戻ってくると思うから、あの家はそのままに

しておいてくれるか？」

「はい。出発はいつなんでしょうか」

「準備もあるし、明日出発するよ」

「そういうことなら、お気をつけて」

タマキはアディソンに見送られてその家を後にした。

翌朝、荷馬車に荷物を積み込んだタマキとカレンは村人達に見送られて出発した。しばらくして、御者台のカレンは思い出したように口を開いた。

「タマキさん、首都に到着してからはどういった計画があるんですか？」

「いやー、どうしようか今考えてるんだよ」

「目当ての方が王宮にいるのが確実なら、私が潜入してもいいと思います」

「そんなことできるの？」

「方法ならいくらでもあります」

「まあ、それは着いてから考えればいいと思うけど」

「それもそうですね。しっかり調べてから方策を考えましょう」

数日後、首都に到着した二人はとりあえず荷馬車を厩舎に預けてロドックの店に向かった。店内に入ると、ちょうど以前タマキをロドックの屋敷に案内した男がいた。

「よお、久しぶり」

「これはお久しぶりです。また何か御用でしょうか？」

「ああ、ロドックのおっさんはいるかい」

「奥にいますので、少々お待ちください」

男は店の奥に入っていて、しばらくするとロドックがにこやかな表情で出てきた。

「よく来てくれた」

ロドックはタマキの肩を叩いてから、後ろに立つカレンを見てうなずいた。

「そちらのカレンさんもようこそ、歓迎しますよ」

「色々お世話になると思いますので、よろしく願います」

丁寧に頭を下げるカレンにロドックは機嫌が良さそうな笑顔を浮かべた。

「こちらこそよろしく頼む。それより二人とも、宿はもう決まっているのか？」

「いや、まだだけど」

「それなら私のほうで用意させよう。それでかまわない？」

「そうだな、せっかくだから頼むとしよう。他にも頼みごとが出てくると思うけど、まあそれはまた後で話すよ」

「では仕事が終わった後に話そう。おい、この二人を宿に案内してくれ」

ロドックはさっきの男を呼んだ。

それからタマキとカレンの二人は、町の中でも質の高そうな宿に案内され、中々豪華な部屋に立っていた。

「これほどの宿をすぐに用意できるということは、確かに、かなりの有力な商人なのでしょうね」

「そうだなー、これは色々期待できそうだ」

タマキとカレンは豪華なソファーに並んで座ってくつろいだ。

「それにしても、どうもこの町は雰囲気が妙ですね」

「そうかな？ 確かに色々おかしいところはあるけど、それでもまだ平穩じゃないか？」

「どうも所々に不自然な魔力の痕跡が感じられるんです。タマキさんは感じませんでしたか？」

「いや、気にしてなかったな。サモン、お前は気づいたか？」

「いいや、そんなゴミは気にしてない」

「ゴミなどと断言はできませんよ」

「確かにそうかもな。でも、今はそれより優先しなきゃならないことがあるし」

「そうですね。そうすればわかることかもしれません」

そこでタマキは立ち上がった。

「まあその前にそろそろ昼だし飯にしよう。こんな立派なところなんだからいいもの出すだろ」

カレンも一つため息をついて立ち上がった。

「集中して考えられる環境は必要ですね」

食事はタマキが予想した通り、豪華で申し分のないものだった。

町を散策

昼食を済ませたカレンとタマキだったが、休むことはせずに二人で出かけることにした。

「どこに行くんだよ」

「とりあえず、できるだけこの町のことを頭に入れておく必要があると思います」

「ああ、そうだな。俺はそこらへんあんまり調べなかったし」

「とりあえず、適当に散歩をしましょうか。詳しいことはあのロドックさんに聞けばいいと思いますし」

「じゃ、どこから見てみる？」

「市場がいいですね。色々な人が集まる場所ですから、この町を知るのには最適だと思います」

「誰でも飯は食わなきゃ駄目だもん」

人に道を聞き、二人が市場に到着してみると、そこは食べ物から雑貨品まで様々なものが売られていて、非常に活気があった。

「にぎやかだな。この前も来ればよかったよ」

「しかし、ここではゆっくり噂を聞くようなことはできませんから」

「それもそうか」

それから二人は色々な店を冷やかしながら市場を散策した。

「これ良さそうじゃないか？」

タマキは骨董品を扱っている店でマグカップ的なものを手に取っていた。

「別に足りていると思いますが」

「いや、予備があってもいいじゃないか」

「予備ならもうあるじゃありませんか」

「いや、それは来客用ってことでさ」

「それもあります。そもそも二人旅としては荷物が多いんですから、これ以上増やすこともないと思います」

「それもそうかなあ」

タマキは渋々カップを元に戻した。しかし、すぐにその隣に置いてあった腕輪に目をつけて手に取った。

「これは中々面白そうだな」

「そうですか？」

「ああ。これはいくらだい？」

タマキは店主に値段を聞いて、結局二束三文でその腕輪を買った。

「それはどんな効果があるんですか？」

「まあざっと見た感じ、魔力が蓄積できそうだよ。用途はどうだかわかんないけど、けっこう面白そうだ」

「掘り出し物かもしれないですね」

「他にもいい物はないもんな」

そう言いながら、タマキはあたりの店を手当たり次第にのぞきながら歩いた。

「目的はそういうことではありませんよ」

「いいじゃないか。ここんとこ忙しかったし、息抜きしようぜ」

カレンはその言葉にため息をついたが、すぐに微笑んだ。

「そうですね。これから忙しくなりそうですし、今は楽しみたいょうか」

「よし、いこう！」

タマキはカレンの腕を取って歩き出した。カレンもそれに遅れなように自分の腕を絡ませて、横に並んだ。

「お、あの店も面白そうだな」

「がらくたばかりに見えますけど」

楽しそうな二人の横を長髪にローブのファスマイドが通り過ぎた。そして振り返り、腕を組んで歩く二人を楽しそうな笑顔を浮かべて見送った。

「ノーデルシアの勇者、タマキ君か。実に面白い」

それだけつぶやいて、ファスマイドはそのまま雑踏の中に消えていった。

二人はそれには気づかずに買物を楽しんで、いつの間にか時間は夕方になっていた。

「そろそろ宿に帰ろうか」

「そうですね。迎えが来るんですか？」

「そのはずだけど」

「では、早めに戻ったほうがよさそうですね」

「そうしよう」

いつの間にか荷物を色々抱えていた二人は足早に宿に戻った。しかし、宿の前にはすでにタマキには見覚えのある馬車が止まっていた。

「少しだけ遅くなったみたいだな」

そう言ったタマキが宿の扉を開けて中に入ると、ちょうど使いの男と鉢合わせになった。

「ああ、ちよつと待っててくれ、荷物置いたらすぐに戻るから」

「はい。わかりました」

男はそう言つて外の馬車に向かった。タマキとカレンは荷物を部屋に置いてきて、そのまま馬車に向かい、乗り込んだ。

馬車はロドックの屋敷に到着し、今回は自室ではなく、二人は応接室のような場所に通された。

「とりあえず座ってくれ」

ロドックは立ち上がって二人を迎え入れると、ソファアをすすめて自分もゆつたりと腰を下ろした。

「それで、今回はどういうことなんだ？」

「今回は本腰を入れて王宮内部のことを調べようと思ってるんだ」

「どうやるつもりだ？」

「私が少し王宮に潜入しようかと考えていますが、侍女の服装はわかりますか？」

カレンの一言にロドックは意表をつかれたようだった。

「王宮には納品に行ったこともあるし、それはわかる者ならいるが」
「そういうことなら話は決まりだな、カレンの言う通りにしてくれ。」

大丈夫、あんたには迷惑はかけないし、この国にとっても悪い話じゃない」

「そ、そうか。そういうことなら、すぐに絵に描かせて届けさせよう」

「よろしく頼む。ところで、狼化はどうなったんだ」

タマキが狼のことを口に出すと、ロドックは顔全体に喜びを浮かべた。

「それが、一昨日から姿が変わらなくなったんだ」

「そうか、うまいこと押さえ込めたんだな。まあ、呪いをかけた相手がこれ以上なにもしなければそれでいいと思うけど、できるだけ早く呪いの元を探したほうがいいな」

「それは調べているが、協力してもらえないだろうか」

「ああ、別にいいよ。カレンが王宮を調べてる間は暇だろうしな」

「ありがとう！ どうだ、夕食を食べていけないか？」

タマキはカレンと一瞬目を合わせてから、首を横に振った。

「いや、今日は遠慮しておこう。昼間ずっと出かけてたし、ゆっくり休ませてもらうよ」

「そうか。それなら服装のことはできるだけ早く調べて知らせよう」

「よろしく」

「お願いします」

タマキとカレンはそう言ってソファから立ち上がった。

潜入開始

三日後の昼、カレンは鎧を脱いで自分で作った侍女の服に着替えてタマキの前に立っていた。

「なんか、こういう格好のカレンを見るのは久しぶりだな」

「初めて会った頃はいつもこんな感じでしたけどね」

「そうだな。で、王宮にはどうやって入るつもりなんだよ」

「夜のうちに忍び込もうかとも思いますが、他にもっと安全な方法があればそれでもいいですね」

「飛んでいくのは駄目なのか？」

「それは少々目立ちますから」

「じゃあ、せっかくだからロドックに相談してみようか」

「はい。着替えるので先に出ていてください」

二人はロドックの店に着くと、奥に通された。

「で、早速相談なんだが、なんかでかいものを城に納品したりする予定はないかな。人が入っても問題ないようなやつ」

「まさか、その中に入って城に潜入するつもりなのか？」

「いや、そういうのも面白いんじゃないかと思って」

「そんなに都合がいいものはないと思いますが」

とりあえずカレンがつっこみを入れた。ロドックもそれにうなずく。

「面白そうだが、そんな予定はないし、中身も調べられるから人を入れるなんていうのは難しいな」

「それは残念」

口ではそう言ったが、タマキはそれほど残念な様子でもなかった。「まあ、城に入るだけなら、うちの店員ということにすれば入れることは入れるが」

「人が足りなくなってしまうたら不審に思われるでしょうし、それはやめたほうがいいですね」

「そうだな、カレンの言う通りだ」

タマキはそう言っ腕を組んで考え込んだ。ロドックも同じようにしたが、カレンはそんな二人を見て、眼鏡をいったん外して拭いてからかけなおした。

「今夜行つてきます。お二人はロドックさんの呪いのことに集中されてはどうでしょうか？」

それを聞いてタマキは大きなため息をついた。

「まあ仕方がないか。じゃあ、頼むよ」

「はい。では準備があるので、私は先に失礼します」

カレンは男二人を残して店から出て行った。

「さて、あつちカレンに任せればいいとして、俺達は呪いの話をしようか。何か心当たりみたいなのは見つかったのかい？」

「それが、何もわからないんだ。そこまで恨みを買うような覚えもないし、そもそもこんな呪いなんていうものは一度も聞いたことがない」

「どこか変わった場所に行ったとか、変なもので家具を作ったとか、そういうのも無しか」

「ああ、ない」

「ふうん」

タマキはしばらく考えるようにして視線を宙にさまよわせていたが、何か思いついたらしく、ロドックの顔を見た。

「いたずら、だったりしてな」

「まさか！」

「なんでも考えておいたほうがいいと思うね。単発のいたずらなら今の状態で抑えられるだろうけど、そうじゃない場合は呪いが強くなるかもしれない。そうになったら、あんたの魔力の許容量はそれほど大きくないから、魔力で抑えるっていうのもいつまでもできない」
「しかし、どうすれば呪いの元を見つけられるのか、それがわからないんだ」

「一回限りのいたずらじゃなければ、呪いが強まったときに感知で

きるかもしれない。誰かがやってることなら、そろそろおかしいと気づいてもおかしくないからな」

「つまり、待つしかないのか」

「そういうことになるな。ま、気楽にいこう」

一方、カレンは王宮への潜入のために、城の周囲とそこに到達するまでの町をじっくりと観察していた。

夜になったら人通りが少なくなりそうな路地や、警備の巡回ルートなどをしっかりと頭に入れるころには、すでに時刻は夕方になっていた。

カレンが宿に戻ると、すでにタマキは帰ってきていてソファで横になっていた。

「あれ、これからまた出るのか？」

「はい」

返事をしながらカレンは武器の類を外して、鎧も脱いだ。それから、自分の荷物から黒い服を取り出すと、それを上から着て、ダガーとナイフだけを身に着けた。

さらに頭にも黒い布を巻いて、侍女服を布で包んでそれを背負った。それからしばらくの間、カレンはタマキの横に座って時間が過ぎるのを待った。

「それでは」

カレンがそう言って立ち上がると、同じように立ち上がったタマキが、一枚のカードをカレンの手に握らせた。

「緊急避難用だ。気をつけてくれよ」

そのままタマキは顔を近づけてカレンに軽くキスをした。カレンはそれに応えてから体を離すと窓のほうに歩いた。

「いつてきます」

「ああ、いつてらっしゃい」

カレンは窓を開けてそこから夜の町に踏み出していった。タマキはそれを見送ると、あくびを一つしてから夕食を食べに部屋を出た。宿を出たカレンは、人目につかないように、闇から闇に移動しな

がら城に近づいていった。城に近づくと、物陰に身を潜めて巡回をやりすごしてから、それにとりついてよじ登り始めた。

そのまま適当なバルコニーまで行くと、その部屋の中をうかがい、人の気配がないのを確認すると窓をこじ開けて慎重に中に入った。部屋は客室のようで、誰にも使われている気配はない。

まずカレンは背中中の包みから侍女服を取り出して、それに着替えた。もちろんダガーやナイフは見えないように身につけた。

王宮の見取り図などというものはなかったが、カレンの頭にはこういった建物が大体どういった構造なのかという情報はしっかりと入っていた。

一度深呼吸してから、カレンは廊下が続くドアをゆっくりと開けた。

隠密行動

カレンは誰にも見つからないように慎重に廊下を進んだ。侍女の格好をしているといっても、偽者なので目立ってはすぐにばれる可能性が高い。

目指すのは王宮の奥、警備が厳重なところ、のはず。

とりあえずは最初に入った部屋の並びの他の客室から始めることにした。カレンは髪に挿していたピンを二つ取ると、それを折り曲げてロックピックにした。

鍵穴を覗くのと耳を澄ませるのとで、中で起きている者がいないかどうかを確認してから、鍵を開けて部屋の中に入った。

そうして一通り客室を見てみたが、目当ての人物どころか誰もいなかった。ここから上に行くか下に行くか、カレンはほとんど考えずに上に向かった。

上の階に行くほど警備は厳重になっていき、カレンの行動が正しかったのは証明されたように見えた。その厳しい警備をカレンは影から影に移動してやりすごし、上の階を目指した。

最上階に到着すると、その一番奥の部屋の前には巡回の兵士よりも重厚な装備をした兵士が立っていた。

おそらく、女王か、それ以外なら目当ての人物がそこにいるのは間違いなかった。カレンは物陰からそこを窺っていたが、見張りが動く気配はない。

しばらく見ていると、その部屋のドアが開かれた。そこから出てきたのは、この国の女王、キアンだった。

キアンの表情は硬く、疲労の色が濃かった。強い女王という評判とは全く違う憔悴した姿で、ゆっくりとした足取りでカレンの隠れた場所の横を通り過ぎた。

女王がこんな時間に入る部屋で、何か悩みがありそうな表情を見ると、目当ての人物がその部屋にいる可能性が高い。

だが、カレンは焦らずに近くの部屋に近づいて、その中に誰もいないのを確認してから鍵を開けて中に入った。

そして窓を開けるとそのまま外の壁に取り付いて、女王が入っていた部屋の窓のところまで来た。そこから中を覗いてみると、部屋にはまだ明かりがついていた。

だが、カレンはそれにかまわずに、窓をこじ開けて中に入ってから部屋の中を見回すと、ベッドの上の少女にすばやく駆け寄ってその口を押さえた。

「静かに。私はあなたにとって危険な者ではありません」

しばらくその体勢のまま、カレンは少女が落ち着くのを待った。そして、声を出されないという確信が得られてから手を放した。

「このような形で申し訳ありません。単刀直入にお聞きしますが、あなたはこの世界の人ではありませんね？」

少女はその質問にしばらく黙り込んでいたが、静かに口を開いた。

「は、はい。そうです」

「私はカレンといいます。あなたと同じ世界の人と一緒に旅をしています」

「えっ、それってどういうことですか？」

「言葉通りの意味です。そしてその人、タマキさんがあなたを助けるということを決めたので、ここに来たのです」

「私を、助けに？」

「はい」

力強くうなずいたカレンを見て、少女は少し安心したような表情を浮かべた。

「私は塩畑恵美っていいいます。カレンさんの言った通り、違う世界から、ここに連れてこられたんです」

「そうですか。それなら、私達が力になれると思います。まずはエミ様の今の状況を教えていただけますか？」

「わかりました。あのそれよりカレンさんも椅子に座ってください」
恵美はそう言うてからテーブルのほうに移動した。カレンも立ち

上がつて、恵美と向かい合つて座つた。

「ちよつと前に、朝起きたと思つたら、この世界に来ていて、目の前にたくさんの人がいたんです」

「なるほど、タマキさんと大体同じですね。それで、召喚した目的は聞きましたか？」

「いえ、ただ救世主と言われるだけで」

「確かに、今この国は普通でない状況のようですが、わざわざ異世界から人を呼び寄せるほどではないように思えますね」

「それが、一人変な人がいるんです」

「それはどういうことでしょうか」

「ローブを着たファスマイドっていう人なんですけど、いつも私に魔法を練習しろと言つてくるんです。女王様もあの人のことは警戒してるみたいで、なんだかよくわからないんですけど」

「その人物はこの王国の者ではなさそうですね」

「そうなんですか？」

「ただの推測ですが、女王が警戒しているというなら、そういう可能性が高いでしょう。気になる存在ですね。何かわかつていることはありませんか？」

「何もわからないんです」

「そういうことなら、私自身の目で確認してみたほうがよさそうですね。その人物はこの部屋に来るんですか？」

「はい、来ます」

「では、しばらくここでお世話になることにさせてもらいましょうか。まいませんか？」

「はい、それはいいですけど」

「ありがとうございます。では、少し荷物を取ってきますので」

カレンはそう言つて窓から外に出て行つた。そして最初に入った客室に戻ると、脱いだ黒装束を回収して再び恵美の部屋に向かつた。

芽生える希望

「あの、カレンさんと一緒に旅をしているタマキさんについて聞かせてもらえませんか？」

恵美は部屋に戻ってきたカレンにそう質問した。

「それは、ノーデルシア王国という国が闇王と言われる魔族によって危機に陥っていたからです。まず最初に召喚されたのはミヤザキヨウコという方でしたが、私の力不足もあって、敵の手に落ちてしまいました。そして、次にタマキさんが召喚されました」

「その召喚は、そんなに頻繁にやるものなんですか？」

「いいえ。大きな魔力が必要で、どんな副作用があるかもわかっていません。それに永く失われていたものですし、よほどの事態でなければ使われることはないはずですよ」

「今まで、どれくらいの人がそうやってこの世界に？」

「あまり昔のことはわかりませんが、わかっている限りでは、今まで召喚されたのはエミ様も含めて四人です」

「あとの一人の人は、どうしてるんですか」

「魔族となつてノーデルシア王国を襲っていたのがその一人です」

「じゃあ、その人は」

「タマキさんと私で倒したのです。召喚された人間だったというのがわかったのは、その後のことでした」

「そうなんですか。それじゃあ、ミヤザキさんという人はどうしてるんですか？」

「エバンス王子とご結婚されました」

「結婚？ 結婚ですか」

「ええ、そうです。もちろん強制されたことはありません」

恵美はしばらく黙り込んでうつむいていたが、ため息について顔を上げた。

「どの人も、この世界でやることがあったんですね。でも、私には

何の力もないとしか思えません。魔法の訓練もやってみたんですけど、全然駄目で」

「しかし、現在の状況を考えると、力を期待してエミ様を召喚したわけではないのかもしれませんが。何か、もっと他の目的がある可能性もあります」

「他の目的というのは？」

「それはわかりません。実際に確認してみないとなんとも言えませんが」

「確認、ですか」

「はい。それを明らかにしなければ、またエミ様と同じことが起きるかもしれません。タマキさんは、そういうことは望んでいないんです。ですから、今すぐここから連れ出して差し上げるわけにはいきません。申し訳ないことです」

「じゃあ、しばらくはこうしていかないといけないんでしょうか」

「数日は私が一緒にさせていただきます。そして、その後ここから出てもらうことになると思いますが」

「ここから出るって、そんなことができるんでしょうか」

「その気になればできます」

今すぐではないということでも、いつでもここから出ることができると聞いた恵美は、多少の落胆と安堵を同時に味わっていた。カレンはその気持ちがあったようで、恵美を安心させるように微笑んだ。

「大丈夫です。何かあればすぐに動きますから。それより、もう休まれてはどうでしょうか」

「え、はい。カレンさんはどうするんですか」

「もちろん、この部屋でお世話になろうと思っています。かまいませんか？」

「それはいいですけど、見つかる大変なことになるんじゃない」

「安心してください。見つからないようにしますから」

「そ、そうですか」

「はい、ですから早めにお休みになってください」

なんとなく有無を言わさない感じだったので、恵美はおとなしくベッドに横になった。疲れたせいかな、すぐに眠りに落ちた。

そして翌朝、恵美が目覚まして体を起こして部屋の中を見回すと、隣でカレンが床に座っていた。

「おはようございます」

「あの、そろそろ侍女の人が入ってくると思うんですけど」

「では、そろそろ隠れさせてもらいます」

そう言ったカレンはベッドの下を覗き込んだり、クローゼットを開けたりした。

「まさか、そんなところに隠れるんですか？」

「はい、大丈夫だと思いますよ。いざとなったらすぐに逃げますから」

そう言ったカレンは、侍女の気配を感じて、言った通りにベッドの下に潜り込んだ。

「おはようございます」

いつものように朝食を持った侍女が部屋に入ってきた。恵美は黙ってうなずいて、侍女が食事を置いていくのを見送った。

「あまり心がこもっているようには見えませんね」

いつの間にかベッドの下から出てきていたカレンはそうつぶやいた。

「そうですか？」

「ええ、あれは言われたことをやっているだけです。ところで、エミ様は今日はどうされるんですか？」

「特に考えていませんけど」

「それなら、この部屋にいるか、それとも町に出るかのどちらかにしていただくと助かるのですが」

「外、ですか」

「はい、どちらでも気が向いたほうでどうぞ。私はずっと側にいることにしますから、ご安心ください」

そう言われると、カレンの静かな自身に満ちた雰囲気、恵美はなんとなく安心感を覚えた。

「じゃあ、せっかくだから町に出てみます」

「わかりました。一緒に行くことは出来ませんが、何かあったらいつでも対応できるようにしておきますから」

「タマキさんにも、そのうち会わせてくれますよね」

「もちろんです。私達はあなたの力になるために来たのですから」

その言葉に、恵美はこの世界に来て初めて、少しだけ明るい気持ちになった。

城下町

恵美がキアンに町を見たいと言うと、返ってきたのは実にいい反応だった。

「そうか！ それならすぐに供の者をつけさせて案内させよう」
そう言うのと、すぐに屈強な感じの兵士と侍女を数人手配した。

「これで、良かったんでしょうか」

不安そうに聞く恵美に、ベッドの下から這い出してきたカレンは力強くうなずいてみせる。

「心配はありません。私は必ず近くにいます」

「でも、カレンさんはどうやって外に出るんですか？」

「正面から堂々と出さしてもらいますから、ご安心ください」

そう言ったカレンは窓から外に出て行ってしまった。

それから数十分後。護衛の兵士三名と二人の侍女と一緒に、恵美は町に出てきていた。

上から見ているとただの建物の群れでしかなかった町も、こうして実際に歩いてみると、活気があってなんとなく恵美も気持ち明るくなってくる感じがした。

そうして、住宅街や商店街を見てから、公園に到着した。そこに突然氷の牙が一行の目の前に落ちてきた。

兵士達は身構え、侍女は恵美の腕をとって後ろに下がった。だが、恵美が上空を見上げると、氷の牙が大量に降り注いできているのが見えた。

恵美は伏せることもできず、それを見上げているだけだった。だが、そこに炎をまとった、何かが飛んできて、その上空で爆発を起こした。

そして、恵美達の頭上に降ってきたのは、氷の破片だけだった。恵美が周囲を見回すと、黒い布を羽織ったカレンの姿が目に入った。カレンは一つうなずいて見せてから、人ごみの中に姿を隠した。

その反対側で、薄ら笑いを浮かべながら、その光景を見つめるファスマイドの姿があった。

「やるじゃないか」

そしてカレンと同じように人ごみの中に姿を消した。

一方その頃、タマキはロドックの店に来てお茶を飲んでいた。

「まだ動きはないみたいだな」

「このまま何もないほうがありがたいんだが」

「それじゃ、あんたはいつ狼化が再発するかって、おびえながらすごさなきゃなくなる」

「そうだな」

ロドックはうなずいて天井を見上げた。しばらく二人はそうして黙っていたが、タマキが何かを感じたようで、顔を上げた。

「何か来たな」

「それは、呪いなのか？」

「ああ、そうかもな。ちよつと出かけてくる」

タマキは立ち上がり、歩き出した。ロドックはそれを見送ってから、自分の仕事に戻った。

感じた特異な魔力をたどって、タマキは公園に来ていた。何かあったようで、人だかりが出来ていた。タマキは手近な若い男をつかまえてみた。

「何があつたんだ？」

「それが、ここでいきなり魔法が使われたらしいんだ」

「へえ、それは面白いな」

「面白いどころじゃないさ、上から魔法が降ってきて、さらにそれを阻止する魔法もあったらしい。しかも、狙われたのは城のお偉いさんだつて話だ」

「へえ、物騒な話だな」

「ああ、まったくどうなってるんだろうな」

そう言つて若い男はどこかに言つてしまった。タマキはあたりを見回すと、ある方向に早足で歩き出した。その先にはローブを着た

男の後姿。その男にたいして、タマキは本当にわずかな違和感を覚えた。

そのまま後をつけていると、ロープの男は狭い路地に入っていた。タマキはそれに続いてそこに入っていたが、いきなり一歩飛びのくことになった。

「これはどういうことだ？」

タマキは目の前に突き立った氷の牙を見ながら、路地の奥に立つ男に声をかけた。男は笑っているようだった。

「いい反応だね。さすがノーデルシアの勇者ってところかな」

「へえ、そんなことを知ってるっていうことは、あんたは相当な変わり者だな」

「いや、君の活躍のおかげだよ。僕みたいに面白いことを探していれば、嫌でも知ることになる」

それを聞いてタマキは笑って頭をかいた。

「俺はかなり引きこもってたんだけどな。ところで、あんたは呪いつて知ってるか」

「ああ、知ってる。ああいうのはけっこう面白いから、たまに試したくなるね」

「じゃあ、狼を作り出したのはあんたか」

「そういえばそうだったな」

その答えにタマキは一步男のほうに足を踏み出した。

「なら、その呪いを解いてもらおうか。もう十分楽しんで、飽きてるだろ？」

「うーん、そうだな。もう忘れてたし、お近づきのしるしにそうしてもいいね」

「ありがとうございます。それで、あんたは何者かということも聞かせてもらえるか」

タマキの言葉に、男はもったいぶったような仕草と表情をして、結局首を横に振った。

「簡単に教えたらもったいない。それは君達のほうで探してもらい

たいね」

「君達か。こつちのことは知られているらしいな」

「ああ、もう一人もさっき試させてもらったけど、実にいい。これからのことを考えると、今からわくわくしてくるね」

「それはどうも。でも、ここで決着をつけてもいいと思わないか？」

「いいや、また会おう。ああ、僕の名前はファスマイドだ、覚えておいてくれ」

そう言々と男は路地の奥を目指してゆっくりと歩いて行って、姿を消した。タマキはそれを黙って見送ると、踵を返して大通りのほうに戻った。

黒幕？

部屋に戻ってきた恵美は、まだ体が震えていた。公園での出来事は明らかに自分を狙ったものだと思え、それを防いだ力もすこいものだったからだ。

侍女はしばらくの間恵美を落ち着けるように言葉をかけていたが、すでに部屋から出て行っていた。

「大変な目に会いましたね」

ベッドに座っている恵美の前に、いつの間にかカレンがひざをついた姿勢で現れていた。

「助けてくれたのはカレンさんなんですか？」

「はい。力が足りずにギリギリになってしまいました」

「あれは、なんだったんですか？」

「何者かが魔法を使ったようですが、少し妙でしたね」

「妙？」

「ええ、エミ様を狙ったように見えましたが、あれは放っておいても直撃はしなかったと思います。念のため撃ち落しましたが」

「じゃあ、何のために？」

「わかりません。何かを試したのかもしれませんが」

そこまで言うとかレンは立ち上がった。

「私は少しタマキさんと相談をしてこようと思います。気になることがありますので」

恵美が不安そうな表情を浮かべたので、カレンは安心させるように微笑んで見せた。

「おそらくすぐにしかけてくることはないでしょう。それに、ここにいれば安全だと思います。では、失礼します」

カレンは窓から外に出て行った。それを見送った恵美はベッドから立ち上がって、部屋の中を歩き回り始めた。

カレンは王宮から出ると、まっすぐ宿に戻った。部屋に入ると、

タマキがソファーに座って木の実の殻をむいてひたすら口に運んでいた。

「あれ、早かったな」

「はい。ちょっとした事件があつたので」

「それって、まさか公園であつたっていうやつか」

「そうです」

うなずいてから、カレンはタマキの向かい側に座った。

「私はシオハタエミという方に接触しました。間違いなく、探していた人です」

「そうか。この世界に呼び出された目的はなんだろうな」

「わかりません。ですが、エミ様には現在のところ、特別な力はないようです」

「召喚のボーナスはほとんどなしか」

「はい。ですが、女王は部屋に自ら訪れていますし、力とは関係なく非常に気にかけているように見えます」

「ふーん。ところで、俺は黒幕っぽい奴に会ったよ」

「黒幕、ですか」

「ああ、ファスマイドって名乗ってた」

「ファスマイド、エミ様からもその名前を聞きました」

「ロドックの呪いのほうもあいつの仕業だったみたいだし、ひよつとしたら本当に黒幕なのかもな。それに、もしかしたらあいつは俺達も目当てなのかもしれない」

「そうかもしれないね。ですが、まだわからないことが多すぎます」

「だよな。これからどうしようか」

「私はエミ様の近くにいたようか思います。公園での反応を見ると、どうにも護衛の実力の問題があるようなので」

「それがいいかもな。俺も一度会っておきたいけど、いきなり行っても驚かれるだけか」

「まだお若く、かわいらしい方です。そんなところに男性が夜に押

しかけるのは感心できることではありませんし、それにファスマイドという男の目的が私達のことならば、今はまだ様子を見たほうがいいのではないだろうか」

「わかった、タイミングはカレンに任せるよ。俺はとりあえず村のほうの様子を見てくることにしよう。いや、その前にあのおっさんの呪いが本当に解けたのか確認しておかないとな」

「お気をつけて」

「カレンのほうこそな」

二人は一緒に宿を出て、別々の方向に歩き出した。

「すまなかった」

一方、恵美の部屋にはキアンが来ていて、疲れた表情をしていた。「いえ、別に誰も怪我をしなかったですし、大丈夫ですよ」

「しかしな」キアンはため息をついて首を横に振った。「いや、これ以上言っても仕方がない。で、誰かが助けに入ったという話を聞いたが、心当たりはあるのか？」

「いえ、突然すぎて何がなんだかわかりませんでした。それに、私にはこの世界に知り合いなんていませんから」

恵美は目が泳いで体は震えていたが、キアンはそれを、まだ不安なせいだろうと思った。

「安心してゆっくり休んでいてくれ」

キアンがそう言って部屋から出て行こうとすると、外からドアが開かれ、ファスマイドが部屋の中を覗き込んだ。

「何をしに来た？」

怒気をはらんだ声でキアンがそう言ったが、ファスマイドはそれを無視して恵美に笑顔を向けた。

「大変だったらしいですね。でもまあ、あなたが傷つくことはないでしょうから、安心していいんですよ」

それだけ言うと、ファスマイドはすぐに立ち去った。キアンもその後を追うようにして部屋を出ていき、部屋には恵美だけが残された、ように見えたが。

「あれが女王と、ファスマイドという男ですか」

いつの間にかカレンが窓の前に立っていた。突然のことに恵美はビクツとしたが、すぐに気を取り直すことが出来たようだった。その恵美の様子を見て、カレンは言葉を続ける。

「あのファスマイドという男が今回の件を仕組んだ可能性がありません。しかし、今のエミ様の護衛では心許ないので、これからしばらくは私がその役目をさせていただきます」

「は、はい。ありがとうございます。ところで、タマキさんとは会えないんですか？」

「今は他に用もありますし、もう少し落ち着いてから会っていただきます」

「そうですか」

同じ世界にいた人間に会えないと聞いて、恵美は少し落ち込んだようだった。カレンは慰めるようにその肩に手を置いて、軽く微笑む。

「タマキさんなら、必ずエミ様を救うことができます」

神出鬼没

ロドックの呪いがなくなっていることを確認したタマキは町から離れ、人気のない森の中に来ていた。タマキは首から下げているアミュレットをつかんで、空を見上げる。

「ここまでくれば誰も見てないな。おい、やるぞ」

「ああ」

サモンの返事と同時に、タマキのマントがひるがえって闇に染まった。

「これで馬車も運べりゃいいんだけどな」

「馬鹿を言っな」

「はいはい、じゃ、いくぞ」

タマキは勢いよく空に飛び立ち、村の方向目指して飛んだ。そのまま、荷馬車での移動とは比べものにならない速度で村の近くに着陸した。

それから歩いて村に到着してみると、村は実に平和な雰囲気だった。タマキはとりあえずアディソンの家に向かったが、その途中で会うことができた。

「よお、調子はどうだ」

「戻っていたんですか。タマキさん達が出かけてからは一回も魔物は現れていません」

「そりゃよかった。この村以外での魔物の動きなんかはわかるか？」

「他の村ではまだ現れているようです」

「そうか、じゃあちよつと見てくる」

タマキはそう言って村を離れると、再び空に飛び上がった。

「サモンよ、転移門がある場所はわかるか？」

「ああ、閉じたのと同じのならいくつかあるな」

「よし、場所を教えてくれ」

「一番近くはな」

「おっと、それなら僕が教えてあげよう」

突然の声にタマキが後ろを振り返ると、そこには小さく透明なキユーブが浮かんでいた。

「その声は、ファスマイドか」

「覚えていてくれて嬉しいよ。で、転移門の場所なんだけど」

「ちよと待った。なんでお前がそれを俺に教える？　というか、なんで知ってるんだよ。やつぱりお前が仕組んだことなのか？」

「それは違うよ。まあそんなこと、今はいいじゃないか」

タマキはその言葉にやりと笑ってみせた。

「そうだな。あんたが本当のことを言うなら、こつちとしては労力の節約ができて都合がいい。教えてくれ」

すると、キユーブがタマキの目の前に飛んできた。

「情報はこれに入ってる。魔力を使えば情報は引き出せるよ」

タマキはそれをつかんでから、目の前まで持ってきた。

「お前とはそのうちゆっくり話をしたいもんだな」

「それは僕も同じだね」

それを最後に、キユーブからファスマイドの声が聞こえなくなつた。

「さて、こつちの彼女にも挨拶をしておいたほうがいいだろうね」

王宮の見張り塔の上に座っていたファスマイドは立ち上がり、恵美の部屋に視線を定めた。

その頃カレンは、宿から持ってきた生地を使って恵美の部屋で服を作っていた。

「カレンさん、それは？」

「エミ様の服ですよ。いずれここから出ることになると思いますし、そつなつたら今の服では動きにくいでしょうから」

「出るんですか」

恵美は少し暗い表情になったが、カレンはそれにはかまわなかった。

「はい。ノーデルシア王国に行くのが最善です。あそこにはヨウコ

様もいらつしゃいますし、なにより魔法に関しては非常に発達しています。少なくともここにいるよりは、エミ様が元の世界に帰れる可能性も高くなるはずです」

「帰れる、んですか？」

「それは無理だね」

突然窓のほうから声がした。カレンは瞬間的にダガーを手に持つて恵美を守るように立ち上がった。その視線の先には、ファスマイドがいた。

「変わったところから部屋に入りますね」

「君ほどじゃないよ」

ファスマイドはそう言うてから、恵美のほうに笑顔を向けた。

「この際だから、堅苦しいしゃべりかたはやめさせてもらうよ。僕はこっちのほうが楽だし、ここはしっかり話したいからね。よろしく、エミちゃんにカレンさん」

「自己紹介は終わったようですので、完璧に気配を消してここに来た理由でも聞かせていただけますか」

「それはちよつとした挨拶だね。タマキ君とは直接会ったし、さつきちよつと話もしたから、そのパートナーとも会っておかないといけないと思って」

「それはご丁寧なことです」

カレンはそこで一歩ファスマイドとの距離を詰めた。

「おっと、僕はやりあう気はない。そのダガーをしまってくださいとありがたいね」

カレンはファスマイドから目を離さずに、ダガーをしまった。

「ありがとう」

ファスマイドは大げさに礼をしてみせた。

「さて、それでは先ほどの無理だということについて聞かせてもらいましょう」

「言葉通りの意味だよ。この世界から、そっちのエミちゃんやタマキ君の世界に戻る方法なんていうのはないと思っいいい」

それを聞いて恵美の表情が曇る。だが、カレンは表情を変えない。
「その言いかたですと、ない訳ではなさそうに聞こえますが」
「まあ、実際には無理だっていう話。期待はしないほうがいいと思
うよ」

恵美はますます暗い顔をしたが、カレンはそれを聞いてにやりと
笑った。

「不可能ということはありません」

ファスマイドはそれを見て面白そうに笑う。

「なるほど、タマキ君ならできるっていうことが。面白いね」

「いいえ、タマキさんと私ならば、ですよ」

「ハハハハハ！ これは楽しみだ！ そういうことなら期待して見
させてもらうよ」

ファスマイドは笑ったままカレンと恵美の横を通ってドアに向か
い、そこに手をかけて振り返った。

「楽しみにしてるよ、本当に」

初対面

ファスマイドが部屋から出て行ってから、カレンは何事もなかったかのように縫い物を続けた。恵美は何か言いたそうにしていたが、カレンはそれより先に口を開いた。

「エミ様、あの男が言うことが本当かどうかはわかりませんが、今は焦っても仕方がありません。少し様子を見てみましょう」

「はい」

「私はこれが終わりましたら、タマキさんと相談をしてこようと思います。できればその後、エミ様にもタマキさんに会っていただけるとよいします」

そうして、服を完成させた頃には夜になっていた。カレンは服を見つからないような場所に隠した。

「では、私はこれで失礼します。次はタマキさんと一緒だと思えますので」

「わかりました。待っています」

恵美に見送られて、カレンは窓から部屋を出て行った。カレンはそのまま宿に戻ったが、タマキはまだ戻っていなかった。

数日後、少しくたびれた雰囲気のためタマキが夜になってから宿に戻ってきた。

「ただいま」

「おかえりなさい。どうでしたか？」

「あの転移門っていうのは全部閉じてきた。ファスマイドの野郎が教えてくれた通りの場所にあったから、だいぶ時間の節約をできたよ」

「またあの男ですか」

「ああ、自分は黒幕じゃないって感じのことを言ってたな。あいつの言った通りにロドックの呪いも解けてたし、よくわかんない奴だ」
「そうですか。実は私もあの男には直接会いました。只者ではなさ

そうですし、あきらかに何かを知っているようです」

「ちゃんと話を聞きだす必要があるな」

「はい。ですが、とりあえずはエミ様と会っていただきたいのです」

「もちろん。俺もそろそろ会ってみたいと思つてたところだよ」

「では、早速今晚行きましょう」

「わかつた。それまで一眠りさせてもらうよ」

それから夜、タマキとカレンは宿を出ると、町を出て人気のない場所まで来た。

「この時間なら、空から行つても目立つことはありません」

タマキはうなずいてカレンの腰に手をまわした。

「じゃ、行くか。サモン！」

かけ声と同時に、タマキのマントは闇に染まり、二人の体のまわりに霧のようなものが出現した。

「飛ぶぞ」

タマキはカレンの返事を待たずに夜の空に飛び上がり、王宮を指した。そして恵美の部屋の窓の前まで来るとそれをノックした。

恵美は窓のところまでくると驚いた顔をしたが、すぐに二人を室内に迎え入れた。

「初めまして。カレンから話は聞いてると思うけど、俺は高崎環。君と同じあつちの世界から、ここに召喚された人間だ」

タマキの自己紹介に、恵美は少しとまどっていたようだったが、自分を見る二人の視線に優しいものを感じて落ち着いた。

「私は塩畑恵美です。よろしくお願いします」

「じゃあ、挨拶はこれくらいにして、早速これからのことを話そうか」

タマキは手近な椅子を引き寄せてそれに腰かけると、あとの二人にも目で座るように言った。カレンはもう一つの椅子に、恵美はベッドに座った。

「いきなりだけど、俺は君をここから連れ出そうと思つてる」

いきなりの一言に恵美は面食らつて反応できなかった。カレンは

驚くこともなく普通に反応をする。

「しかし、敵の正体がわかっていない今の状況で動くのは危険ではないでしょうか」

「だからこそだよ。相手の目的も正体もわかってないのに、こんな自由に動けないところにいるのは危険だ。それに、相手がわからないならこつちから動いてやればいいじゃないか」

「それもそうですね。エミ様はどうでしょうか？」

いきなり話を振られた恵美はなんと答えたものかもわからず、二人を交互に見るだけだった。

「まあ、いきなり言われてもわかんないよな。でも、ここにいるだけじゃ飽きるだろ。ここは俺とカレンに任せて、外に出てみようって気はないか？」

「外、ですか」

「大丈夫ですよ。私とタマキさんがいればこの世界で怖いものなどありません。もしエミ様を狙う者がいても、そんなものを恐れる必要は全くありません」

「あー、そうだな。よほどのことがなければ大丈夫だし、よほどのことがあっても何とかするよ」

自信がある様子の二人に、恵美は少し任せてもいいような気がしてきた。

「もし、ここから出たらどうするつもりなんですか？」

「そうだな、とりあえずこの近くに拠点があるから、そこに留まって様子を見ることになると思う。その後はノーデルシア王国に行くことになるだろうな。ヨウコさんのところなら安心だし」

「そうですね。その計画がいいと思います」

話を進める二人を見ながら、恵美はこんな場所まであっさり来て、こうしてのんきな雰囲気話している人達なら、信頼してもいいよな気になってきていた。

「あの、もしここから出るとしたら、いつになるんですか？」

「ん？ そりゃもちろん、今すぐだよ。それとも挨拶しておきたい

相手でもいるのかい？」

「いえ、そういう人はいません」

「準備も私のほうでできています」

タマキは恵美とカレンの反応にうなずいて立ち上がった。

「よし、決まったら、さっさと行こうか。おい、サモン」

首から下げているアミュレットに話しかけるタマキを見て、恵美は不思議そうな顔をした。それに気がついたタマキは軽く笑ってそれに答える。

「こいつはまあ、俺の相棒だ。そんなに危ない奴じゃないから安心してくれ」

そして、タマキのマントが闇に染まり、窓に足をかけて恵美に手を差し出した。

「さて、しっかりつかまってくれ。飛ぶからな」

恵美は何を言われているのかよくわからなかったがとりあえずタマキの手を握った。そうすると、タマキは恵美の体を抱きかかえるようにして、空に飛び出していった。

恵美はあまりのことに、ただ黙ってタマキにしがみつくだけだった。

王宮の混乱

「いったい何をやっていたんだ！」

恵美のいた部屋で早朝からキアンが誰にといいこともなく怒鳴っていた。護衛に立たせていた兵士に聞いても何もわからず、侍女も同様だった。

いらいらした様子で部屋を歩き回るキアンもそれは同じで、何もわかってはいない。

「女王様、そんなに騒いだところで、何もいいことは起こりませんよ」

そこにいきなりファスマイドが部屋に入ってきた。キアンはそれを睨みつける。

「お前は何か知っているのか！」

「さあ、どうでしょうね？」

いかにも含みがありそうな笑顔を浮かべるファスマイドに、キアンはますます苛立った。

「知っていることがあるなら全部言っただ！　そもそも全てはお前が仕組んだことではないのか！」

「いいえ、僕はそんなことは一言も言っていないですよ。それに、助言をしてさしあげたのをそうとられるのは傷つきますね」

「やかましい！　そんなこと私の知ったことか！」

キアンは半ば叫ぶようにそう言つと、早足で部屋から出て行った。それを見送ったファスマイドは部屋を見回してから、心の底から楽しそうな表情になった。

「思ったよりも動くのは遅かったようだけど、しっかりやってくれたね。これから楽しみだ」

わざとらしくそうつぶやくと、ファスマイドも部屋を出た。そして、そのまま王宮を後にして、ある場所に向かった。

到着したのは高級住宅街にある屋敷。ファスマイドは守衛に片手

を上げてみせると、そのまま中に入ってしまった。そのままどんどん進み、ある部屋のドアをノックもせずを開けた。

「なんだ、突然来るなど言っておいただろう」

それを迎えたのは痩せている神経質そうな中年の男だった。ファスマイドは男の言葉にはかまわずに、本棚にもたれかかった。

「それより、今日あったことは知ってるのかい」

「もちろんだ。陛下はかなり取り乱しておられるようだが、あの悪魔はどう言っているのだ」

「さあ、別に僕は傍観者だから、あんな奴の意向なんて知らないね」
「それでは困る、この国のためにはあのお方の力が絶対に必要なのだ。しっかりと連絡をしてくれなければ」

「はいはい。まああつちはもうわかってると思うから、僕が何かをする必要はないと思うよ」

「それはどういうことだ？」

「ああ、たぶん直接的に接触してくるんじゃないの？　というか、最初のは僕がおせっかいでやってあげたことだったからね。そのおかげで君たちには色々余裕ができたはずだけだ」

「何だと？　じゃあ、お前は」

「ただの野次馬さ」

「そうか」

男はそう言つて、疲れたように目を閉じた。ファスマイドはその様子に感心したようだった。

「ずいぶん落ち着いているね」

「始めてしまったことなのだから、今さらどうこう言っても仕方あるまい。我が国には強力な力が必要なのだよ、たとえそれが悪魔の力であってもな。そう、例えばノーデルシアの勇者と言われる者を越える力だ」

ファスマイドはそれに軽く肩をすくめた。

「ま、頑張ってくださいよ、宰相閣下。それより、王宮に行かなくていいのかな？」

「陛下が少し落ち着いた頃に行くつもりだ」

「じゃ、僕はこれで」

それだけ言って屋敷を出たファスマイドは空を見上げた。

「さて、盛り上げるには少し手をつったほうがいいかな。楽しみじやないか、タマキ君」

そうつぶやくと、ファスマイドは町に姿を消した。

それからしばらくして、キアンは執務室に宰相のレンツを迎えていた。朝の様子よりはだいぶ落ち着いていたが、まだキアンの表情は険しい。

「では、意見を聞かせてもらおうか」

「まず、エミ様が消えたのは昨晚ということですから、今はまだ遠くには行っていないはずです。すぐに搜索隊を組織すべきだと考えます」

「派遣している搜索隊はどうするつもりだ」

「呼び戻すべきだと考えます。今はとにかく目の前の問題に集中しなくてはなりません」

「そうだな。エミの脱出を手引きしたものがいるはずだから、それも調べなくてはいけない」

「すぐに手配します。ファスマイドは何か知っているようですので、あの男から情報を聞き出すこともしくはありません」

「それはお前に任せよう。すぐに始めてくれ」

「わかりました」

レンツは頭を下げて執務室から出て行った。一人残ったキアンはため息をついてこめかみを指で押さえた。

全てがうまくいけば、伝説の最強の悪魔、オメガデーモンの力が入るはず。だが、考えていたよりも障害は多く、それに召喚した少女エミを見ると、そのあまりの普通さに自分達のやっていることに疑問も生まれた。

それに、そもそも悪魔の約束などが信用できるのか、それもわからなくなってきた。だが、考える間もなく、ドアがノックされ

た。

「入れ」

そう言うと衛兵がドアを開け、室内だというのにフード付のローブをつけた人間だった。それはキアンの前でひざまずいた。

「陛下、オメガ様は状況の改善を求めています」

「わかつている、すでに動いているから心配はいらない」

「オメガ様は心の広い御方ですが、いつまでも見守るだけではありません。そろそろ成果を見せていただきたいのですが」

「わかつていると言っている」

キアンは刺すような目でローブの者を見た。

「下がれ！」

その一喝にローブの者は頭を下げると退室した。

脱出と決闘

恵美は町から離れたテントの中でカレンが用意した服に着替えていた。長袖の上着とズボンで、今までの服よりもずっと動きやすく、ジャージみたいで落ち着いた。

「エミ様、着替えは済みましたか？」

「はい」

返事をする、それまでの侍女服とは違い、鎧を身につけたカレンがテントを覗き込んだ。

「よくお似合いです。すぐに出発しようと思うのですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですけど、タマキさんは一緒じゃないんですか」

「はい。まだあの町でやることがあるということなので。とりあえずは私とエミ様だけである村に向かうことになります」

それからカレンは自分の眼鏡を外して恵美に手渡した。

「気休め程度ですが、変装用にどうぞ。伊達眼鏡ですから問題ありません」

恵美はそれを受け取ると、テントを出てカレンと一緒に片づけを始めた。それが済むとカレンは荷馬車の御者台に、恵美は荷台に座り出発した。

その頃、タマキはようやく目を覚まして起き上がったところだった。

「ずいぶんとのんきなものだな」

「それでいいんだよ。別に相手は逃げない」

「そうか。あのファスマイドとかいうのには注意しておけよ」

「どうだろうな」

そう言っ、タマキはマントを手に取るとそのまま宿を出た。そして向かった先は王宮の前。

「こんなところに来てどうするつもりだい？」

気がつくとファスマイドが後ろから近づいてきていた。だが、タマキは振り返ることもせず、王宮を見上げた。

「特に意味はないけど、なんとなくこうやって見てみたくなったんだよ」

「それは、自分がやったことの成果を確認しにきたってことかな？」

「さあな」

そう言っただけでタマキはファスマイドのほうに振り返った。

「で、お前は何の用だ」

「ちよつと顔を貸してもらいたくてね。いいかな？」

「ああ、ちよつどいい」

タマキは先に歩き出したファスマイドの後を追って、人気のない町外れまで来た。ファスマイドはあたりを見回してから、手を一つ叩いた。

「ここならちよつどいい。じゃ、始めようか」

そう言っただけで、ファスマイドはタマキに手の平を向けた。

「アイスバイト」

氷の牙が五発、タマキに襲いかかった。だが、タマキは息を軽く吐き出してから、その全てを拳で叩き落す。そのまま地面を蹴ってファスマイドに迫るが、すでにその場所には誰もいない。

「ファイアボール」

今度は上空から火の玉が十発降ってきた。タマキはそれに対して腕をクロスさせた。

「十倍！ ファイアボール！」

腕が開かれると同時に巨大な火の玉が放たれ、火の玉と衝突して爆発を巻き起こした。

「バースト！」

タマキはその爆風を突っ切って飛び上がり、空中でファスマイドと対峙する。

「何の目的だ？」

「別に、楽しむためさ」

「そうか！」

タマキは笑いながら拳を突き出した。ファスマイドはそれをふわっと上空に飛んでかわす。だが、タマキはすぐに体をひねって、両手をそれに向けた。

「二十倍！ バースト！」

凄まじい爆発がファスマイドを飲み込んだ。タマキは地面に着地してそれを見上げた。

「まったく、僕を殺す気かい？」

しかし、ファスマイドは無傷で地面に降り立った。タマキはそれに驚く様子は見せない。

「余裕があるように見えるけどな」

「余裕があるのは君のほうだろう、全然本気じゃないじゃないか。それとも僕じゃ不足かな」

「それは知らないな。でもこんな町の近くであんまり派手にやりすぎるのも駄目だよ」

「まあ、一応そういうことがないように結界を張ってるんだけど、君の本気に耐えられるかはわからないな」

「そうか。じゃあ、試してみよう」

タマキはマントに手をかけた。その瞬間、闇が波動のように広がり、マントが闇に染まった。次の瞬間、タマキはファスマイドの背後にまわっていた。

「おっと！」

ファスマイドは回し蹴りをぎりぎりまで飛び退いてかわした。が、タマキは間髪いれずに踏み込むと腕を突き出してきた。

「危ないな！」

ファスマイドが腕を広げると、まるでそこに壁ができたかのようにな、タマキの腕が止まった。それは一瞬で破られるが、それでも身かわすには十分な時間が稼げた。

タマキとファスマイドは最初の時とは場所を入れ替えて向かい合った。

「まだ全然本気じゃないね」

ファスマイドはにやりと笑う。そしてタマキもそれに応じるように笑った。

「それはお前もそうなんじゃないのか？」

「いやいや、僕には君ほどの力はないよ。僕はあんまりこうやって戦うのは得意じゃないしね」

そこでタマキが大きく息を吐き出すと、マントはもとに戻った。

「それで、なんのためにこんなことをしたんだ」

「ちよつと君の力を自分で体感してみたかっただけだよ」

「じゃあ、感想を聞かせてもらいたいな」

「申し分ないね。これなら本当に面白いことになりそうだ」

そう言くと、ファスマイドは一步後ろに下がった。

「これからのことが楽しみだよ」

そして腕が振られると、タマキの前に鏡のような壁が出現した。

タマキはすぐにそれを拳で打ち碎いたが、ファスマイドの姿は消えていた。

「なあサモン、あいつは明らかに人間じゃないよな」

「そうだろうが、中々面白い奴だ」

勇者と女王

ファスマイドが王宮に入っていくと、見た目はともかく雰囲気はピリピリしていた。そんな中を笑顔を浮かべながら、足をキアンの執務室に向けた。

部屋の前には当然衛兵が立っているが、ファスマイドはそれに軽く手を上げるだけで室内に入っていく。そして、キアンの机に腰かけた。

だが、キアンは一瞬見ただけで、すぐに机の上に視線を戻した。

「ずいぶん物々しい雰囲気ですねえ」

「当然だ。何もなければ出て行ってもらおうか」

「そう邪険にしないでくださいよ。お探しの彼女の居所の心当たりを教えて差し上げようっていう気になったんですから」

「なんだと？」

キアンは顔を上げてファスマイドを睨みつけた。緊張感のない顔を見ると、その言うことが信頼できるとは思えなかった。

「聞きたくないんですか？」

「わかった、聞かせろ」

ファスマイドは頭をかいて机から飛び降りると、壁に貼られている地図に近づき、その一点を指差した。

「このあたりを探してみると面白いことになりますよ」

ファスマイドが指を離すとそこには焼け焦げたような跡が残った。それから、返事を聞かずにそのままドアに向かった。

外に出ると、ちょうどフードで顔を隠したローブの人間とすれ違った。

「もっと力を尽くしていただきたいですね」

「さあねえ」

ローブ人間は執務室へ、ファスマイドは王宮の外に向かって歩いていった。

その夜、町で連続して爆発音が響いた。町は混乱に陥り、王宮の中も慌しく人が動いていた。キアンは寝室で報告を受けてから、ベランダに出て町を見下ろした。

「こんばんは」

上からの声にキアンが顔を上げると、そこには妙に暗いマントをはためかせた男が宙に浮いていた。

「何者だ」

キアンは異常な事態にも落ち着いていた。男はそれに拍子抜けしたようだった。

「思ったよりも反応が薄いな」

「最近はおかしなことばかりだな。それで、貴様は何者だ」

「ノーデルシアの勇者、世間的にはそう言われている」

「ほう、お前がか。確かタマキといったかな」

その反応にタマキはうなずいた。

「知っててくれてどうも。で、あんたはこの国の女王様だよな」

「ああ、そうだ。それで、勇者が何の用だ？」

「じゃあ聞くけど、なんで俺の世界の人間を召喚なんてしたんだ？」

「話す必要はないな」

「もし何か事情があるなら、聞かせてもらいたいところだけどな」

「言う必要はない」

「問題があるなら、俺の力を貸したっていいんだけど」

「その必要もない」

「それはまいったな」

そうは言ってもタマキはたいして困ったような感じではなかった。

「ところで、エミをさらったのはお前か」

「ああ、さらったっていうのは言いかたが悪いと思うけどな。そもそも彼女はここにいるべきじゃない」

タマキの言葉にキアンは一瞬言葉に詰まった。

「二人も召喚をしたノーデルシアの連中よりはましだ！」

「まあそれには理由があった。俺としては、今回のことの原因にも

興味があるな。見た感じ、そんなに差し迫った危機があるようにも見えないけど」

キアンは黙って何も答えようとしない。

「答えたくないなら、それでもいい。でも、俺は自分で調べるぜ」
タマキの言葉を黙ったまま聞いたキアンは、しばらくしてからゆっくりと口を開いた。

「貴様は、いったいどれだけの力を持っているのだ」

「力？ さあねえ、残念ながら無敵ってほどじゃないな」
「そうか」

「とにかく、できればもつと協力的になってもらえるとありがたいな」

それだけ言うと、タマキはキアンの返事を聞かずに飛び去った。キアンは唇を噛んでそれを見送ると、黙って室内に戻った。それからキアンは警戒を解くように指示を出してから眠りについた。

「タマキ君もやるねえ。でも、ここでのんびりしてるのはまずいんじゃないかな」

王宮のてっぺんから一部始終を見ていたファスマイドは楽しそうにそうつぶやいた。

謎の怪物

村へと向かうカレンと恵美だったが、カレンは何かに気づいたように、荷馬車を止めた。

「どうしたんですか？」

「何か来ます。振り切るのも無理ですから、隠れて様子を見ましよう」

カレンは荷馬車を道から外れるコースに向け、森の中に入っていた。そして、道からは目立たないように荷馬車を隠した。

「エミ様はここにいてください。ですが、周囲に気をつけて、何かあったらすぐに動けるように注意していてください」

それだけ言うとカレンは御者台から降りて道のほうに歩いていき、適当な場所に身を隠した。

数分後、馬の蹄の音が聞こえてきて、五人の馬に乗ったローブの人間が現れた。その五人は何かに気づいたようで馬を止めた。

そして、全員が馬から下りると、荷馬車の跡が道から逸れて行っているのを見つけたようで、二人が森の方に足を向けようとした。そこでカレンは隠れていた場所から姿を現した。

「何か捜しているようですね」

ローブの五人は一斉に身構えて、背中 of 剣を抜いた。カレンはそれを見てため息をついた。

「穏やかには済みそうにありませんね」

カレンは一番近くのローブに一気に近づいて、右足をその腹に叩き込んだ。ローブの人間は体をくの字にしてその場に崩れ落ちる。

そこに二人が両側からカレンに切りかかってきたが、その剣は空を切った。

一歩下がっていたカレンは、そこから踏み込んで二人の剣を持つ手の肩を連続で蹴って、剣を叩き落した。間髪いれずに、ベルトのナイフを抜くと、振り向きざまに後ろにまわっていたローブに投げ

つける。

そして、ナイフがかすめてひるんだそのローブに向かって地面を蹴ると、剣を持っている手を押さえて足を払った。

「大怪我をする前に帰ったほうがいいですよ」

つかんだ手をひねりあげながら、残った一人にそう言った。だが、その一人は立ち去る気配を見せずに、フードを取った。

顔が見えるかと思ったが、そこにあつたのは白い仮面だった。カレンはつかんでいた手を放して、それにゆっくりと近づいていった。「退く気はありませんか」

仮面の人間は何も言わずに剣を投げ捨てると右手を仮面に当てた。他の者も同じようにして、いるのを見ると、カレンは剣を抜いた。

ほぼそれと同時に空気が凍るような感覚がして、ローブの者達の体に変容しだした。全身の筋肉が異常に膨張し、ローブが裂け、その体は元の三倍以上の大きさにまでなった。

その皮膚はまるで銅のような色になり、頭にも角が二本生え、口は仮面から余裕でとび出すくらいに裂けた。そして、仕上げという感じで仮面が碎けると、その下からはオーガをさらに悪相にしたような禍々しい怪物の顔が現れた。

カレンはそれを見てから、すっと目を閉じた。

「人間であることを捨てたのなら、手加減する必要はありませんね」そして開かれた目は白銀。髪の毛も同じ色になり、白銀の輝きがその体を包むと、それが二つの翼のように背中に開いた。剣を構えると、それもまぶしいくらいの白銀の輝きを発した。

「すぐに、終わらせましょう」

そうつぶやくと、カレンは正面の怪物に一步踏み出し、次の瞬間には凄まじい勢いで加速していた。怪物は何が起こったのかわからないまま、何かが通り過ぎていったのだけを感じたが、ふと自分の右手に違和感を感じたらしく、そこを見てみると、何もなかった。

その事実に驚く間もなく、その胸から強く輝く剣が突き出た。カレンはその剣をひねると、そのまま胴体の半分を切り裂いた。怪物

は何が起こったかわからずに倒れると、動かなくなった。

残りの四体は雄叫びをあげると、倒れた怪物の側に立つカレンに向かって殺到した。だがカレンは落ち着いた様子でそれをしっかりと引きつけると、上空に飛び上がった。

そして、一体に狙いを定めると、急降下を始めた。剣を振りかぶると降下の勢いのまま、狙った怪物を両断する。避ける間もなく、そいつはきれいに真つ二つになって地面に倒れた。

残りの三体は怯む様子もなく、着地したカレンに向かって手や足を振るって攻撃をしかけた。だが、カレンはその全てをかわして、一番近くの怪物の足を切った。

さらに、叫んで膝をついた怪物の膝を踏み台にすると、剣を一閃させてその首を切り落とす。残りは二体。

怪物は二体同時に大きく口を開くと、そこから炎を吐き出した。カレンがそれに対して一回だけ剣を振ると、炎はその圧力によってかき消された。

それでも怪物は二体同時にカレンに突進した。カレンはその中心に向かって走ると、剣の輝きだけを残してその間を通り抜けた。

二体の怪物は振り返ることもできず、血を噴出してその場に倒れた。

カレンが目を開じて剣を鞘に収めると、翼は消え髪の色も元に戻った。開かれた目も元に戻っている。

「エミ様、終わりましたよ」

荷馬車に近づいたカレンが声をかけると、青ざめて震えている恵美が顔を出した。その様子を見て、カレンは頭を下げた。

「刺激の強いものを見せてしまって、申し訳ありませんでした」

「い、いえ、大丈夫です」

「では、すぐに出発しましょう」

カレンは荷馬車を道に戻して、今までよりも少しペースを早めた。その頭の中は、今の怪物達が何者か、ということに支配されていた。

一時の安息

カレンが倒した怪物の残骸が転がっている場所に、フード付の口
ーブを着た人間が馬に乗って到着した。その人物は怪物一体一体に
近寄っていき、軽くそれを撫でると、中心に立って手を開いた。

すると、怪物の残骸が凝縮されてそれぞれが凝縮された球体にな
ると、中心に集まった。そして、その人物が手を上げると、球体は
そこに吸い込まれるように消えていった。

数日後の朝、カレンと恵美は村に到着していた。村は出発してか
ら魔物の襲撃もなかったようで、実に平和な様子だった。

アディソンに話を聞いてみると実際に魔物は一回も現れていない
ということだった。

とりあえず例の家に戻った二人だったが、カレンはとりあえず調
子がよくなさそうな恵美に寝具を敷いてすすめた。

「ここならある程度は安心できますから、ゆっくり休んでください」
カレンはそれだけ言って、料理を作り始めた。タマキの記憶で見
た向こうの世界にはああった魔物のようなものは存在しないし、
恵美の暮らしていた場所は平和で豊かなところだったというのわ
かっているのです、今はそつとしておくことにした。

昼になると、カレンはシチューと村人からもらってきたパンをテ
ーブルの上に並べた。

「エミ様、昼食の用意ができました」

カレンが横になっていている恵美に声をかけると、彼女はゆっくりと
起きてテーブルに着いた。

「お加減はいかがですか？」

「はい、大丈夫です」

そうは答えても、恵美は大丈夫という雰囲気ではなかった。

「やはり、あのような戦いや、野宿は負担でしたでしょうか」

「それは、確かにそうですけど、色々ありすぎて。環さんならこん

なの簡単に乗り越えてたんでしょね」

「あの方は特別ですからね、この世界でもあんな人はいませんよ」

「そうなんですか」

「はい。それよりしっかり食べてください。王宮の食事よりはずつと貧しいと思いますが、野宿で食べるものよりはずつとましなものですから」

「いえ、そんなことはありません」

恵美は慌てたようにシチューをスプーンですくって口に入れた。

「おいしい」

王宮で食べたような豪華なものではなく、その素朴な味に恵美は家で作ってもらったシチューを思い出した。カレンはそれを見て微笑んだ。

「お口にあったようでよかったです」

食事が終わり、食器を片付けたカレンは椅子に座ると、口を開いた。

「せっかく落ち着いたところで申し訳ないのですが、あまりここには長居できないと思います」

「それは、どういうことなんですか？」

「あの追っ手は私達が通るルートを知った上で追ってきているように思えました。どういった方法かはわかりませんが、おそらくここに向かって知っているのを知っていたのでしょう」

カレンは冷静に話しているが、恵美はそれを聞いて不安になった。

「じゃあ、ここもすぐに出発しないといけないんですか？」

「いえ、とりあえずタマキさんが戻ってくるまでは移動はしません。追いつこうと思えばあの後も追っ手があつて当然のようですが、なにもなかったということはあちらにも準備があるのでしょう。しばらく余裕はあるはずですよ」

「そうなんですか」

恵美はほっとしたようだった。

「せっかくですから、この村を見ておいてはどうでしょうか。王宮

や大きな町とは違った印象を受けると思いますし、いい気分転換になるのではないでしょうか」

「はい」

元気よく、というほどではなかったが、恵美ははつきりと返事をした。カレンはその様子を見て、安心したようにうなずいた。

「今は危険がないようですし、この村の人達は信用できますから安心して下さいね。では、私は少し出かけてきますから」

そう言うときカレンは外に出て行ってしまった。残された恵美はしばらくの間は家の中にいたが、思い切ったように立ち上がると、外に向かった。

都会とまではいなくても、田舎ではないような町で育った恵美にとっては、こういった農村は全然なじみがなくて面白かった。もちろん違う世界だから、全てが珍しいのは当然だが、虜囚のような状態ではない今では世界の見えかたも違った。

村の恩人であるタマキとカレンの客人であるということ、村人は王宮の人間とは違う丁寧さで、恵美は久しぶりに落ち着いた気分になった。

それと同時に、タマキやカレンのことを村人達から聞いて、二人がずいぶん信頼されているというのもわかった。これだけ多くの人々から信頼を寄せられている二人なら、恵美は信頼してもいいという気になっていった。

夕方になってから恵美が家に戻ると、すでにカレンは戻ってきていて、夕食を作っていた。

「おかえりなさい。村はどうでしたか？」

振り向いたカレンにそう聞かれた恵美は、なんとなく軽い気分で口を開けた。

「いいところでした。それに、環さんもカレンさんも本当に感謝されているんですね」

「私はともかく、タマキさんはそういう方ですから。どこにいても、良くも悪くも人に大きな影響を与えるのがあの人です」

恵美はカレンの言葉に、タマキへの深い信頼と、それ以上のものを
感じた。

合流と謎の男と

タマキは数日間首都に滞在していたが、女王に会った後は特にこれといった収穫はなかった。

町を出ることにしたタマキは、とりあえずロドックにそれをしらせに、その店を訪れていた。

「じゃあ、俺はしばらくこの町を離れるから。たぶん戻ってくると思うけどな」

「そうか。また来たときは力になろう」

「よろしく」

タマキはロドックと握手をしてから、店の外に出た。そして町を歩いていると、いつの間にかファスマイドが横に並んできていた。

「何か用か」

「この町を離れるんだろ。僕も一緒にいたいね」

「スパイでもしたいのか？」

「別に、そういうわけじゃないよ。ただ面白いものが見られるんじゃないかと思ってる」

「面白いことなら俺も期待したいところだ」

「おお、心強いね。で、ついていってもいいのかな？」

「できるんならな」

「それはどうも」

その後は二人とも黙って町の外、人気のない場所まで移動した。タマキはマントに手を触れてそれを闇に染めると、空高く飛び上がった。

「相変わらずすごいもんだね」

ファスマイドはそうつぶやいてから、その後を追って飛び上がった。

それからしばらくして、タマキが村の近くに下りると、少し遅れてファスマイドも着地した。

「なかなかいい感じのところじゃないか」

「けっこうとばしたつもりだけど、お前、本当に何者だ？」

「楽しいことが好きなだけだよ。まあそんな細かいことはいいじゃないか」

気楽な様子のファスマイドに、タマキはなんとなく疑わしそうな目を向けてから、軽く笑った。

「おかしなまねをするなよ」

「ああ、もうやってきたしね」

「村の場所を誰かに教えてきたとかか」

「鋭いねえ。でもまあ、これから君達が行く場所のことは秘密にしておくよ」

「そうしてもらいたいな」

それだけ言うとタマキは背中を向けて、村を目指して歩いた。

「それで、その男と一緒にここまで来たのですか」

家の中で、椅子に座ったカレンは若干頭が痛そうにしていた。恵美はできるだけファスマイドと距離をとって立っていた。一方、タマキは椅子に座り、ファスマイドはドアに寄りかかっている。

「ついてきちゃったものはしょうがないしな。それに、はつきり敵と言えるわけでもなさそうだし」

「そうですか」

カレンは大きくため息をついた。

「そうおっしゃるなら、気にしないことにします」

それを聞いたファスマイドは満面の笑みで何度もうなずく。

「話がわかってもらえてうれしいよ。そういうわけだから、エミちゃんもよろしく」

だが、後の三人はそれを適当に流した。それからカレンは気を取り直して、口を開いた。

「まず、私達を妙な者達がつけてきて、襲いかかってきました。あれは王国の者ではないのは明白だと思います」

「どんな奴等だったんだ？」

「フードがついたローブを着ているうえに、仮面をつけていたのでよくわかりません。さらに、おかしい怪物にまで姿を変えました」
「怪物か。とんでもなく怪しい連中だな。お前は何か知らないのか？」

タマキがファスマイドに話をふると、返ってきたのは怪しい、何かたくらんでいそうな笑顔だった。

「さあ、何者だろうね。僕は知らないなあ」

「明らかに知っているのに、そういう言いかたはやめてください。隠したいならそれでかまいませんが、無駄な言葉は聞きたくありませんね」

カレンの手厳しい一言に、ファスマイドの笑顔は凍りついた。

「わかりました。黙っておくよ」

その返事に冷たい視線を送ると、カレンはタマキに顔を向けた。

「おそらくあの者達はこの場所を知っているはずです。すぐに出発したほうがいいでしょう」

「そういうことなら、早く出たほうがいいな。この村にも被害が出る可能性があるし」

「では、明日にも出発することにしましょう」

カレンがそう言ったところで、小さいが地響きのような音が聞こえ、タマキとカレンは顔を見合わせた。

「少し俺が来るのが遅かったかな」

「いえ、むしろここで迎え撃てるのは幸運かもしれません」

二人は顔を見合わせてうなずくと、同時に立ち上がった。

「あの、なにがあつたんですか？」

恵美がそう聞くと、カレンは微笑を浮かべた。

「少しやつかいなことが起こったようなので、これから私達で片付けてきます。エミ様はここで待っていてください」

そこにファスマイドが口をはさむ。

「そうそう、今回は僕も手を貸すから心配しないでいいよ」

「俺達に協力する気なのか？」

タマキの質問にファスマイドは手を広げて、おおげさに同意の意を示した。

「もちろん。君達の戦いをアシストしてあげるよ。まあ、直接的なものじゃないけどね」

「期待しないで楽しみにしておくよ」

それだけ言ってタマキはその横を通って外に出て行った。カレンはしばらくの間ファスマイドの目を見てから近づき、その腕をつかんだ。

「では、行きましょうか」

「はいはい。じゃあねエミちゃん」

ドアが閉まる音を聞いてから、一人残された恵美は自分の体を抱いて床に座り込んだ。

観戦

外に出たタマキが見たのは、まだ遠くにいる巨大な怪物の姿だった。

「カレン、さっき言ってた怪物ってあれか」

「姿は似ていますが、大きさがだいぶん違いますね」

「とにかく、こっちに来る前になんとかしないと」

そこで、いきなり手を叩く音が二人の後ろで響いた。

「そういうことなら、僕が手を貸してあげよう」

二人はその声と同時に振り向いて、じっとファスマイドの顔を見た。

「二人してそんなに見つめないでくれよ」

「手を貸すっていうのは、何をするつもりなんだ？」

「この村に被害が及ばないように、結界を張ってあげようってことさ。君らは村への被害を心配せずに、ある程度の力を出して戦えるってわけ」

「この間やったやつか。確かにあれは効果がありそうだな」

「それはどういことですか」

カレンが口をはさむと、タマキがそれに答える。

「ああ、首都でこいつとちよつとばかりあったんだけど、その時結界っていうのを張ってたらしくて、それなりの魔法を使ったんだけど、誰も気がつかなかったんだよ」

「そうですか。それは興味深いですね」

「そうそう。だから僕に任せてもらいたいんだけど」

「で、何か条件があるんだろ」

タマキがそう聞くと、ファスマイドは満面の笑みを浮かべた。

「君達の戦うところを見せてくれれば、それでいいよ」

「勝手にしろ」

「ありがとう。じゃあ、早速」

ファスマイドは真剣な表情になって、地面に右手をついた。そのままの体勢で数十秒経つと、手を地面から離してゆっくり立ち上がった。

「とりあえずこの村に簡易的な結界を張ったから、これであれが村に入ってくることはないよ。あんまり強力な攻撃を防ぐようなことはできないけどね」

「それで十分だ」

それだけ言うとタマキはカレンとうなずきあい、同時に怪物のほうに走り出した。

「気合入ってるねえ。相手が強いと楽しいんだけど、どうかな」

ファスマイドは笑顔で早歩きをして二人の後を追った。

そうして町から少し離れた場所に到着してみると、タマキの前には巨大な怪物、カレンの前にはフード付のローブを着た者が立っていた。

「一対一とはちょうどいい、楽しみだねえ」

ファスマイドはそうつぶやくと、近くの木のとっぺんまで飛び上がり、そこに腰を下ろしてじっくり観戦する姿勢をとった。

「こいつはけっこうな迫力だな」

タマキが見上げる怪物は体長十メートル以上はあった。かなり凶悪な風貌と雰囲気だったが、タマキは表情を全く変えずに木の上のファスマイドをちらつと見る。

「何を期待してるんだかな」

そこに怪物の拳が振り下ろされた。衝撃が起こり地面がえぐれたが、タマキは一步後ろに下がってそれをかわしていた。

「大した威力だな！」

タマキの足がその拳を蹴りとばすと、怪物は若干体勢を崩して後ずさる。

「まだまだ！」

マントを闇に染めたタマキが怪物の目の前まで飛び上がり、その顔を思い切り蹴った。だが、怪物はその巨体からは想像できない

速さで身をかがめると、タマキの下をくぐろうとする。

「そうはいくかよ！」

タマキは宙返りをして、その背中に急降下をする。そのまま膝を突き立てると、無理矢理怪物を地面に押し付けた。

だが、怪物は力でそれをはねのけようとした。タマキはそれを利用して上空に飛び上がってから空中で静止した。

「力はある。でもあの図体でタマキ君より力が弱そうっていうのは、ちよっと物足りないなあ。まあタマキ君にそれだけ力があるってことだし、今回はこんなもんな」

ファスマイドがつぶやくと同時に、タマキは立ち上がった怪物の目の前に降り立った。

「そろそろ終わりにさせてもらおうか。五倍！ ブリザードストーム！」

タマキが叫ぶと怪物を包み込むように竜巻が現れ、その巨体を舞い上げ始めた。すぐに竜巻は勢いを増し、怪物を勢いよく空に放り上げた。

タマキはそれに向かって手を突き出し、そこに火の玉を出現させた。

「三十倍！ 特大ファイアボール！」

火の玉が放たれると一気に膨張し、怪物に向かっていった。そして、火の玉が当たった怪物は派手な爆発に包まれ、欠片も残さず消滅した。

「こっちは終わり。さて、あっちのほうはどうか」

ファスマイドがカレンのほうに目を向けると、剣を抜いて向かい合っているだけで、まだ動きはないようだった。

最初に動いたのはローブのほうで、大きく振りかぶってカレンに剣を振り下ろした。カレンはそれかわすと同時にその胴を切った。だが、血は出ずに、ローブの者は痛みを感じている様子もなかった。そして、それは後ろに飛び退いてから剣を投げ捨てると、腕を交差させた。ローブのすそから触手のようなものが這い出し、カレン

に襲いかかった。

カレンはその体を白銀の輝きに包ませると、一瞬でその触手を全て切り落とした。そのまま地面を蹴ってロープの者との距離を詰める。

そこにも触手が襲いかかるが、それを全てかわしながらカレンは上空に飛んだ。ある程度の高さまで飛んでから剣を振りかぶると、その白銀の輝きを飲み込むように柄の部分から闇が噴出して、まるで大きな炎のように剣を包み込んだ。

カレンはそれを構えて、地面のロープに向かって急降下を始める。触手が伸びてくるが、それは全て軽く振られた剣の闇に触れ、飲み込まれるように消えてしまう。

その勢いのまま、闇をまとった剣が振り下ろされた。

「こっちも跡形もなしか」

ファスマイドのつぶやきの通り、ロープの者は最初からいなかったかのように、消えていた。

二つの道

タマキ達は村の家に戻ってきていたが、なぜかファスマイドも一緒だった。

まるで自分の家にいるようにくつろいで椅子に座っているファスマイド。タマキは壁に寄りかかって立ち、カレンはファスマイドと恵美の間で、恵美を守るようにして立っていた。

「さて、君達はこれからどうするんだい？」

その問いにタマキは姿勢を変えずに口を開く。

「そうだな、ここもばれてるようだし、さっさとこの国を出るとするか？」

「おやおや、まだ敵の正体も見きわめてないのかい？ それに、王国の兵士達が来るかもしれないのを放っておいていいのかな？」

「それをお前が教えてくれれば、手間が省けるんだけどな。それに、兵士に関して言えば、あの女王様がそんな無茶をやらすとも思えないし」

ファスマイドはそれにたいして笑顔を浮かべた。

「まあ、女王様に関する君の見方は正しいだろうね。でも、僕だって全てを知っているわけじゃないし、そういうことは自分で調べないと面白くないだろう？」

「それを調べれば、彼女を元の世界に帰す方法もわかるっていうのか」

「まあ僕は無理だっ て意見だけだね」

そう言っ てファスマイドはカレンを見た。だが、カレンは何も答えようとはしない。変わりにタマキが口を開いた。

「それならカレンから聞いた、方法がないわけじゃなさそうだったこともな。でも俺は自分で見てみないことにはなんとも判断できないんでね」

「なるほど、さすがに大した自信だね。そういうことなら、君はこ

「こに残るのかな」

「そうだな、それはいいかもしれない」

「では、私はエミ様とこの国を離れるべきでしょうか」

「そうしてもらったほうがいいかな」

タマキがそう言つと、ファスマイドはあごに手を当ててカレンとタマキを交互に見た。

「じゃあ、これから君達は別行動をするわけか。タマキ君はここに残つて、あとの二人はそう、ノーデルシア王国にでも向かうつてところだろうね」

「で、お前はどうするんだ」

「別に。僕はいままでと同じように、楽しく見させてもらつよ。さしあたっては、君と一緒に行動してみようかな」

「断つたところで、どうせついてくるんだろ。好きにしる」

そう言つてから、タマキはカレンに近づいてその肩に手を置いた。

「じゃあカレン、そっちは頼む。エバンスによろしくな」

「はい。タマキさんも無理はしないでくださいね」

「わかつてるよ」

それから二人は軽くお互いの体を抱いて、その体を放した。

「じゃ、行つてくる」

タマキは家から出て行つた。ファスマイドがそれを追って出て行くのを見送つてから、カレンは恵美のほうに向き直つた。

「では私達もすぐに出発しましょう」

「あの、ノーデルシア王国っていうのと、エバンスさんっていうのはどういうことなんでしょうか」

「ノーデルシア王国はこの世界で最も大きな国です。そしてエバンス様はその国の王子です」

「ええと、すごい人と知り合いなんですね」

「必ずエミ様の力になってくれます。それに、召喚ということに詳しい方もいますので」

「はい。わかりました」

カレンと恵美は家の中の荷物の整理を始めた。

それから数十分後。タマキとファスマイドは並んで空を飛んで首都を目指していた。

「お前、そうやってずっと俺にくつついてる気か！」

「そうだよ。君と一緒にだと退屈しそうにないからね」

タマキが声を張り上げると、ファスマイドも負けじと大声でそれに応じた。

「そいつはどうも」

それだけ答えて、タマキはスピードを上げた。

そして、首都から少し離れた場所に着地するとゆっくりと歩き出した。

「で、これからどうするつもりだい？ 町に潜り込むのか、それとも何か別の方法かな」

「それなら、せっかくだからお前に手伝ってもらおう」

「手伝う？」

「女王さんとか他のお偉いさんとも知り合いだろ。俺がああ王宮に入れるように手配しておいてくれ」

少しの沈黙の後、ファスマイドは実に楽しそうに笑い出した。

「ハ、ハハハハハ！ これはいい！ 確かにあそこにいるのが一番手っ取り早いからね」

「返事はどうだ」

「もちろんやらせてもらおうよ。いや、楽しみだね」

ファスマイドは楽しそうな表情でタマキの前に出ると、先導するように歩き出した。

一方、出発の準備を手早く済ませたカレンと恵美は、荷馬車に乗ってアディソンに見送られていた。

「では、あの家はあなた達の自由にしてください。それから、首都のほうから兵士が来るかもしれませんが、私達のことには隠さずに話していただいてかまいません」

「それでいいんですか？」

「そうするのが一番です。後のことは私のほうでなんとかしますから」

「わかりました。タマキさんやカレンさんには本当に感謝しています。どうかご無事で」

カレンはその言葉にうなずき、荷馬車を出発させた。

王宮での生活

タマキが王宮に乗り込んでからすでに一ヶ月が経過していた。滞在しているのは以前恵美がいた部屋だったが、その様子は大きく変わっていた。

様々な本が散らばり、実験用に持ち込まれた机の上は芸術的なまでに散らかっていて、鍋や食器等もテーブルの上に乗っかっている。「しかしまあ、よくこれだけ散らかしたものだね」

ファスマイドは感心した様子で部屋を見回していた。タマキはそれを見ずに、椅子に座って本のページをめくっている。

「片付けとかはいらないって言うてあるからな。それにカレンもないんだから仕方がないだろ」

「それにしても、もう少しくらいしつかりしてもよさそうだと思うけどねえ」

「余計なお世話だ。それより、今日はキアンと会う時間はとれたのか」

「僕は別に君の補佐役じゃないんだけどね」

そう言いながらも、ファスマイドは部屋から出て行った。

それから数時間、タマキはずっと本を読んでいたが、ドアが開けられるとやっと顔を上げた。そこには機嫌の悪そうなキアンが立っていた。

「どうも女王様」

キアンはタマキの言葉にはこたえず、椅子に座った。

「わざとらしく堅苦しい言いかたはよせ。それより、そろそろ動かなくてはよいのか？」

「そっちがもつと情報をくれれば俺としては助かるんだけどな。俺だって、もうけっこうここににいるんだし、もう少し打ち解けてくれないんじゃないか？」

「まだお前がこの国にとって利益になる存在かはわからないからな」

「それなら最初に言っておいただろ。俺に干渉しないことと、俺のことは内密にしておくこと、基本的にそれだけ守ってくれば、協力は惜しまない。そういう条件だったはずだ」

「それは守っているつもりだが、ここに来てからというものの、ずっと部屋に閉じこもっているだけで何もしていないではないか」

タマキは本を机の上に置いてから、ため息をついた。

「相手が動かなきゃどうしようもないだろ。俺の計画じゃ、もっと早く露骨に動いてくると思ってたんだよ、あの怪しいローブ連中がさ」

それを聞いたキアンはわずかに顔をゆがめた。タマキはそれを見て目を細めた。

「俺の知らないところで動き回ってるのか？ 紹介してもらいたいな」

「それはできない」

「それって、まさかあの連中が俺より強いって思ってるのか？ それはしない。いいかげん、あきらめて全部吐いて欲しいところだ」

キアンはタマキの一言を聞いてから、しばらくうつむき、勢いよく顔を上げた。

「いくらノーデルシアの勇者といっても、悪魔には勝てまい」

「悪魔？ ああ、それならここにいるけど」

タマキは首からさげているアミュレットつかんで、顔の高さにまで持ち上げた。

「それが何だと言っんだ」

キアンは無然とした表情でそう言ったが、次の瞬間、アミュレットから闇の波動が発生し、部屋を満たした。

「これでいいのか」

「ああ、上出来だ」

タマキはアミュレット、サモンと言葉をかわして手を放した。キアンはそれらの状況に全く対応できていないようで、ただ呆然としていた。

「こいつのことは今はサモンって呼んでるんだけど、元はドゥームデーモンっていう名前だったんだよ。今は俺の体の中にいそうろうしてるわけだけどな」

「ドゥームデーモン。そんなものを取り込んでいると言うのか」

「ああ、これで吐いてくれるか？」

キアンは頭の中で、この突然のことを考えていた。あのノーデルシア王国を救った勇者の力と、強大な力を持つと言うドゥームデーモン。いきさつはわからないが、今はその二者が一緒になっている。しかし、それでもオメガデーモンの力を上回るかはわからない。しかも、おそらくこの男はここにとどまることはまずないと考えられた。それでは力を手に入れることができないし、意味がない。

「何も言うことはない」

「なるほど。まあそっちにも事情があるだろうし、そういうことから、俺は俺で勝手にやらせてもらおう」

そう言うのと、タマキはキアンを無視するように、再び本を読み始めた。その様子を見て、キアンは立ち上がり、振り返ることをせずに部屋から出て行った。

ドアが閉まる音を聞いたタマキは、本を読みながら、サモンに語りかける。

「あちらさんのバックにはなにがいるんだと思う？　俺はお前の同類だと思っただけど」

「同じ世界に属するものということなら、そうだろう。だが、我と同じものなどおらん。いや、そういうえばおかしな奴がいたな」

「おかしな奴って、お前より変わり者なのか？」

「ただの頭が悪い奴だ。たしか、オメガデーモンとか名乗っていたはずだが」

「そいつは人間に取引を持ちかけるような奴なのか？」

「さあな。たしか、あれはとにかく力を求めていたような気がするが」

「そいつが今回の黒幕なら、召喚とかはなんなんだろうな」

「お前のように力があるわけでもないようだし、わからんな。馬鹿
の考えることなど知らん」
「それは困った話だ」

召喚のこと

「しかしまあ、タマキ君が来てくれたおかげでずいぶん動きやすくなったもんだね」

ファスマイドは王宮のてっぺんに座って、誰にもなくつぶやいていた。それからおもむろに立ち上がると、下に向かって飛び降りた。

「いきなり落ちてくるなよ」

珍しく中庭に出ていたタマキは、いきなり上から降ってきたファスマイドに驚いた様子もなかった。

「いや、君に言うておくことがあってね」

「なんだ突然、わかったことでもあったのか？」

「まあね。僕にとつても君にとつても重要なことだよ」

「もったいぶらずに早く言えよ」

「わかったよ。じゃあここじゃなんだから、君の部屋に行こうか」

二人は並んで歩いて、タマキの部屋まで到着した。ファスマイドとタマキは適当に椅子に座り、向かい合った。

「で、重要なことっていうのを聞かせてもらおうか」

「まあそうあせらないで、まずはお茶でもだしたらどうかな」

「その水差しに茶が入ってるから、適当に飲めよ」

「はいはい、ぬるい茶でもいただきます」

ファスマイドは転がっているコップを拾って水差しからお茶を注いだ。それを一口飲んでから、足を組んだ。

「さて、話っているのは、エミちゃんが召喚された理由なんだけど」

「どんな理由だ？」

「まあどうやら、あの娘には力はないけど、どうも彼女の存在自体に意味があるようなんだよ」

「存在自体っていうのは、どういうことなんだ？」

「あの娘は言うてみれば特別な素材だね。どうやら、悪魔を実体化

させるような力があるらしい」

「悪魔の実体化？ 誰かの体を利用したりする必要がないのか。でも、それならなんでまだ実行されてないんだよ」

「それは、あの娘だけじゃ足りないからだよ。この世界の何かが必要ならしい」

「それでこの国の兵士達が出払ってるのか。で、その何かっていうのはわかってるのか？」

そこでファスマイドは大げさに手を広げて、首を横に振った。

「それがわからないんだよ」

「それじゃ探しようがないだろ」

「いや、どうも小さい何からしいけどね」

「なるほどな。恵美の召喚と保護のうえにそんなもんを探すとなると人手がいるし、そのためにこの国を利用したってわけか。で、あのローブ連中は悪魔の手先か」

「そうだよ。まあ君達にずいぶんやられちゃったみたいだけどね。」

それに、あいつらは元々数も少ないから、手軽な感じのこの国に目をつけたんだよ。でも、利用ってわけじゃなくて、契約だろうね」

「ふーん。それはそうと、恵美がここにいないんじゃない、何かつていうのを見つけてきても意味がないよな」

「それはそうだから、エミちゃんのほうはしっかり狙われるだろうね。とは言っても、怖い人が一緒だからあつちは大丈夫だろうけど」

タマキは少し首をかしげた。

「お前はカレンに遠慮があるというか、引き気味だな」

そう言われて、ファスマイドは苦笑いのようなものを浮かべた。

「僕にも怖いものはあるからねえ」

「まあいい。話をまとめると、悪魔は実体化のために恵美を召喚させて、もう一つ必要なものを探させている真つ最中なわけだ」

「そういうこと。君はこれからどうするんだい？」

「この国の連中が探してるんなら、見つかったらここに持ってくるんだろ。じっくり待たせてもらうさ。それに、お前から目を離すわ

けにはいかないし、悪魔の連中たちが何をしでかすかもわからないからな」

「ここの奴らを守る気かい？ そんな価値があるかな」

「そんなこと俺の知ったことか。俺は俺のやりたいようにやるだけだ」

特に気負いもせずにそう言ったタマキに、ファスマイドは満足そうな顔になった。

「さすが勇者と呼ばれるだけのことはあるね」

ファスマイドは立ち上がったからにやりと笑った。

「お互いに、自分のやりたいことをしっかりとやろうじゃないか」

それだけ言って部屋から出て行った。残されたタマキは立ち上がるとファスマイドが使ったコップを手にとって部屋の外に出た。

「ああ、これ洗つといってくれるかな」

部屋の近くに控えていた侍女にコップを渡して、再びタマキは部屋の中に引つ込もうとしたが、そこにキアンが早足で近づいてきた。

「ファスマイドがいたようだが、何を話していたんだ」

「いいや、大したことじゃない」

「それは私が決める」

それにたいしてタマキは軽く笑った。

「あんたらが契約した悪魔に関しての話だよ」

一瞬キアンは顔をしかめたが、すぐに平静を装った。

「そうか。余計なことはするなよ」

「俺にとつて余計なことはいらないさ」

そう言ったタマキの表情は不敵な雰囲気満ちていた。

二人の道中

「今日はこのあたりで野営しましょう」

カレンはそう言つて荷馬車を止めた。恵美は少し疲れの見える表情で荷台から降りる。

「あとどれくらいで町に着くんですか？」

「邪魔が入らなければ、明後日くらいには到着する予定です」

恵美はそれを聞いて明らかにほっとしたようだった。カレンはテントを手早く用意し始めたが、突然その手を止めた。

「エミ様、少し隠れていてください」

恵美が言われた通りに近くの茂みに隠れると、カレンは荷馬車のそばに立つて数十分後、馬車の音が小さく聞こえてきた。

それは隊商のようで、何台もの馬車が連なっていた。カレンが軽く手を上げると、その先頭を歩いている護衛らしき人物もそれに応じた。

「何かあったのか」

一人でいるカレンを妙に思ったのかその男は声をかけてきた。

「いえ、ここで野営をするだけです」

「そうか、気をつけてな」

それだけ言つて隊商はそのまま止まらずに進んだ。だが、カレンは何かに気がつくと突然最後尾のほう目指して走りだした。

隊商の人間達は驚いて声もかけられなかったが、すぐにオーガの叫びが響き、護衛達は慌てて武器を構える。

普通ではそれでは後ろを守ることはできないようなタイミングだったが、カレンが素早くそれに近づき、剣の一振りで切り倒した。その鮮やかさに、隊商の人間達は全員が呆気にとられていた。

時が止まったような雰囲気が場所を支配していたが、一台の馬車から一人の中年に手が届いたような女性が降りてきた。

その女性はカレンに近づいていき、まずは軽く頭を下げた。

「ありがとう。あんたのおかげで助かったよ」

「いえ、どのみちあれは倒すことになっていたでしょうから、御礼を言われるようなことでもありません」

「堅いねえ、あんた。まあいいや、あたしはアヤっていうんだ。この隊商の責任者をやってる」

「カレンです」

二人は軽く握手を交わした。

「ところであんた、あたし達と一緒に来たらどうだい？ 一人旅は色々大変だろうしさ、あんたみたいに強いのが一緒に来てくれれば大助かりだし」

「いえ、私は一人旅ではないので」

「誰か一緒なのかい？ そんなことで遠慮しなさんなって」

カレンはそこで少し間をおいてから口を開く。

「では、少し相談をしてきます」

「ああ」

アヤはうなずいてから隊商の方に戻り、声を張り上げてしばらく休むということを宣言した。カレンはそれを横目で見ながら、恵美のところまで戻った。恵美は茂みの中から顔をだして、隊商を不安げに見た。

「あの、あの人たちはなんなんですか？」

「隊商のようです。同行しないかと誘われたのですが、どうしますか？」

「一緒に行くと、何かいいことがあるんじゃないでしょうか」

「大勢のほうの旅は楽になりますね。見たところまともな隊商のようですし、問題はないと思います」

恵美はそれを聞いてしばらく考え込む様子を見せた。

「わかりました。カレンさんがいいっていうなら、そうしてください」

「はい」

カレンが返事をして、再びアヤの元に向かうと、アヤはそれを見

て笑顔になった。

「ああカレン、話はまとまったのかい？」

「ええ、ご一緒させていただきます」

「よし」

アヤは手を叩いてから、息を大きく吸い込んだ。

「今日はここで野営だ！ 全員準備をしろ！」

とんでもない大声だったが、隊商のメンバーは慣れているらしく、落ち着いた様子で野営の準備を始めた。

「ところで、あんたはどこに向かつてるんだい？」

「ノーデルシア王国までです」

「そりゃちょうどいい！ あたし達もそっちの方に向かつてるんだよ。で、あんたの連れっていうのは？」

「ではこちらに」

カレンは恵美のいる場所までアヤを連れて行った。アヤは恵美を見ると、なんとも優しい表情になった。

「はじめまして、あたしはアヤっていうんだ。よろしく」

「は、はい。私は恵美っていいいます」

「エミか。見た目と一緒に可愛い名前じゃないか」

そう言ってから、アヤはいきなり恵美の肩に手を置いた。

「あんたみたいな娘がどんな事情で旅をしているのかは知らないけど、あたしの隊商にいればできるだけ不自由はさせないし、しっかり守ってあげるからね」

「あ、ありがとうございます」

恵美はとにかく頭を下げる。

「なーに、気にしない気にしない」

アヤは破顔一笑という感じの笑顔を見せると、恵美の頭を軽く叩いて一歩下がった。

「じゃ、あたしはあつちをまとめないといけないから」

そうして早足でその場から去っていった。恵美はその後姿を見ながら大きく息を吐き出す。

「すごい勢いのある人ですね」

「はい。しかし、信用できそうな人物です」

小さな町

隊商と合流して二日後、カレン達は小さな町に到着していた。

「あたし達は商売があるから、三日ほど滞在する予定だけど、あんたらはどうするんだい？」

アヤは荷物を降ろすのを監督しながらカレンに聞いてきた。

「一緒のほうの結果的には早いでしょうから、それまで私達もここに滞在します」

「じゃあ、宿はどうするんだ？」

「それはこちらで手配するので、心配ありません」

「宿代ぐらいこっちで持ってもいいけど。護衛してもらってるんだしさ」

「そういうことでしたら、お願いします」

「よし！ じゃあ宿が決まったら知らせてくれ。あたし達は町外れにキャンプしてるから」

「わかりました。では、私達の荷馬車と荷物をよろしくお願いします」

「ああ、任せときな」

カレンはそれにながずいてから、離れた場所に立っている恵美のところまで歩いた。

「宿をとることにしました。この町には三日ほど滞在することになりそうです」

旅に疲れていた恵美はそれを聞いてあからさまに安堵したようだった。

「では、行きましょうか」

二人はそれからそこその宿に一部屋をとった。恵美はすぐに久しぶりのベッドに座り込んだ。

「私は少し出てきますので、エミ様はゆっくりしててください」

「はい、そうします」

カレンは部屋の外に出て鍵をかけた。そして、向かった先は町外れ。

今まで追手がある様子はなかったのだが、それは不自然なことだった。そう考えると、むしろこちらが動きにくいこういった町でしかけられるような気がしていた。そのためには戦いやすい場所を探しておく必要がある。

カレンは早足で町の中と周囲の様子を見てから、遅くなる前に宿に戻った。部屋に入ってみると、恵美はまだベッドの上で寝ていた。カレンはその傍らに立って、少しの間、恵美の顔を見つめていた。よほど疲れていたようで、今は不安なものもない深い眠りの中にいるようだった。

「エミ様」

そう呼びかけて、カレンは軽く恵美の肩に触れると、恵美はビクツと体を震わせて目を開けた。体を起こして外を見てから、すでに暗くなってきたのに驚いた表情を浮かべた。

「ずいぶん寝ちゃったんですね」

「お疲れだったのでしょうか。夕食はどうしますか？ 持ってきますが」

「はい、お願いします」

結局、その日は恵美は部屋から出なかった。

翌朝、恵美が目覚ますと、ちょうどカレンが狭いテーブルに朝食を並べているところだった。

「おはようございます。着替えは用意してありますので、食事の前にどうぞ」

言われた通り、恵美はベッドから起き上がって服を着替え、カレンと一緒に朝食を食べ始めた。

「あの、今日は何か予定があるんですか？」

「特に何もありません。エミ様はやりたいことがあるのですか？」

「ちよつと町を見てみたいなって思っ、カレンさんに付き合ってもらいたいんですけど」

「もちろんいいですよ。朝食が済んだら出かけましょうか」

そういうわけで、恵美とカレンは二人で町を歩いていった。以前首都の町を歩いたときよりも、恵美の表情は明るい。

「落ち着いたいい町ですね」

「そうですね、小さな町ですがいいところです」

二人は露店をのぞいたりしながら、町の中心の広場にたどり着いた。広場にも露店が出ていて、それ以外にも様々な人々がいた。

恵美はベンチに座ってその光景をのんびりと見始めた。カレンはその近くに立って、さりげなくあたりに注意を払っている。

だが、何事も起こらず、しばらくそうしてから二人は広場から立ち去って、昼食のためにいったん宿に戻ることにした。

閑散としている宿の食堂に二人は入り、恵美は座ってカレンは食事を取りに行った。あまり具の入っていないシチューとパンで軽く昼食を済ませた二人は再び外に出ようとしたが、カレン外へ続くドアを開けたところでいきなり立ち止まった。

「エミ様、申し訳ありませんが、部屋に戻っていただけますか」

明らかに雰囲気が変わったカレンに、恵美は黙ってうなずいて部屋に向かった。カレンは外に出ると、早足で町の出口に向かった。

そうして、町から離れた場所まで着くと、手近な木に寄りかかって何かを待つ体勢になった。数十分後、カレンの前にはフード付きのローブを着けた者が現れていた。

「思ったよりも遅かったですね。しかし、あまりしつこいのも困ったことですが」

そう言つと、カレンは剣を抜いて一歩踏み出した。

悪魔の分身

剣を構えるカレンにたいして、ローブの者はフードを取った。その下にあつたのは仮面ではなく、顔に刺青のある若い女の顔だった。「お前は邪魔だ。消えてもらう」

無表情のままの低い声の一言に、カレンは軽く首をかしげた。

「できれば理由も聞かせていただきたいところですね」

その問いかけに、女は無表情のまま腰に下げていた皮袋を手に取り、その中から小さな宝石のようなものを取り出した。

「オメガ様、力をお授け下さい」

宝石をかかげると同時に女は浮き上がり、その体が内部からわずかに膨張したように見えた。その体が地面に落ちると、あきらかにおかしい重みのある音がした。

そして、女、だったものが顔を上げると、その目は死んだ魚のように、白く濁っていた。

「話は、聞けそうにありませんか」

カレンはため息をついてから、あらためて剣を構えた。次の瞬間、女は突進してくる。カレンはそれを軽くかわしてから、後ろに下がって距離をとった。

女はすぐに振り返ろうとしたが、そこには刃の形をした炎が襲いかかる。だが、それは腕の一振りであっさり霧散してしまった。

「簡単にはいきませんか」

カレンはつぶやいてから目を閉じて、再び突進してきた女をかわしてから、目を開いて白銀の輝きを見せた。

女はこりずにもう一度突進してきたが、カレンは今度はそれにたいして、剣を持っていないほうの腕を突き出して、止める。わずかに押されたが、女の突き出した腕をしっかりとつかんで、その勢いを殺していた。

そのつかんだ腕を引き込んで、カレンは膝を顔面に叩き込もうと

したが、女は無理矢理腕をもぎ放しながら後ろにさがってそれをかわした。

「やはり貴様は」

女がそれまでとは違う声で何かを言おうとしたが、カレンはそれを待たずに踏み込んで白銀に輝く剣を振り下ろした。

左腕が飛んだが、女は動転することなく後ろに飛び退くと、すぐに腕を再生した。それを見てカレンは軽く首を横に振った。

「どうにも人間を簡単に捨てるのは感心しませんね」

もう一度カレンは踏み込んだが、女はそれを上に飛び上がってかわした。カレンはすぐに白銀の翼を展開すると、それを追って飛んだ。

だが、女は上空からカレンに向かって衝撃波を放つ。それをまともに受けたカレンは上昇した以上の勢いで地面に叩きつけられた。

土煙が立ち上り、カレンの姿が見えなくなつたが、その中から女に向かって闇をまとつた何かが飛んだ。それは女の右肩を飲み込むようにして決り取った。

さらに、飛び出したカレンは女の胴を剣で薙ぎ払おうとする。女はそれをなんとかかわしたが、そこにカレンの蹴りが上から襲いかかり、直撃を受けた女はバランスを崩して地面に向かって落ちていった。

カレンはそれを追って、女が地面に墜落すると同時にその胸元に剣を突き立てた。しかし、女はなんともないような様子でカレンの腹に蹴りをいれた。カレンは剣を抜きながら衝撃を逃がすように横っ飛びをしてから、剣を構えなおした。

女はゆっくりと立ち上がり、刺された部分を撫でると、傷はあつという間に埋まった。だが、右肩の傷は直りが遅い。それを見たカレンは軽くうなずいてみせた。

「大した力ですね。その力を与えたオメガというのは何者ですか？」

「全てを支配するお方の名だ。貴様がそれ以上知る必要はない」

「話していただけないのなら、用はありません」

そこでカレンは一気に女との距離を詰める。そして右手で剣を振り下ろすが、女はそれを半身になってかわす。だが、カレンはそこに闇をまとわせた左手を叩き込んだ。わき腹にカレンの突きをもろにくらった女は吹っ飛んで地面を転がった。

カレンは剣を掲げ、そこに巨大な闇の塊をまとわせた。そして、膝について立ち上がろうとする女に、それを正面から振り下ろす。

「そんなもの！」

女は振り下ろされる剣に向かって手のひらを向け、そこから雷を放つ。しかし、それは全て剣がまとった闇に飲み込まれた。そして、闇の塊が女を直撃した。

女は闇の塊をなんとかかわしたが、その右半身はほとんどが闇に飲み込まれ、残ったのはほとんど残骸としか言えなかった。それでも生きているようで、カレンに残った手を向けようとした。カレンは無言でそれにもう一度剣を振り下ろして、女を完全に消しさつた。カレンは普通の状態に戻ると、剣を納めてから周囲を見回した。消した女の他は誰もいないのを確認してから、ゆっくりと町の方に足を向けた。

仕込み

タマキは自分で作ったシチューを温めなおして夕食にしていた。

「それにしても、まだしかけてこないとはな」

「お前が何もしないからだろう」

「いるだけでも十分だと思ったんだけどな。サモンよ、お前に何か考えはないのか？」

「適当に爆破でもしてみたらどうだ」

「面白そうだけど却下だな。面倒くさいし」

「ならばどうする。この様子だといつまでも待つことになるぞ」

「それもそうだ。こっちに餌が必要だよな」

「そういうことなら、タマキ君が大いに邪魔になる存在だっていうのを思い知らせるようなことをしないとね」

いつの間にかファスマイドが部屋の中にいたが、タマキは驚きもせず、顔もそっちに向けようとしなかった。

「邪魔ならしてと思うんだけどな」

「君はこの王国の連中の邪魔にはなってるけど、あっちの連中には後で相手をすればいいと思われてるんじゃないかね」

「つまり、今はカレンのほうに集中してるのか」

「たぶんね。それに、エミちゃん達がノーデルシア王国に向かってるなら、あっちも危ないと思うけど」

「ああ、それなら大丈夫だ。ちよつと前に俺が作った新兵器を送っておいたし、助っ人も呼んどいたからな」

「新兵器に助っ人ね。それはまた面白そうだ。まあそれはともかく、こっちに注意を向けさせたいなら、もつと派手に動かないと駄目だよ」

「派手にか。よし、わかった！」

タマキはシチューの入った器を置いて立ち上がると、早足で部屋から出て行った。ファスマイドはそれを見送ってから、鍋のシチュー

―をすくって一口食べた。

「彼、けっこう料理はうまいよね」

「失礼しますよっと」

タマキはキアンの私室の前に立つ兵士を無理矢理押しのけて扉を開けた。

ワインの入ったグラスを手にくつろいでいたらしいキアンは、タマキの姿を認めると、不機嫌そうな声をだした。

「何の用だ」

「まあ、ちよつと協力して欲しいことがあつてさ」

「協力？」

「悪魔の手先が最近動いてないみたいだから、ちよつと圧力をかけてやりたいんだ」

「どういふことだ」

「あいつらはあんたらが必要だから契約をしたんだろ。なら、その契約者をどうにかするつてやってやれば少しは俺のほうに注意を向けてくれるかと思つてね」

キアンはそれを聞いて目を細めた。

「それで我々にどんな利益があるというのだ？」

「ないんじゃないか。悪魔との契約も反故になるだろうし」

「しかし、お前はそれをやる気か」

「ああ、王宮の一部くらいは吹っ飛ばすかもしれないな」

何気なくとんでもないことを言うタマキに、キアンはため息をついた。

「わかった。どうしろと言ふんだ？」

「連中に連絡を取つて、邪魔な奴がいるからなんとかして欲しいとでも言えばいい。目的の物を見つけてもそいつに奪われそうだってな」

「危険だと思うがな」

「どんな結果でもあんたらにとって損はないだろ。そういうわけだ

から頼むよ」

「わかった、やってやるう。どうなっても知らんぞ」

「ああ、望むところだ」

そう言つてタマキは部屋から出て行つた。残されたキアンはすぐに人を呼んで宰相のレンツを部屋に呼ぶように手配した。

そして、タマキが自分の部屋に戻ってみると、ファスマイドが椅子に座つてくつろいでいた。

「まだいたのか」

「こういう部屋は嫌いじゃないからね。で、女王様のところに行つてたんだろ？ 結果はどうだったんだい？」

「俺が邪魔者つていうのをアピールするように頼んできた。結果はすぐにわかるだろ」

「それはまた、思い切つたことをするねえ。夜も安心して眠れなくなるんじゃないのかい？」

「それなら対策はある。ああ、お前は邪魔をするなよ」

「もちろん、僕は基本的にただの傍観者だからね」

ファスマイドは立ち上がると、にやりと笑つた。

「それじゃあお大事に」

そしていきなり姿を消した。タマキはそれを見てから、サモンに語りかける。

「あいつは魔族だと思つんだけど妙な奴だよな」

「そうだな。魔族としての力は大したことがないようだが、それ以外の部分で補つていようだ」

「それに、何を考えてるのかいまいちわからない」

「お前と似ているな」

「冗談言つなよ」

「いや、本質的には似ているだろう」

それには答えず、タマキはテーブルの上に手を置いて意識を集中させた。その手を中心として可視化できるほどの密度を持った魔力が集中し、それは一枚のカードの形を取つた。

「プロテクション、発動」

カードは消えることなく、それを中心として部屋を魔力の盾が覆った。

「これでなにか来たらすぐにわかるな」

タマキの言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、その盾がいきなり破られ、何者かがタマキに飛びかかってきた。タマキはそれを軽くかわして、侵入者をよく見た。

「なんだ。雑魚か」

侵入してきたのは、四足の見たことがない魔物らしき生物。それは間髪いれずに、鋭い爪でタマキに襲いかかる。

だが、タマキはその頭を簡単につかんだ。

「バースト、収縮版だ」

小さいが凝縮された爆発が起こり、魔物は粉微塵になって消えた。タマキは表情を変えずに自分の手を見る。

「さて、これで終わりってことはないよな」

タマキは楽しそうともとれる表情を浮かべた。

助っ人達と秘密兵器

「姉さん、ちょっと待って」

「なに？」

「兄さんがばててるから、もう少しゆっくり行っただろうがいいと思うんだけど」

「たくつ、しょうがない」

レザーアーマーを着込んで剣を腰から下げているミラはそう言つて、ローブを着て杖を持っている弟のソラのほうに振り返った。そして、そのさらに後ろには拾ったらしい木の棒を杖変わりにしている歩いている、眼鏡をかけた若い男がいた。

ミラはその男に近づくと、無理矢理顔を上げさせた。

「ジャドお兄さん。もうすこしで着くんだから、しっかり踏ん張ってくれないと」

「わかったわかった。もう少し頑張るよ」

ジャドと呼ばれた男はミラの手を振り払うと、顔を上げて歩き出した。

「そうそう、その調子で頑張つて」

ミラはジャドの背中を叩くと、また先頭に立って歩きだした。変わりにソラがジャドの隣に並ぶ。

「姉さんはタマキ師匠からの頼みだから気合が入ってるみたいだね」

「わかつてる。俺だって楽しみにしてるんだからな。それにしても、あの連絡手段は驚いたな」

「あれは変な鳥だったね。まあ、ただノーデルシア王国に来てくれてただけだし、師匠達に会えるとは限らないけど」

「たとえそうでも、ノーデルシア王国に行けるだけでも十分だ。お前達は王子と知り合いなんだろう？」

「もうすぐ王様になるって噂もきいたけどね」

「それならなおさら好都合じゃないか」

「じゃあ、兄さんもしつかり歩いてくれないと」

「そうだな」

ジャドは気合を入れなおして、なんとかミラの後を追いつめた。

そしてその日の夕方。三人はノーデルシア王国の国境にある町に到着していた。入国は明日にすることにして、三人はとりあえず宿をとることにした。

「ああ、疲れた」

ジャドは荷物を置いてベッドに倒れこんだ。ミラはその肩に笑顔で手を置き、ソファアのほうを指差した。

「兄さんはあっち。この部屋には二つしかベッドがないんだから、可愛い妹と弟にゆずるのは当然だと思うけど」

「勘弁してくれないか」

「はい駄目」

ミラはジャドの首根っこをつかんでベッドから引きずり落とすと、そのままソファアまで引きずっていった。

「じゃ、ごゆっくり」

ジャドをソファアに置いて、ミラは部屋から出て行った。それを見送ったジャドは大きなため息をついた。

「やっぱり俺は嫌われてるのかなあ」

「いや、あれが姉さんだから、別に特別に嫌われてるわけじゃないと思う」

「ああ、とにかくしばらく休ませてもらうよ」

ジャドはそのまま律儀にソファアで目を閉じた。

そして翌朝、三人は朝早くに宿を出て、ノーデルシア王国への入国を果たした。

同じ頃、ノーデルシア王国城内の訓練場では、エバンスと他数名が剣を持って立つバーンズを見守るようにして立っていた。

バーンズが持っている剣は、一見したところ無骨なシルエットの両手剣だったが、その刃の根元についている長方形のものが目を引

いた。

バーンズはエバンスを見てうなずいてから、その長方形のものを前をつかみ、前に押し出し、盾に回転させた。それはスムーズに前方にスライドして縦方向になり、それがスロット状になっているのが見えた。

バーンズは腰のホルダーから金属製らしい、炎が描かれたカードのようなものを取り出してそのスロットにそれを挿しこみ、それを元の位置に戻した。

「ファイアソード、発動します」

ギャラリーに宣言するようにそう言うと、柄に力を込めて、剣を構えた。すると、ホルダーの部分から炎が発生し、剣を包み込んだ。その剣が鋭く振るわれると、炎が飛び壁を焼いた。バーンズは剣を下に向けると、ホルダーからカードを抜いた。

「すごいものだな」

エバンスがそれに近づき、剣を見ながらつぶやいた。

「はい、まるでカレン殿が使う魔法剣です。このようなものを作ってしまうとは、さすがタマキ様です」

「そうだな。あいつはまさに天才だ」

バーンズはその言葉にうなずいて、ホルダーから八枚のカードを取り出した。

「これを使いこなせばどんな敵とも戦える気がします」

「しかも、これはタマキが作ったインスタントスペルカードか、あれと違って使い捨てではなく、魔力を充填すれば何度でも使えるのだな。これを量産できれば、魔族も恐れるような敵ではなくなるかもしれない」

「おっしゃる通りです。しかし、こんな貴重なものを私が使ってもいいのでしょうか」

「タマキがお前を指定して送ってきたんだぞ、余計なことは考えずに、それを使いこなすことに集中しろ。おそらく近いうちに必要になるはずだ」

「はい」

バーンズの返事を聞いてから、エバンスはその場を立ち去り、執務室に向かった。室内に入ると椅子に座り、しばらくの間天井を見上げてから、仕事を始めた。

集結

エバンスの前にはミラ、ソラ、ジャドの三人が並んでいた。

「久しぶりだな、お前達」

その声をかけられると、ミラが一步前に出た。

「お久しぶりです。で、そっちにいるのが不肖の兄のジャドです」

エバンスはそれを聞くと笑顔を浮かべてジャドのほうを見た。

「ようこそノーデルシア王国へ」

「はい。エバンス様に謁見できるとはこのうえない喜びです」

それにうなずいてから、エバンスはミラとソラに視線を移した。

「それで、タマキからの連絡で来たということだが、わけは聞いているのか？」

「それが、理由は何も教えてもらってないんです」

今度はソラが答え、それを聞いたエバンスは自分のあごを一撫でした。

「そうか。だが、こちらにもタマキから送られてきたものがある。

間違いなく何かが起こるはずだ」

「師匠から送られてきたものって、なんですか？」

「見てみるのが一番早いな。ついて来い」

ミラにそう答えると、エバンスは先頭に立って部屋を出て訓練場に向かった。

一行が到着すると、そこには盾を並べて構える三人の兵士達と、それと対峙して剣を構えるバーンズがいた。

「いつでもどうぞ！」

兵士が声を張り上げると、バーンズはうなずいてから、剣のスロットに一枚のカードを入れた。剣は一見したところ何も変わったところはなかったが、それが振るわれ盾に当たると同時に、爆発が起こり兵士達を吹き飛ばした。

バーンズはすぐにスロットからカードを抜いて、倒れた兵士達に

駆け寄った。

「大丈夫か、お前達」

「は、はい。なんとか無事です」

「加減したつもりだったんだがな」

手を伸ばして兵士達を起こしたバーンズはエバンス達が来ているのに気がついた。

「これはエバンス様。それにミラとソラも久しぶりだな。それから、そちらは？」

「不肖の兄で、ジャドっています」

ジャドが何か言う前に、ミラがそう告げた。バーンズはうなずいてから剣を左手に持ちかえて右手を差し出した。

「バーンズだ。よろしく」

ジャドはそれを握り返して軽く頭を下げた。

「弟と妹がお世話になったのは聞いています。ありがとうございます。しました」

「はいはい。挨拶はそれくらいにして」

そこでミラが二人の間に割って入った。

「それよりその剣すごいですね。一体どういうものなんです？」

「これはタマキ様から送られてきたものだ」

それからバーンズは剣をミラに渡す。受け取ったミラは軽く振ってみたりして、やはりスロットが気になるようだった。

「これは一体？」

そう聞かれて、バーンズはさっき抜き取ったカードをミラに見せた。そこには爆発するような絵が描かれている。

「これは、インスタントスペルカードですか？」

ソラが聞くと、バーンズは首を横に振った。

「いや、この剣専用だが、魔力さえ充填すれば何度でも使える」

「すごいですね。それを使えばさっきみたいなことができるんですか」

バーンズは黙ってうなずいた。

「ある意味私の剣よりもすごいですね」

感心した様子のミラに、エバンスは何か思いついたらしかった。

「バーンズと立ち合ってみたらどうだ」

「私がですか？」

「いや、お前達二人でだ」

エバンスにそう言われてミラとソラは顔を見合わせたが、すぐに気を取り直してバーンズと向かい合った。

「わかりました。手加減はしないでいきますよ」

「本当にいいんですか？」

ミラはやる気満々で、ソラはまだ戸惑いがあるようだった。それはバーンズも同じで、エバンスのほうに顔を向けた。

「二人がどれだけ強くなったのか見てみたいしな。それに、この二人相手なら、その剣の力を存分に引き出せるだろう」

少しの間をおいてから、バーンズは力強くうなずいた。

「わかりました」

それからエバンスとジャド、兵士達は後ろに下がり、バーンズとミラ、ソラの二人は武器を構えて向かい合った。

バーンズが一枚のカードを剣のスロットに入れると、氷が剣を包み込み、冷たい輝きを放った。それに呼応するようにミラも剣を抜くと、その剣は強い輝きを発する。

そして、力強く踏み込むと、一気にバーンズとの間合いを詰めた。それに向かってバーンズが剣を振ると、それをまとっていた氷が刃となつて突っ込んでくるミラに襲いかかった。

だが、それはソラが放った風によって逸らされ、訓練場の壁を直撃するだけだった。そこでミラはバーンズに向かって剣を振り下ろす。

バーンズはそれを後ろにステップしてかわすと、もう一度凍りの刃を飛ばし、ミラを下がらせる。そうしてできた隙に、バーンズはすばやくカードを入れかえた。すると、今度は剣が雷をまとった。

そこに風に炎を乗せたソラの攻撃が向かったが、バーンズが剣を

振ると雷と干渉して炎は四散した。さらにミラが跳び上がって上から剣を振り下ろしたが、それは剣で受け止められ、バーンズが柄に力を込めると、剣から発した雷でミラの体は吹き飛ばされた。

そのまま、バーンズは剣にまとわせた雷をソラに向かって放ち牽制をする。そして、二人が体勢を崩している間に、再びカードを入れかえようとした。

「そこまでだ！」

エバンスの声が響き、三人は動きを止めて、力を抜いた。

「バーンズさんの腕にその剣の力が加わるとかなりのものですね。

僕の攻撃まで相殺されるとは思いませんでした」

「私も、まさか剣に触れるだけで吹っ飛ばされるとは思いませんでした」

「それだけこの剣が強力だということだな」

「カードを変える瞬間は隙ができるが、それもその剣ならカバーできる。問題は見当たらないな」

バーンズの言葉をエバンスが引き継いだ。バーンズはそれにうなずく。

「はい。この二人とこれだけ戦えるなら、実戦でも何の問題もありません」

「そうだな。これならタマキが何を予想していたのかはわからないが、十分に対応できるだろう」

そう言ってからエバンスはその場にいる全員を見回した。

「今日はここまでにして休んでくれ」

考えられていた事態

与えられた部屋でミラはベッドに座って剣の手入れをしながら、さっきの戦いを思い出していた。バーンズは元々強いのだが、あの剣を使われると、一人では勝てる気がしない。しかも、まさかあの剣の力だけで吹き飛ばされるとは思わなかった。

「おい。俺だ」

ジャドの声がしてドアがノックされた。ミラは剣を鞘におさめてからそれを持ったままドアを開ける。

「何？」

「ちよつと話があるんだよ」

「はいはい。どうぞ」

ジャドは無事に室内に迎え入れられ、椅子に座った。ミラはもう一度ベッドに座って、ジャドの話を聞く態勢になった。

「さっきの剣はとんでもなかったな」

「まあね。あんなにすごいとは思わなかった」

「で、俺のアイデアならあれくらいの力を出せると思うか？」

「まあ、あそこまで万能じゃないけど、いけるんじゃないの」

「じゃあ、やる気になったのか」

「本腰を入れてやってもいいかもね。でも、あの訓練場とかじゃ危なくて試せないけど」

「そういうことなら、早速明日から始めるぞ。俺はソラのほうにも言ってくる」

ジャドは部屋から出て行った。ミラはそれを見送ってから、剣をつけてバーンズのところに向かった。

バーンズは兵舎の自分の部屋で剣の手入れをしているところだった。ミラがノックをして声をかけると自分でドアを開けてミラを迎え入れた。

「どうした？」

「その剣についてもっと知りたいと思ったんですけど。まだ使っていないカードとか」

「ああ、それならこれで全部だ」

八枚のカードが机の上に並べられた。そしてバーンズはカードを四枚ずつにわけて、まずは左側のほうを指差した。

「この四枚は順番にファイアソード、アイスソード、サンダーソード、バーストソードと名づけられている。基本とも言えるカードで、これはそれなりの時間、複数回使える」

「でも、どれも威力はありますよね」

「ああ、そうだ。そしてこっちの三枚は威力はあるが、一度に一回しか使えない。順に、ライトニングスラッシュ、メテオスマッシュ、トルネードスラッシュ。タマキ様が使う伝説級の魔法がベースになっているな」

「じゃあ、後の残りの一枚はなんですか」

「ファントムクラッシャー、そういう名前がつけられている。対悪魔、魔族用ということらしい」

「はー、すごい多彩さですね。私も負けてられません」

「そう言うということは、何か新しい技でもあるのか？」

「まあ、まだ完璧じゃないんですけどね」

ミラがそう言うて首をかしげると同時に、ドアがノックされ、一人の兵士が入ってきた。

「バーンズ様、ご報告が」

兵士はミラを見ると少し戸惑ったような表情を浮かべた。

「かまわん。続けてくれ」

「は！ 巡回から不審な者を発見したという報せがありました」

「どういうことだ？」

「それが、村人からの通報で巡回の者が駆けつけて、その者を拘束したそうなのですが、その駐屯所からの連絡が途絶えてしまったのです」

「そうか。その場所は」

バーンズは兵士の答えにうなずきながら、このことに関して嫌な予感を感じた。

「では、私が行こう。ミラ、ソラを呼んできて一緒に来てくれ」

ミラがうなずいたのを確認してから、バーンズは兵士に向き直った。

「各駐屯所を守りを固めるように連絡を頼む。怪しいものが現れてもこちらからはしけないようにするんだ」

「はい！ しかし、バーンズ様は？」

「心配するな、この剣の力を使うには少人数のほうが都合がいい」
「了解しました！」

兵士が出て行ったのを見送り、バーンズは立ち上がった。

「城門で待っている」

「はい。すぐに行きます」

数分後、装備を整えたミラ、ソラ、それにジャドもバーンズの待つ城門に集まっていた。

「よし、ではすぐに連絡が途絶えたという駐屯所に向かう」

バーンズはそれから馬を四頭用意させ、一行は急いで例の駐屯所に向かう。現地に到着してみると、不自然な沈黙がその場を支配していた。

「何かおかしい。用心しろ」

バーンズはそう言ってから馬から降り、背中の剣を抜いた。ミラも同じように剣を抜き、ソラは杖を構える。ジャドは腰に下げた袋から何かを取り出して、その手に握った。

不気味な静けさの中、四人がゆっくりと駐屯所の建物に近づいていると、その中から二つの影が出てこようとした。

「何者だ！」

バーンズの大音声が響いたが、その影は何の応答もせず ゆっくりと姿を現した。それはタマキやカレンは何度か遭遇している、フールドツきのローブをまとった者達だった。それが同時にバーンズ一行に突っ込んできた。

「風よ！」

ソラが風の精霊の力でそれを止めると、その両者は後ろに飛び退いた。

「もう一度聞こう。何者だ」

今度は大声ではなく、低く良く通る声でバーンズが告げるがロボの連中はそれに従う様子はない。それを見て、バーンズは剣のスロットにカードを入れた。

「これがタマキ様の懸念していたことなのか」

そうつぶやいて、スロットを元の位置に戻し、カードを発動させた。

新しい力

「バーンズさんはそっちをお願いします！ 僕達はこっちを相手にしますから！」

「わかった、頼んだぞ」

バーンズ、ミラとソラに分かれてローブの者と対峙した。ジャドは後ろに下がってミラとソラを見守るような位置に立った。

まず、バーンズが踏み込んで剣を正面から打ち下ろすが、ローブの者はそれを後ろにステップしてかわす。同じようにミラも切り込むが、それも同様にかわされる。

そして、二人のローブの者は宝石のようなものを同時に取り出した。

「オメガ様、力を」

フードの奥の目が怪しい鈍い光を放った。一気にその二者の存在感というべきものが増し、それと対峙するバーンズ達は緊張を強めた。

数秒後、その二者は地面を蹴ってバーンズとミラに突進した。二人はそれをかわさずに剣で受け止めた。バーンズは一步下がったくらいだったが、ミラは四歩ほど押された。

だが、バーンズはそこでカードの力、バーストを発動させてローブの者を吹き飛ばした。そしてカードを素早く入れかえる。

剣が雷をまとい、横殴りに振るわれる。雷が飛び、ローブの者に直撃するが、それはフードとローブの一部を消し飛ばしただけだった。

そこにあっただのは、白く濁った目をした若い男の無表情な顔だった。バーンズはその意志のない表情に危険なものを感じた。

それ以上考える暇はなく、男は再び突進してきた。バーンズはそれを横にかわしながら、男の胸を剣で薙ぎ払う。男の胸は大きく切り裂かれたが、男が体勢を立て直すと、それはすぐに再生してしま

った。

「化物か」

バーンズはつぶやきながらスロットのカードを入れかえ、剣に炎をまとわせた。

その後方では、バーンズの戦いとミラとソラが攻撃をしのいでいるのをジャドが冷静に見ていた。敵は明らかに魔族や悪魔に属するような力を使っている。そして、さっき言ったオメガ様という言葉。ジャドは自分の記憶の中にそういう名前の悪魔がいるかどうかを必死に考えた。

「オメガ、そうか！ 確かオメガデーモンとかいうのがいたはずだ」
名前は思い当たったが、その悪魔がどんなものなのかはジャドの記憶の中にはなかった。しかし、悪魔の力を使っているというのは間違いない。

「みんな！ そいつらはおそらく悪魔の手先で、その力の一部を与えられているぞ！」

それを聞いたバーンズは、対悪魔、魔族用というファントムクラッシュのカードを思い浮かべたが、今の段階で使うのはまだ早いと判断した。

そして、ミラは瞬時にジャドのアイデアというものを実行するのを決心した。

「兄さん！ ちょっとの間でいいからこいつを引きつけておいて！」
「わかった！」

ジャドは勢いよく返事をして、ミラの前に出ると、手に持っていた小さな石のような物をロープの者に向かって投げつけた。それは爆発して煙を噴出し、視界を遮る。

「ソラ！ 私の剣に精霊の力を！」

「わかった！ 火の精霊よ！」

ソラが剣に向けて手をかざすと、ミラの剣の刀身を炎が包み込んだ。そこでミラが剣を握る手に力を込めると、その炎が柄の方に移動していき、剣を通じてミラの体に流れ込んでいくように見えた。

「くっ！」

その流れ込んでくる力に、ミラは顔を歪めた。ソラは思わず手を引こうとする。

「いいから続けて！」

ミラの怒鳴り声で、ソラは引こうとした手を止め、再び剣に精霊の力を注ぎ込むことに集中する。その前方では、ジャドは短剣と最初に投げた石でなんとかしのいでいるが、明らかに追い詰められていた。

ミラはそれを見てさらに剣を強く握った。

「おおおおおおおお！」

炎の熱気よりもさらに激しい咆哮が響くと同時に、剣を包み込んでいた炎が一気に剣を伝ってミラの体に吸い込まれた。後に残ったのは白く強く輝く剣と、それまでとは明らかに違う、全身に何かの力を漲らせたミラの姿だった。

そして、ジャドを追い詰めようとしているローブの者に向かって、一気に跳んだ。その勢いはまるで放たれた矢のようで、そのまま激突し、ローブの者を大きく吹き飛ばした。

ミラは自分の勢いをまだうまく制御できないようで、体勢を崩しながらもなんとか膝を地面について、勢いを止めた。ジャドはそれを見て、思わず手を叩いた。

「うまくいったな！」

「下がって！」

だが、ミラは振り返ることなく叫んで、起き上がったローブの者に近づいていく。ローブの者は勢いをつけてミラに拳を叩き込もうとしたが、それはあっさりと受け止められ、拳が焼けるような音が出た。

そこにミラの剣が袈裟切りに振り下ろされ、ローブごとその体が斜めに切り裂かれた。ミラはそこから拳をつかんでいた手を放すと、今度は両手で剣を持ち、そのローブの中心に鋭い突きを繰り返した。剣は深々とローブの者の胸を貫き、フードが取れたが、その下の

若い女はにやりと笑った。だが、ミラはそれに怯まない。

「火の精霊の力よ！」

声と同時に剣から炎が噴き出し、女の体を凄まじい勢いでおおった。女は言葉は発しなかったが、もがいて体に刺さった剣から無理矢理体を引きはがした。

「風よ！ 切り裂け！」

そこにソラの放った風の刃が襲いかかり、さらにその体を切りきざんだ。すると、その動きは止まり、あっさりとその場に崩れ落ちた。

それを確認したミラは、その場で崩れ落ちそうになったが、なんとか剣で自分の体を支えて、バーンズのほうに視線を移した。

バーンズは氷の刃を飛ばして男を足止めして、カードを入れかえたところだった。そして剣をかかげると、まるでその剣から雷が天に昇るように見えた。

それでも男はバーンズに突っ込む。

「ライティングスラッシュ！」

気合と共に雷の剣が振り下ろされ、男を直撃した。その一撃で雷は四散したが、男は倒れ、その体からは煙が立ち昇っている。バーンズはそれに近づきながらカードを入れかえた。

立ち上がるうとする男の目の前で剣を振り上げると、それが光の粒をまとい始めた。

「ファントム、クラッシュ！」

静かな声でそう言っ、剣を振り下ろした。真っ向から切られた男は、目を見開き、切られた場所を中心として光の粒に変わっていた。

千客万来

タマキのいる部屋は窓は割れ、室内も荒れ放題になっていた。椅子に座ってそれを見回しながら、タマキはサモンと会話をしていた。「しかし、まさかここまで圧力が効果覲面だとは思わなかったな」「別に防ぐことはできるだろう」

「そりゃあな。でも、寝るとき以外は自由に来てもらったほうが、ひょっとして何か収穫があるかもしれないだろ」

「そうは思えんな」

「まあ、もうしばらく様子を見てもいいだろ」

そこで、いきなり室内に何かが飛び込んできた。タマキは椅子に座ったまま、とりあえずそれを蹴り飛ばした。今回はいつもの魔物ではなく、人間だった。しかも、ローブをまとった者ではなく、チエインメイルを着込んで剣を持ち、目を白く濁らせた剣士風の男だった。

「初めての人間か。やっとあちらさんも少しは本気を出してきたってことかな」

「手近な人間を使っただけかも知れんぞ」

「かもしれないな。まあ聞いてみればわかるだろ」

タマキは立ち上がるうとしている剣士に近づく。一見無防備なタマキに、剣士は膝をついた体勢のまま剣を突き出すが、それはタマキにあっさりつかまれた。

「どうも気合の入ってない奴が多いな」

そこでもう一度剣士を蹴ると、剣士の体は転がって壁にぶつかった。タマキは右腕の腕輪を撫でながらそれに向かって歩く。

「せっかくだから、こいつを試させてもらおうぞ」

腕輪から魔力が放出され、それがタマキの右手を覆う。その手でタマキは剣士の頭をつかんだ。剣士はそれを切りつけようとするのが、剣は再び手で止められる。そして、頭をつかんだタマキの手に

力が込められた。

剣士の頭を魔力が覆い、その直後にそれが腕輪に吸い込まれた。すると、剣士の目の濁りが消え、糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

タマキは倒れた剣士を足で突っついて動かないのを確認してから、腕輪を見つめた。

「うまくいったな。あとはこいつが正気に戻ったりするといいんだけど」

「前の奴のように、元々おかしいのかもしれないぞ」

「それなら、あの暑苦しくて怪しいローブを着てるんじゃないか」

そう言うってから、タマキは剣士の体を抱えて、ベッドに転がした。そして椅子をベッドの横に持つてくると、それに座って男が目を覚ますのを待つことにした。

数十分後、剣士はうめくと目を開けて、タマキの顔をぼんやりと見つめた。

「ここは？ 私は何を？」

「念のために言っておくと、ここはロベイル王国の王宮だ。あんたはここに乱入してきて、俺に取り押さえられたんだよ」

剣士はタマキの言うことがいまいち理解できないようで、体を起こしてから周囲を見回した。その目に映るのは荒れ果てた部屋で、とても王宮の一室には見えない。

「信じられないって顔だけど、本当だぞ。なんなら女王を呼んでやつてもいい」

タマキが真顔でそんなことを言うので、剣士はそれを信じようという気になっただけだった。

「しかし、なぜ私がこんなところに来たというんだ」

「悪魔にでも魅入られたんだろ。なにか覚えてないのか」

「いや、それが、おかしいローブの男に声をかけられたと思ったら、ここにいたんだ」

「ああ、そうか」

タマキはがっかりしたような表情を浮かべて立ち上がった。

「そういうことなら仕方がない。外まで送ってやるから、帰って寝てくれ」

そういうわけでタマキは剣士を王宮の外に送ってから、部屋に戻った。すると、部屋の中ではキアンが椅子に座って待っていた。

「女王様が何の用だい？」

タマキがそう言うと、キアンはそれには答えずに室内を見回してあきれたようにため息をついた。

「ここは最高の部屋のはずなんだが、この短い期間でひどい荒れかただな」

「最近はお客が多いからな」

タマキはそう答えてからベッドに座った。

「で、女王様が直々に何の用ですかね」

「お前が今どんな状況か知りたくてな。まあ、この部屋の状況を見れば大体わかるが」

「確かに、客はたくさん来るけどな。でも、王宮に魔物みたいなのが沢山入ってくるのはかなり問題があるだろ。しっかり防ぐべきじゃないか」

「そんなことができるのなら、そもそも問題は何も起こらなかっただろうな」

そこでキアンはため息をついたが、タマキは別にそれを気にする様子はない。

「だからって、もっと大きな問題を抱えなくてもいいだろ。わかりやすくて年季の入ったことで悩んだほうがいいんじゃないか？」

「わかりやすいことか。確かにそれは一理あるがな」

「そう思うなら、今から俺に全面的に協力してくれてもかまわないけど」

「お前ほどの力を持っていて、そんなものが必要なのか？」

「俺だけの力じゃ、戦うことなんてできないさ」

「そうか」

キアンはうなずくと、立ち上がった。そしてタマキの顔をじっと見てから、出て行った。

開放

キアンは以前も執務室に訪ねてきていたローブの者と向かい合っていた。

「陛下、この王宮に住み着いた男のことですが」

「なんだ」

「陛下はあの男をいつまで放置しておくつもりなのでしょうか」

「我々ではどうにもできん。あの男のことだけならお前達の好きなように行動してもかまわんから、そっちでなんとかしろ」

「わかりました。そういうことでしたら我々で対処させていただきます」

ローブの者は執務室から出て行った。キアンはそれからこめかみに手を当てて息を吐き出した。

一方、タマキの部屋にはファスマイドが来ていた。

「そろそろあっちの奴らも本気になるんじゃないかな」

「そうだと手間が省けていいな」

「余裕だね」

「何があるのかわからない以上、心配したりしたってしょうがないだろ」

「それはそうだね」

ファスマイドは軽く笑ってから、ふいに何かを感じたようで外に視線を向けた。

「どうやら、大物が来たみたいだよ」

「大物か。どの程度だ」

「まあ、今まで出てきたものなんか、比べ物にならないんじゃないかな」

「そうか。俺にはまだ何も感じられないんだけど、どっちだ？」

タマキが聞くと、ファスマイドは窓のほうを指差した。

「あっちのほうの町の入り口に行けばわかるよ。たぶん、向こうは

君の事を知ってるだろうから、嫌でも会えるんじゃないかな」

「それなら、さっさと行ったほうがよさそうだな」

タマキは割れた窓から外に飛びたった。ファスマイドはそれを追って、同じように窓から外に出て行った。

町外れに降り立ったタマキは、周囲を見回したが、今のところ特に変わった様子はなかった。だが、すぐに一人の帽子をかぶった男が歩いてきた。

その男はタマキから数十歩離れた場所で止まり、帽子を取った。

中身は若い男で、見た目は特に変わった様子は無い。それでも、その男が只者でないのはタマキにはよくわかった。

「はじめまして、と言えばいいんだろうか。ノーデルシアの勇者よ」

「それでいいんじゃないか。で、お前は何だ？」

男は帽子をタマキに向かって放り投げた。

「私はアーブレリオナという魔族だ。この町に手を出されなくなったら、相手をしてもらいたい」

「それはわかったけど、ここに來た理由を聞かせてもらいたいな」

「契約主に頼まれたとだけ言っておく」

「それはオメガってやつか？」

その返事に一発の雷の矢が放たれた。

「プロテクション！」

タマキの前方に魔法の盾が展開され、雷の矢は消失する。そこにアーブレリオナが突進してきたが、タマキはそれを飛び越えた。場所を入れ替えて、再び二人は向かい合う。

タマキは大きく後ろに跳ぼうとしたが、アーブレリオナはそれを追わずに、手を後ろに向けた。

「町を攻撃されたくないなら、戦うのはここからだ」

「なるほど、そいつは困ったな」

タマキは地面に降りてから、アーブレリオナに向かって歩き出した。

「いくぞ、サモン」

タマキがマントに触れると、それが闇に染まった。そして一気に加速すると、アーブレリオナに向かってそのまま膝蹴りを食らわせようとした。

だが、それはかわされタマキは勢いあまって止まれずに地面を削る。そこに三発の雷の矢が飛来したが、タマキは振り向きながらひるがえしたマントでそれを薙いで消した。

「アイスバイト！」

続けてすぐに氷の牙を二発放ったが、それはアーブレリオナの腕の一振りで砕かれた。

「こいつはどうだ？ 五倍！ ライトニングボルト！」

それも受けられたが、その隙にタマキは距離を詰めてアーブレリオナの右腕をつかんだ。そのまま強引に引きずり込んで、その頭に頭突きを叩き込んだ。

アーブレリオナは大きくのけぞったが、タマキは腕を放さず、今度は右肘を顔面に打ち込んだ。そして次の瞬間には左手をアーブレリオナの胸元に突きつけていた。

「十倍！ バースト！」

巨大な爆発が発生し、アーブレリオナの体は勢いよく吹っ飛んでいった。

「二十倍！ ライトニング！」

そこにさらに大きな雷を落とした。地面に倒れたアーブレリオナの体からは煙が立ち昇ったが、数秒後、何事もなかったかのようにそれは立ち上がった。

「おいおい、あんまり効いてないのか」

「いいや、かなり効いた」

アーブレリオナはそう言うってから、一歩右足を踏み出した。

「やはりこの力を使う必要があるようだ」

その言葉と同時に、アーブレリオナの雰囲気がいきなり変わった。

「あれもオメガって奴の力か」

「そうだろうな」

「それなら、こつちも少しは本気にならないとまずいか」

タマキは右足を一步後ろに下げて、姿勢を低くした。

「サモン、少しだけ力を解放するぞ」

「わかった」

そこにアーブレリオナが今までのものよりも数倍大きな雷の矢が数十発は放たれた。タマキはそれをかわすこともせずに、そのまま受ける。そこにアーブレリオナが突っ込み、手を突き出して何かをしようとした。

だが、タマキはすでに上空に跳び上がっていた。そしてマントを取ると、それはタマキの右腕に巻きつき、まるで巨大なドリルのような形状になった。

「はあああああああ！」

そのままそれを突き出してアーブレリオナに突っ込んでいった。ドリルはアーブレリオナの体を貫き、その体を地面に縫い付けた。

「これで終わりだ！」

タマキが力を込めるとドリルを中心に闇が広がって、アーブレリオナの体を包み込んだ。そして数秒後、それはドリルごと闇をまとったマントに戻り、その中にいたはずのアーブレリオナの体は跡形も無く消えていた。

揺さぶり

「なぜあの魔族を殺さなかった？」

「面倒臭いからな。それに、あんなのを完璧に倒そうと思ったら、まわりにも被害が出るし」

「そうか」

サモンはそれっきり黙った。その変わりという感じで、ファスマイドが近づいてきた。

「さすが、見事な戦いだったね」

その賛辞は無視して、タマキはあれだけ派手にやったにもかかわらず、まるで何事もなかったかのような町の様子を見る。

「お前が結界を張ってたのか？」

「そうだよ。僕は自分が楽しめればそれでいいし、君は周囲に被害を出したくないだろ？ まあ、サービスだと思ってくれていいよ。ところで、本当にあの子とはここで決着をつけとなくてよかったのかい？」

「遠くに飛ばしておいたし、怪我もしてるだろうから、しばらくはおとなしくしてるだろ。俺っていうのはつきりした目標もあるんだから、そこらへんで暴れるようなこともないだろうしな」

「なるほどね。そういうことなら、僕から言うことは特になさそうだ」

その後は大した会話はせず、タマキとファスマイドは王宮に戻った。ファスマイドはどこかに消えたが、タマキは自室には戻らずにキアンの執務室に向かった。

だが、そこに到着する前に廊下の向こうからフード付きのローブを着た者が歩いてきていた。互いに相手のことを見ずに近づいていたが、すれ違いざまにタマキはいきなりそのローブの肩に手を置いた。

「お前ら、ここで暴れたりしないよな」

「まだこの国には利用価値がある。だが、貴様は邪魔だ」

「一ついいことを教えておいてやるけど、狙うなら俺だけにしておいたほうがいいぞ。何かあったら、後先考えずに、お前らを潰したくなるかもしれないからな」

「やれるものならやってみるがいい。ノーデルシア王国にも、すでに我々の手は伸びている」

フードの奥の顔が笑っているような雰囲気があった。だが、タマキはただ笑った。

「お前らにカレンや俺の仲間達がどうにかできるわけがないだろ。まあ、それ以外には手をだすなよ」

一つ肩を強く叩いてから、タマキはさっさとその場を去っていった。

その頃、カレンと恵美は荷馬車に乗ってノーデルシア王国を目前にしていた。旅慣れてきたのと、隊商と一緒に負担が少なくなったので、恵美はそれなりに元気がある様子だった。

「カレンさん、あとどれくらいで着くんですか？」

「順調にいけばあと三日くらいで到着できると思います」

「順調にですか」

恵美はため息をついた。カレンはその様子を

「確かに、最近は魔物の襲撃が妙に多いですね」

「でも、あんたがいれば大丈夫だろ？」

アヤがカレンの隣に飛び乗ってきて、その肩に手をまわした。

「もちろん、できる限りのことはします。何も起こらないほうがいいとは思いますが」

「そりやそうだね。でもまあ、もうすぐお別れかと思うと寂しいねえ。あたし達の仲間になって一緒に来てもらいたいくらいだよ」

カレンは肩を組まれたまま、アヤに笑顔を向けた。

「ありがたいお誘いですが、私にはやるべきことと、いるべき場所がありますから」

「わかってるよ。まったく、あんたみたいないい女にそこまで言わせる奴に会ってみたいもんだ」

アヤはカレンから手を放すと、荷馬車から飛び降りた。

「今日は早めに休む予定だから、もう少しペースをあげていくよ」

「はい。わかりました」

隊商は早めのペースで進み、まだ明るいうちにキャンプの設営を始めた。その準備中、カレンは何かに気がついたようで、手を止めて立ち上がった。恵美はそのカレンの様子に気がついた。

「どうしたんですか？」

「妙な気配を感じたので、確認してきます。この場を離れないでください」

カレンがこう言う時は、必ず何かが起こる。恵美は手を止めてうなずいた。

「わかりました。気をつけてくださいね」

「はい。すぐに戻ってきます」

カレンはキャンプから離れ、しばらくの間歩いた。キャンプの方には特に嫌な気配はないので、陽動ということはありそうにない。なので、カレンは手早く確認を済ませようと、意識を集中させた。

しかし、それは前方から飛来した物に遮られた。カレンはその何かをわずかな移動でかわし、剣に手をかけた。

数十秒後、その視線の先に一人の一見したところ何の変哲もない女が姿を現した。だが、その雰囲気は明らかに普通とは違うというのが、カレンにはわかった。

「さっきのをかわすとは、なかなかやりますねえ」

口を開くと、見た目よりもずっと低い声が響いた。

「あなたは」

カレンが聞くと、女は腰に手を当てて何回か軽く体をひねる。

「私はフィルガロエ。あんた、じゃなくて、あんたと一緒に娘に用があつてね」

「つまり、追手ですか」

「おつと、ここでやる気はないんだよ。今日はほんの挨拶さ。本番はあんたらが目的地に着いてからだ」

カレンは剣から手を放した。

「大した自信ですね」

「面倒なものはまとめて片付けたいんでねえ」

そう言ってからフィルガロ工は後ろに飛び、あつという間に遠ざかっていった。カレンはそれ以外に何も脅威となるものが存在しないのを確認してから、キャンプに戻った。

恵美は戻ってきたカレンの姿を見ると、ほっとしたような表情を浮かべて、それを迎えた。

「何もなかったんですか？」

「はい。とりあえずは大したことはありませんでした」

到着

「それじゃ、短い間だったけど世話になったね」

アヤはカレンに向かって手を差し出した。カレンはそれを握り返して、微笑を浮かべた。

「お世話になったのは私達のほうです。ありがとうございました」

次は恵美がアヤと握手をして頭を下げる。

「よくしてもらって、ありがとうございました」

「いいっていいって、あたしも娘がいたらこんな風かなと思って、楽しかったよ」

それからアヤと別れ、カレンと恵美はノーデルシア王国の首都に足を踏み入れた。カレンはまっすぐ城に向かい、守衛に何かを渡すと、しばらくしてあっさり城内に通された。

あんまりスムーズなので、恵美は少々不安になってきた。だが、カレンはそれにかまわず、すれ違う人間に軽く挨拶しながら、どんどん先に進んだ。

そして、護衛が立っている部屋の前まで来ると、やはり一声かけただけで、その中に入ってしまった。室内には書類を前にして仕事をしている、明らかに只者ではない男がいた。

「エバンス様、ただいま戻りました」

エバンスはカレンとその後ろの恵美の姿を認めると、軽く息を吐いた。

「タマキが一緒ではないということは、ただ帰ってきたということではないのだな」

「はい。こちらはエミ様という方で、タマキさんやヨウコ様と同じ世界から、こちらに来ました」

エバンスはそれを聞いて数秒間黙ったが、すぐに軽くうなずいて立ち上がると、エミに笑顔を向けた。

「ようこそ、我がノーデルシア王国へ。我々は君を歓迎する」

「は、はい」

恵美は慌てて頭を下げた。エバンスはそれからカレンに向き直る。
「ヨウコのところで待っていてくれ。話はあとで聞かせてもらう。」

ああ、それから、ミラやソラ達も来ているから、顔を見せてやるといい」

「はい」

カレンと恵美はエバンスの執務室から退室して、ヨウコの部屋に向かった。

「カレンさん、ヨウコさんでどんな人なんですか？」

「気さくな方です。会えばわかりますよ」

「そうなんですか」

とりあえず恵美は深くは考えずに、カレンについてった。そして、いかにも豪華そうで、重装備の兵士が護衛している部屋の前に到着した。

二人が室内に入ると、中には数人の侍女と髪の長い、お腹が大きくなっている女性がいた。その女性はカレンの姿を見ると立ち上がってゆつくりと近づいてきた。

「カレン、久しぶり。そっちの娘は？」

「簡潔に言いますと、ヨウコ様と同じ世界から来た、シオハタエミ様です」

「そう」

ヨウコはそれだけ言つと、恵美に近づいてその手を取った。

「大変だったでしょ。事情はわからないけど、ここなら安心していいからね」

「は、はい」

それから、三人はそれぞれ椅子に座つて、侍女達は退室した。

「それじゃ改めて、私は宮崎葉子。今は王妃なんていう立場だけど元々はあなたと同じで、向こうで普通に生活してたのよ。まあ私はただの会社員だったんだけどね」

「そうなんですか。それで、葉子さんはなんでここに来たんですか

？」

「私はこの国がピンチだっていうんで、呼ばれたの。それであの、エバンスと出会って戦うことにしたんだけど、負けちゃってね」

「負けたって、どういうことなんですか？」

「言葉の通りよ。その後は操り人形みたいにされちゃって、私は敵だったの。でも、それをタマキ君が救ってくれた。それから私は何もしてないのよ、タマキ君とカレンが先頭に立って戦ったから」

恵美は黙り込んだ。自分がこの世界に呼ばれたのは何のためなのかわからなかった。

「エミ様。あなたが召喚された理由や、帰る方法は我々が見つけ出します」

うつむき気味になった恵美にカレンがそう声をかけた。

「それに、召喚された理由くらいならば、すでにタマキさんが見つけ出しているかもしれません」

「そうよ、タマキ君なら必ずあなたの力になってくれるし、私達だって協力するから」

「あ、ありがとうございます」

恵美は頭を下げつつも、さっきからヨウコのお腹が気になっていようだった。ヨウコはそれに気がついて笑顔になった。

「この子はもうすぐ生まれるのよ。だから私はあまり力になれないと思うけど、何かあったらちゃんと相談してね」

「はい」

恵美が返事をする、カレンが立ち上がった。

「エミ様。部屋の準備もしないといけませんし、他に紹介したい相手もいますので」

「そうね、落ち着いたらまたゆっくりお話をしましょう」

ヨウコの部屋を出た二人はそれから城内の訓練場に向かった。ここでは、兵士や魔法使いっぽい者達が集まって、何かを見ているようだった。

カレンと恵美もその中に混じってギャラリーの視線の先を見てみ

ると、そこでは剣を構えているミラと、そのすぐそばに弟のソラ、そしてその隣にはバーズと、カレンが見たことのない男が立っていた。

「姉さん、今日はもうやめておいたほうがいいよ」

「いや、もう一回！」

「わかった、これで最後だよ。火の精霊よ！」

ミラの剣が炎をまとい、それが柄のほうに吸い込まれるように移動していった。

「くっ！」

だが、ミラは顔をしかめてうめくと、剣を取り落としてしまった。ソラと見たことのない男がそれに駆け寄った。

「ああ！」

「そう焦るな。半分くらいの確立ではできてるんだし、力を暴走させてるようなことはないんだから、すぐに完璧にできるようになるさ」

「兄さんの言う通りだよ。無理しないで完成させればいいじゃないか」

慰められたミラは、とりあえず剣を拾って鞘に納めた。

「完璧にできないと実戦で使えないでしょ。まあ、今日のところはこれで終わりにするけど」

そう言うってからミラはギャラリーの方に向かって歩き出そうとして、止まった。

「カレン師匠！」

カレンの姿を見つけると一直線にそっちに走っていった。

ノーデルシア王国にて

カレンと恵美、ミラ、ソラ、ジャド、バーンズの六人はミラの部屋に集まっていた。椅子は足りないなので、全員床に車座に座っている。

「これは僕達の兄で、ジャドっていいいます」

とりあえずソラがそうジャドを紹介をすると、ジャドはカレンと恵美に笑顔を向けた。

「話は聞いています。前からお会いしたいと思っていました」

「そうですか、よろしくお願いします」

カレンは笑顔で返し、恵美もなんとなく笑顔でうなずいた。

「で、カレン師匠、そっちの人は？」

さつきから恵美のことを見てうずうずしていたミラが身を乗り出して聞いた。

「この方はタマキさんやヨウコ様と同じ世界から来た、シオハタエミ様です」

「同じ、世界ですか」

ミラはその答えに意表をつかれたようだった。それは他の三人も一緒だったが、バーンズが一番最初に立ち直った。

「どのような事情なのでしょうか」

「詳細は不明な点が多いのですが、エミ様が召喚されたのはロベイル王国です。どうやら悪魔や魔族が絡んでいるようで、現在はタマキさんがあちらに残って動いている最中です」

「なるほど、あの襲撃してきたローブの者達はその手先でしょうか」
バーンズがそう言うってから、先日の戦いを語った。カレンはそれに確信を持つてうなずく。

「それなら私も何度か戦いました。その剣が役に立ったようですね、よりです」

「これは素晴らしい剣ですね。どうやって作ったのですか？」

「旅先で腕のいい鍛冶屋に頼んだんです。タマキさんも協力して魔力を使って作ったものなので、生半可なことでは傷つきませんし、時間が経っても劣化するようなことはありません」

「これはそれほどのものでしたか。私に託してくださって、ありがとうございます」

「いえ、最初からバーンス様に使ってもらうつもりだったものですから。ところで、ミラ、さきほどのあれは何でしょうか？」

カレンに話をふられると、ミラは剣の柄に手を触れた。

「私の剣は力を与えてくれるものですけど、それに目をつけたジャド兄さんが、精霊の力も取り込めるはずだっていうアイデアを出したんですよ」

「精霊の力ですか。さきほどの様子ではまだうまくは使えないようですね」

「でも、うまく使えたときはものすごい力なんですよ」

ソラがフォローを入れて、カレンはそれにうなずいた。

「確かに、精霊の力を自分のものとできれば、それはかなりの力になるでしょうね。それこそ、魔族にも対抗できるくらいの力かもしれません」

「そうなんです！ あの戦いはカレン師匠にも見てもらいたかったですよ！」

「それはまたの機会に見せてもらいますよ」

そこでドアが開けられ、エバンスが室内に入ってきた。

「全員集まっているな」

それからエバンスは部屋の六人の中に加わった。

「カレン、お前の話を聞かせてくれ」

「はい」

カレンが話し始めようとすると、部屋の窓を叩く音がした。一同がそちらに顔を向けると、そこには黒い小さな鳥がいた。カレンが窓を開けると、鳥はその手に乗って、その姿を手紙に変えた。

カレンはそれをざっと読んでから、エバンスに手渡した。エバン

スは一通り目を通してからカレンに返し説明を待った。

「エミ様が召喚された理由ですが、この手紙によると、悪魔の実体化のためだということです」

「まさか、そんなことが？」

ソラが驚いたようにつぶやいたが、ジャドは何も言わずに考え込むような様子を見せた。

「それでは、その実体化をしようとしている悪魔というのは一体何者なのでしょう」

バーンズの質問に、カレンは全員を見回してから口を開く。

「オメガデーモンという名の悪魔で、配下もそれなりにいるようです。配下の人間に力を与えて人外のものに変えている以外に、魔族も動いているようで、ここに到着する直前に私に接触してきた魔族がいました。おそらく、近いうちに襲撃してくる可能性が高いです」
しばらく全員が黙り込んだが、その沈黙を破ったのは、ジャドだった。

「カレンさん。エミさんは悪魔の実体化のために召喚されたということですが、それは彼女だけでできることなのですか？」

「いいえ、他にもこの世界にある何かが必要なようです。小さなものとしか書いてありませんが、どうやらそのためにロベイル王国を利用しているようです」

「確かに、あの国は規模のわりに人口は多いし、現在の王は野心があるようだから、なにか甘言をささやかれて悪魔と契約したという可能性も考えられるな」

カレンの説明をエバンスが引き継ぐと、それを聞いたミラはため息をついた。

「でも悪魔と契約なんて、ありえないですよ、それは」

「確かにそうだ。悪魔が実体化したら、ひよつとしたら契約なんかには縛られなくなるのかもしれないのに」

ミラに同意したジャドに、バーンズが身を乗り出して口を開く。

「ジャド殿は悪魔のことに詳しいようですが？」

「ああ、兄さんは学者なんですよ。主に魔法とか魔物、魔族のことが専門です」

質問にはソラが答えた。それを聞いたエバンスは大きくうなずいてから立ち上がった。

「そういうことなら、意見を聞かせてもらいたい。今はハティスも不在だし、意見を聞ける専門家は一人でも欲しい」

「もちろんご協力させてください」

それから全員が立ち上がり、エバンスはそれを見回した。

「皆は魔族の襲撃に備えて待機していてもらいたい。頼むぞ」
「はい！」

おしゃべり

話の間どうしていいかわからず、とりあえず黙って話を聞いていた恵美は、椅子に座ってとにかく落ち着こうとしていた。部屋にはすでにカレンしか残っていないくて、恵美のことをただ見守っていた。数分後、恵美は多少気持ちが悪くなり、それを感じ取ったカレンは恵美に近づいた。

「エミ様、落ち着かれましたか」

「はい。私はどうすればいいんでしょうか？」

「私達が全力でお守りします。ですから、ヨウコ様のお話相手などをしていただくのがいいのではないのでしょうか」

「話し相手、ですか」

「はい。今は大事な時ですし、同じ世界の人同士、安心できるのではないでしょうか。エミ様の力を貸していただければ、大いに助けになるはずです」

「私の、力？」

「はい。邪悪な目的以外にだって、あなたができることはあるのですよ」

恵美はカレンの言葉に励まされて顔を上げ、カレンの目を見た。そこにあるのは、ただ真剣な表情だけだった。

「わかりました。多分、私が助けてもらっただけだと思いますけど。できるだけのことはやってみます」

「よろしく願います。ところで、エミ様の部屋ですが、ここでミラと一緒にするのはどうでしょうか？ 年齢も近いようですし、私よりもミラというほうがリラックスできると思います」

「ええ、でも」

「心配はありませんよ。付き合いやすいタイプですし、護衛としての実力も十分ですから」

そう言っているうちに、ミラが戻ってきた。

「カレン師匠、とりあえず二人一組で行動するようにということになったんですけど」

「いえ、むしろあなたはエミ様と一緒にいてもらえますか。いや、いざという時を考えたら、ソラも一緒にのほうがいいでしょう」

「でも、それじゃあ」

そこでカレンはミラの肩に手を置いた。

「敵の目的はエミ様です。どんな手段をとってくるかもわかりませんし、こちらも万全の体制であるべきです。機動力ならば私が一番ですから外はなんとかしますし、バーンズ様には兵の指揮をとっていただかなくてはいいけません」

ミラは言われたことの意味をじっくりと理解するようにうなずき、恵美のほうに体を向け、口を開いた。

「私達が絶対になんとかします」

それから自分の剣に手をかけた。

「この剣に誓って、必ず」

恵美はその迫力に圧倒されたが、なんとか気を取り直して立ち上がると、一礼した。

「よ、よろしくお願いします」

ミラはそれに対して、笑顔を浮かべた。

「一緒に頑張ろう！　じゃあ、弟も紹介するから、ちょっと待っててください」

そしてあつという間に部屋を出ると、すぐにソラを連れて戻ってきた。

「あらためて紹介すると、これが弟のソラで、私がミラです」

「よろしくお願いします」

恵美はとりあえず再び頭を下げた。ソラはそれに笑顔で対応する。「僕達はこちら見えてもけっこう強いので、安心してください」

カレンはその様子を見てからドアのほうに歩いていき、無言で部屋から出て行った。

それを見送ってから、ミラはおもむろにソラの手をつかんだ。

「じゃあ、あんたは外で待機してて。やっぱここは女同士のほうがいいから」

「わかったよ。何かあったらすぐに知らせて」

そう言ってソラも部屋から出て行った。それからミラはベッドに勢いよく座った。

「エミさんも座って。慌ててもしょうがないし、のんびりしましよ
う」

恵美は言われた通りに椅子に座った。

「ところでエミさん、タマキ師匠からもあっちの世界については聞いてるんですけど、魔法とかそういうのはないんですね」

「ええ、まあ。そういうのは物語とかの中だけです」

「うーん、なんか想像できない感じですね。タマキ師匠は魔法に関してはものすごい実力だし、新しい使い方をどんどん考え出すくらい天才的だし」

「すごいんですね、環さんは。でも、私はそういうのは全然駄目なので、なんか情けなくて」

「タマキ師匠はどう考えても特別ですよ。ああ、ところで、もうちょつとくだけでしゃべりませんか？ もつとこう、友達感覚で」

「友達？ ですか」

「そうそう、そのほうが気楽だし。呼び捨てで呼び合う感じで」

「ええと、じゃあ、ミラ。こんな感じ？」

ミラは笑顔でうんうんとうなずいた。

「じゃあエミ。うん、やっぱこっちのほうが気楽でいいや」

声をだして笑うミラに、恵美もなんとなく気持ちが悪くなった。い
くを感じて、自然に笑顔になった。

「あ、その笑顔可愛いじゃん。魔法の才能とか関係ないって、それだけできつとヨウコさんとかも助かるし、剣しか能がない私よりずつといいよ」

「カレンさんにも言われたけど、可愛くなんてないよ」

「いやいや、顔だけなら可愛いっていうのは珍しくないけど、エミ

は雰囲気がいい！ 守ろうっていうやる気がでてるよ」

恥ずかしそうな顔をする恵美と、気安い友達のようなミラ。その
雰囲気、恵美は気分が楽になっていった。

予告された襲撃

町のことはバーンズに任せて、カレンは一人で町の外に出ていた。すると、どこからともなくフィルガロエが姿を現した。カレンはその咆哮に体を向ける。

「確かあなたの目的はエミ様だったと思いますが」

「あなたの相手を私がするってだけさ！」

フィルガロエが飛びかかってきたが、カレンは素早くその胸元に手を当てた。

「その前に場所を変えましょうか」

カレンの髪と目が白銀に染まると同時に、胸元に当てた手から光がほとばしり、フィルガロエの体を凄まじい勢いで吹き飛ばした。

カレンはそれを追って跳躍すると、まだ空中にいるフィルガロエにさらにもう一撃を加えた。そして、誰もいない丘までくると、何事もなかったかのように両者は着地した。

「やってくれる」

それには答えず、カレンは剣を抜いた。フィルガロエも同時に手をかまえた。

「受けてみる！」

そこからカレンに向かって巨大な氷の牙が放たれた三発放たれたが、カレンはそれを全て剣で打ち落とした。フィルガロエはカレンの真上に飛び上がり、今度は小さな氷の牙を雨あられと降らせた。

カレンがそれに向かって剣を振ると、その圧力で小さな氷の牙は全てそれでカレンの周囲に着弾した。フィルガロエはカレンの背後に着地し、振り返ると笑った。

「大した力じゃないか。このもらった力、使わせてもらうよ」

そこでフィルガロエの雰囲気が変わった。

「なるほど、それが例の悪魔の力というわけですか」

「そうだ！」

言葉と同時に、フィルガロエの背後に数百発の氷の牙が出現し、一斉にカレンに襲いかかる。轟音と土と氷が混ざった煙が発生したが、カレンはその上空に飛んでいた。

「こちらも、いきますよ」

カレンがつぶやくと、その体にまとうレザーマーが闇に覆われていった。白銀に輝く髪、目、翼、剣、そして漆黒の鎧をまとう、神々しいとも禍々しいとも形容できる姿がそこに現れた。

フィルガロエはそれに向かってさらに氷の牙を連続放つ。だが、カレンはそれにかまわず一気に降下した。

氷の牙はカレンに命中したが、その体を傷つけることなく砕け散る。カレンは空中で一回転して、フィルガロエに向かって蹴りを放った。その蹴りは空を切ったが、カレンはやわらかく着地して、後ろに飛び退いたフィルガロエに輝くナイフを投げた。

フィルガロエは氷を盾のように発生させてそのナイフを弾いた。しかし、そこにカレンが真上から剣を振り下ろす。氷の盾は真つ二つになり、フィルガロエに剣が迫る。

「クソッ！」

なんとか身をよじりそれをかわそうとしたが、フィルガロエの肩が浅く切り裂かれた。カレンはそのまま体を回転させ、斜め上からフィルガロエに向かって踵を落とした。それは腕でガードされたが、威力は十分で、フィルガロエは地面に叩きつけられ、地面を掘り起こしながら進んだ。

カレンは着地すると剣を構え、フィルガロエが止まった場所を見据えた。その視線の先、地面が盛り上がり、フィルガロエが飛び出した。

「貴様！ 許さんぞ！」

「何を許そうと言っんですかね」

カレンはわずかに口を歪めた。それが聞こえていないフィルガロエは両腕を広げる。すると、その体を中心として、氷の塊が形成されていった。

そして、その切っ先がカレンに向けられ、一瞬で加速をした。だが、カレンはその場から動かず、剣を逆袈裟に振り上げた。

なんとも言えない甲高い音が響くと、カレンの背後で氷の塊が砕け、フィルガロエがその場に倒れた。

カレンはそこにゆっくりと歩いていき、剣をフィルガロエの胸元に突きつけた。

「何か有益な情報でもあれば、聞かせていただきたいところですね」

「そんなことを、言つて、私に何の得がある」

「悪魔と手を切つておとなしくしているというなら、見逃すことも考えましょう」

「はは、アハハハハ！ それは傑作だ！」

「おかしいことではないでしょう。魔族と言えども、命は惜しいものだと思いますが」

その一言にフィルガロエは自嘲気味の歪んだ笑顔を浮かべた。

「慈悲深いことだな」

「そうですね。私もそう思います」

「たかが人間が生意気なことを、ほざくな！」

フィルガロエはカレンに手をむけ、氷の牙を放つが、それはカレンの拳であつさりと打ち砕かれた。だが、その隙にフィルガロエは転がってカレンと距離をとってから、立ち上がった。

「残念です」

カレンは一瞬のうちにその距離を詰め、剣をその体の中心に突き刺した。そして、左手をフィルガロエの体に添えると、そこから闇を一気に放出してその体を包み込んだ。

断末魔も残せず、フィルガロエは闇に飲まれてその姿を跡形もなく消した。後に残ったものは、残滓と言えるわずかな光だけ。

カレンは普通の状態に戻ってから、剣を鞘に収めた。

「これで、こちらはとりあえず大丈夫でしょうか」

しっかりとした足取りで町の方に戻りだした。

歩み寄り

タマキは部屋の中心に立つて、荒れ果てた部屋の補修と、家具が搬入されるのを見ていた。その作業を監督していたロドックは一息入れてタマキに近づいてきた。

「ひどい荒れようだったが、まあなんとかなりそうだ。しかし、まさか王宮に滞在していたとはな」

「まあ、それが都合がよさそうだったからな。それもそろそろ終わりにできそうだけど」

「そうか。まあとにかく仕事をくれたのには礼を言う。これを機会に、王宮にも、もっと食い込んでいくぞ」

「商売熱心でけっこうじゃないか。まあ頑張ってくれよ」

「それで、これからどうするんだ？」

「まあ、うまくいけばけっこう大がかりなことをセッティングしなきゃならないだろうな。実現までは気が抜けない」

「手伝えることがあったらなんでも言ってくれ」

「なんかあったら頼むよ」

二人がそうして話していると、今度はキアンが部屋に入ってきた。ロドックはその姿をみとめると、慌てて頭を下げる。

「これは陛下。このたびは当店をご利用いただきありがとうございます」

「お前の店の評判は聞いている。これから励めよ」

「はい。ありがとうございます」

それからキアンはタマキに顔を向けた。

「タマキ、話がある。来い」

「ああ、じゃ、こっちは頼むよ」

それからタマキは部屋を出てキアンについていった。到着した場所
所はキアンの私室。

「私がいいというまでは誰も通すな」

護衛にそれだけ言うと、キアンとタマキは部屋に入った。二人は椅子に座ると、いきなりタマキが口を開いた。

「こんなところに招待してくれたってことは、俺に協力してくれる気になったってことかな？」

「そうではあるが、条件がある」

「条件ね。聞かせてもらおうじゃないか」

「まずはノーデルシア王国の王子との会談をもつために、お前に話をつけてもらいたい」

「俺に？」

「そうだ。お前からの頼みならば向こうも嫌とは言えまい」

「まあ、そうかもな。いいぜ、俺からエバンスに連絡しよう。で、他にもあるんだよな」

「ああ、我々がお前に協力するということは悪魔を裏切るといふことだ」

「だから、俺にそれをなんとかしろってことか」

「そういうことだ」

タマキはにやりと笑って立ち上がった。

「いいぜ」

「それで、お前は何を求める？」

「別に、好きにやらせてくれればそれでいい。ああ、それからあの娘が帰れるようにそっちでもできるだけのことをしてくれよ」

「わかった。約束しよう」

「よし、契約成立だ。エバンスとはいっ、どこで会うつつもりなんだい」

「それならばちょうどいい場所がある。後で地図を部屋に届けさせよう」

「じゃ、よろしく」

タマキは軽く手を上げてから部屋を出て行った。キアンはそれを見送ってから立ち上がる。

「これでタマキ君の力を借りられますねえ、女王様」

いつの間にか部屋の隅にはファスマイドが立っていた。キアンはそれを見ても驚くことなく、椅子に座ったままため息をついた。

「このほうがまだましだというだけだ」

「そんなことはないでしょう。タマキ君はやりたいことをやってるだけだから、変なひもつきじゃありませんよ」

「そうかもな。それに、これであの国の王子とつながりができるのなら悪くない話だ」

「そうそう、前向きに考えないといけませんよ」

キアンはそこで立ち上がると、ファスマイドのことを睨みつけた。

「私には仕事がある。貴様は妙なまねをするなよ」

「僕は基本的にただの傍観者ですよ」

「信頼できるものではないな」

キアンは部屋から出て行った。残されたファスマイドも、軽く笑みを浮かべてから姿を消した。

タマキが部屋に戻ってみると、内装は完璧に出来上がっていて、すでにロドック達は帰ったようだった。

「綺麗になったもんだな。じゃあ、仕上げをするか」

タマキはカードを取り出すと、それを部屋の角に置いていった。

「これでよし、と」

「何をやった？」

サモンが尋ねるとタマキは腰に手を当てて体を伸ばしながら答える。

「一日くらいは持つようなプロテクションの準備だ。ファスマイドみたいに結界が使いりゃいいんだけどな」

「それならあいつに聞けばいいだろう」

「素直に教えると思うか？ それに、楽しみのためって変なことを吹き込まれそうじゃないか」

「そういうものか」

「そうだ。それよりもエバンスに手紙書かないとな」

そこでドアがノックされた。

「開いてるぞ」

ドアが開けられると、そこには兵士が畳んだ布を持って立っていた。

「陛下からです」

「ああ。ご苦労さん」

タマキは兵士から布を受け取り、それを机の上に広げた。それには地図が描かれていて、わかりやすいように赤い印がつけられている場所があった。

「クラット砦？　これは緩衝地帯ってやつだな」

「つまり、どこにも属していない場所ということか」

「そういうことだ。けっっこういい場所を指定してきたな」

会談準備

「ロベイル王国の女王からの会談の申し入れか」

エバンスは執務室でタマキからの手紙を前にして腕を組んでいた。

「確かに、これはいい機会だ。だが、問題は誰を連れて行くかだな」
「私が一緒すべきでしょうか」

机の前に立っていたカレンがそう言うのと、エバンスは少し考えてから首を横に振った。

「いいや、ここに残ってもらおう。魔族を退けたといっても、まだ油断はできん。お前はヨウコとエミを守ってくれ」

「わかりました。では、ミラとソラを連れて行くのでしょうか」

「そうだな、そうするのがいいだろう。これから話をまとめるから、バーンズやヨウコ達にも伝えておいてくれ。頼むぞ」

「はい」

カレンが部屋から退出すると、エバンスは組んでいた腕を解いて額に手を当てた。

「これから大変だが、必要なことだな」

一方その頃、恵美はヨウコの部屋に来てお茶を飲んでいた。

「そう、恵美ちゃんはもうすぐ受験なのね」

「まだ少し先で、どうするかはまだしつかりとは決めてないんですけど」

「じゃあ、じっくり考えて決めないとね」

「はい。でも」

恵美は言葉に詰まったが、ヨウコは笑顔を浮かべるだけだった。

「大丈夫。私はもうあきらめたし、ここで幸せだからいいんだけど、あなたは絶対に帰れるから。だから、あきらめないで気持ちを強く持っててね。私はあなたを応援してるし、できることはなんでもするから」

ヨウコには今まで何度もこうやって励まされてきたが、恵美はそ

のたびに力づけられていた。

「失礼します」

ちょうどそこでカレンが部屋に入ってきた。

「あらカレン、どうしたの？」

「はい。タマキさんから手紙が届きまして、エバンス様がロベイル王国の女王と会談をもつことになりました」

「そう。カレンはどうするの？」

「私は残ります。おそらくミラとソラを連れて行くことになるのではないのでしょうか」

「それなら安心ね。タマキ君も来るのかしら」

「それはわかりませんが、これを機会に何かを考えているのは間違いないと思います」

「あの、一体何が起こるんでしょうか」

恵美が不安そうな顔でそう言つと、ヨウコが安心させるような微笑を浮かべてその肩に手を置いた。

「たぶん、恵美ちゃんにとっていいことじゃないの。今はあの人とタマキ君にまかせましょう」

「は、はい。わかりました」

「では、またなにかありましたらうかがいます」

カレンは軽く頭を下げて部屋から出て行った。それから目指したのは訓練場。そこには予想通りミラとソラがいた。

「いくよ、姉さん」

「よし来い！」

「火の精霊よ！」

ミラの剣が炎に包まれ、それが剣を伝わってその体に流れ込んでいった。ミラは全身を力ませ、その力をしっかりと制御した。

そこから剣を構え、練習用の鎧を着せられたかかしに向かって踏み出した。その一步は力強く、一気にかかしとの距離を詰める。

「はっ！」

気合と共に剣を横に一闪させると、鎧ごとかかしが鮮やかに両断

された。ミラが振り返らずに剣を振るとそこから炎が放出され、それから大きく息を吐いて剣を鞘に収めた。

ソラはそこにゆっくりと近づいていった。

「もうほんと完璧だね」

「まあね。とりあえず精霊一個ぶんなら使えるようになったから、あとは二個ぶんか」

「姉さん、精霊はものじゃないんだから、個っていうのはちょっと違うんだけど」

「まあ、細かいことはいいじゃん」

そこでミラはカレンに気づいて手を大きく振った。

「カレン師匠！ 今の見てくれましたか？」

「ええ、素晴らしい力ですね。それならば私も安心できます」

「それは、どういうことですか？ 僕達に何かやることがあるんでしょうか」

「そうです。タマキさんから手紙が届いて、あなた達の力が必要になりそうなので」

「どういうことですか？」

ミラが不思議そうに聞くと、カレンは出入り口に視線を向けた。

「簡単に言つと、二人にはエバンス様の護衛として出かけてもらうことになるかもしれません。詳しいことはバーンス様も呼んで、落ち着けるところ、そうですね、あなたの部屋に移動してからにしましょう」

「じゃあ、私はバーンスさんと呼んで来ますから、先に行つててください」

それから数分後、ミラの部屋にはバーンスとジャドを加えた五人が集まっていた。全員が適当な場所に座ってから、カレンは口を開いた。

「タマキさんから手紙が届きまして、エバンス様がロベイル王国の女王と会談をもつことになりました」

ミラはそれを聞いてうなずいた。

「護衛ってそういうことなんですか。ところで、カレン師匠とバーンズさんはどうするんですか？」

「少なくとも私は残ることになります。バーンズ様にも残っていたくことになるのではないでしょうか」

「それで、会談場所はどこなんですか？」

「クラット砦だそうです」

バーンズはそれを聞くと、すぐにその場所がわかったようで、腕を組んだ。

「それならば、互いに少人数ということになりそうですね」

「はい。エバンス様もあまり大がかりにするつもりはないのではないのでしょうか。それに、おそらくタマキさんが何かを考えているでしょうし、それほど心配することもないと思います」

女王一行

タマキはそれほどの数ではないと言え、完全武装した集団の後ろを歩いていた。キアンとの約束もあるので残ろうかとも思ったのが、出発前の出来事でこちらに同行することに決めたのだった。

時間は数日前、ファスマイドがタマキの部屋に突然訪れてきた。

「こつちのことなら任せてくれればいいから、向こうに行ってきたら」

「じゃあ、こつちはどうするんだよ」

「まあ君ほど派手なこととはできないけど、僕だつてここに手を出させないことくらいはできるからね。それに、あっちのほうが危ないかもしれないよ」

タマキは数秒間黙つたままファスマイドの顔を見たが、かすかに笑つて立ち上がった。

「それもそうかもな。じゃあ、こつちはお前に任そう」

「信頼してくれてありがとう」

「ああ、お前の期待するような楽しいことのためにも頑張れよ」

「それはもちろん、しっかりやらせてもらうよ」

ファスマイドは満面の笑みだった。

そうということがあつて、今タマキはキアンと一緒にクラット砦に向かつているというわけだった。出発から数日経っているが、今のところ変わったことはなく、順調な旅路だった。

それからさらに数日後、一行はクラット砦まであと少しというところまで到着した。そしてその日の夜、タマキは周囲の警戒と散歩をかねて適当にぶらぶらしていた。

「よおケリアン、いつもご苦労さん」

顔見知りになった槍を持った兵士にタマキは軽く手を上げた。まだ若い兵士は少し疲れたような顔をして同じように手を上げる。

「どうもタマキさん、今日もやってるんですね。疲れないんですか

？」

「休めるときにしっかり休んでるから大丈夫なんだな。それに旅には慣れてるし」

「そうなんですか」

ケリアンはタマキの正体はわかっていなかったが、只者でないと、タマキのおかげで自分達の負担がかなり減っているのは理解していた。

「別に居眠りしててもいいぞ。俺がやっておくから」

「そういうわけにもいきません」

「まあ、お仕事だもんな。適当に頑張れよ」

タマキはその場を立ち去ろうとしたが、何かを感じたようであまり止まった。それからカードを一枚取り出すと、ケリアンに差し出した。

「持っておきな。いざというときに役に立つから」

「ああ、はい」

それからタマキは姿を消してしまった。ケリアンは何のこともわからなかったが、カードをベルトにはさんで、見張りの任務を続けた。

それから数時間後、そろそろ交代という時間が近づいてきて少し気が抜けてきたケリアンだったが、突然の物音に体を緊張させた。

とりあえずケリアンは物音を確認する前に、次の見張りを起こしてその場を任せると、物音の確認のためにその場を離れた。

ケリアンは物音がした近くの藪に足を踏み入れていった。槍で藪を払いながら進んでいくと、視線の先に影が見えた。槍を構えてそれにゆっくり近づいていく。

そこに横から何かが飛びかかってきた。ケリアンはとっさに身をかわし、その飛びかかってきたものを見た。それは四足でうなり声をあげるピットデーモンだった。

ケリアンは槍でそれを薙いで牽制すると、野営地の方向に顔を向けた。

「魔物だ！」

とにかく大声で叫んだ。すぐに正面に向き直ると、ピットデーモンが飛びかかってきたのが見え、ケリアンはとっさに槍を横殴りに振るって、ピットデーモンを弾き飛ばした。

さらにケリアンは踏み込んで槍を突き出し、ピットデーモンを貫いた。すぐに槍を引き抜くと、さっきの影のほうに視線を移し、槍を構えなおす。

すると、その影がゆっくりと立ち上がり、オーガの巨体が姿を現した。しかもそれは荒っぽいが頑丈そうな鎧に身を包んでいた。

ケリアンはオーガとは戦ったことはあるが、こんなふう武装しているオーガなどというのは見たことも聞いたこともなかった。

オーガは咆哮すると、ケリアンに向かって突進してきた。ケリアンはその勢いに圧倒され、身構えるだけで精一杯だった。

そしてオーガが腕を振るおうとした瞬間、ベルトに挟んでいたカードが光り魔法の盾が展開されると、その巨体を軽く弾き飛ばした。

「これは？」

ケリアンは光っているカードを手にとった。そこから魔法の盾が展開されているのを確認すると、そのカードをオーガに向けてかざして野営地から遠ざけるように押していった。

だが、数歩でカードは光りになって消えてしまった。オーガは再びケリアンに向かって突進しようとしたが、上空から何かが落ちてきて、その体を地面にめりこませた。

「こっちのほうにもいたのか」

タマキがオーガを踏みつけて立っていた。そして、手をオーガに向ける。

「アイスバイト！」

氷の牙が鎧ごとオーガを貫き、その巨体を地面に縫いつけた。オーガは体をわずかに動かしたが、それだけですぐに動かなくなった。タマキはそれを確認すると、オーガの上から降りてケリアンのほうに近づいていった。

「悪かったな、ちょっと見落としてた。まあ、渡した物が役に立ったようでもよかったよ」

「はい、助かりました。ありがとうございます」

「ま、それなら良かったよ。他の魔物は全部片付けておいたけど、念のために警戒は続けておいてくれ」

「了解しました」

ケリアンはまるで上官にたいするように敬礼をして、野営地のほうに走っていった。

「真面目な奴だな。まあ、あいつだけってわけでもないけど」

タマキはその後ろ姿を見ながら感心したようにつぶやいていた。

クラット砦

クラット砦は普段はただの緩衝地帯でさびれた場所だった。しかし、今は兵士達ばかりだが、一時的に賑わっていた。

ノーデルシア王国とロベイル王国の一行は砦を挟んだ離れた場所にキャンプを設営していた。そのノーデルシア王国側のひととき大きなテントにタマキは近づいていた。

「おつかれさん」

護衛に手を振りながら中に入った。

「おじゃましまーす」

タマキが中に入ると、そこにはエバンスとミラ、ソラがいた。ミラは立ち上がってタマキに駆け寄ってきた。

「タマキ師匠！ お久しぶりです！」

「ああ、久しぶり。元気そうだな」

タマキはミラの肩を軽く叩いてから、ソラにも手を振った。それからエバンスの向かい側の椅子に座る。エバンスは手を差し出し、タマキはそれを軽く握り返した。

「来てくれて助かった。手紙とカレンからの話で事情はそれなりにわかってるつもりだが、何かあるのなら聞かせてくれ」

「いや、特にないな。それより、ここに来るまでの間に魔物とか出たかな？」

「それなら少し変わった魔物が出てきたな。鎧や武器を装備していた」

「ああ、それはこっちにも出てきた。あれが大量にいたらそれなりに面倒くさいよな」

「確かに、あれでは普通の兵士や魔法使いでは相手をするのは難しい。ミラやソラなら問題にならないくらいの相手ではあるがな」

タマキはそれを聞いてミラとソラを感心したように見た。

「お前達も強くなったんだな」

そう言われたミラは胸を張った。

「はい！ もちろんですよ！ 魔族だっていつでも来いつて話です！」

「まあ、たぶん活躍してもらうことになるだろうな」

タマキがそう答えると、エバンスはうなずいてからその顔を見た。
「ところで何か仕掛けてきたのか？」

「いや、まああっちがどう動いてくるかによるな。何も考えてないわけでもないけど、とりあえず様子見の予定だよ」

「そうか。では私は仕事に専念するでしょう。頼んだぞ」

「わかった。任せといてくれ」

それからタマキはミラとソラに向かって手招きをした。

「じゃあ、作戦会議でもするか」

「タマキ師匠、その前に紹介しておきたい人というか、兄がいるんですが」

ソラはそう言ったが、とりあえずタマキはうなずきながら二人の背中を押してテントを出た。三人は皆の前までくると適当に地面に座った。

「さて、紹介したいっていうのは誰なんだ？」

「それなら今から呼んできます」

ソラが立ち上がって小走りでノーデルシア王国側のキャンプに向かった。タマキはそれを見送ってからミラのほうに顔を向けた。

「でも、お前達に兄貴がいたんだな」

「まあ、いるっただけですけどね。義兄ですし」

「ふうん。何やってるんだ」

「怪しい学者ですよ。どうしても師匠に会いたいつて言っつて来たんです」

「それは楽しみだな」

そして数分後、ソラがジャドに引つ張られて戻ってきた。ジャドはタマキの姿を見ると、すぐにその前に膝をついて、興奮した表情でタマキのことをじろじろと見た。

「初めまして！ あなたがノーデルシアの勇者、タマキ様ですね！ 私はジャドといいます！」

「ああ、初めまして」

タマキが手を差し出すと、ジャドはそれを両手で握って勢いよく上下に振った。

「いや、妹と弟がお世話になっていきます。ところで、是非色々教えていただきたいことがあるのですが、お時間をいただけないでしょうか？」

「まあ、いいけど。とりあえず今はこれからの話をしようじゃないか」

「それなんです、実はこちらからお話があるのです。例の悪魔の実体化に関する事なんですが、それに必要なアイテムを見つけることができたかもしれません」

「はい、とりあえずそれは後で」

ミラがジャドを強引に遮った。

「今はとにかく、これからすぐに起こりそうなことの対策を練らないとね」

そう言われて、ジャドはとりあえず引き下がった。ミラはそれを確認してからタマキのほうを向く。

「やっぱり、あの武装した変な魔物が攻めてきたりするんでしょうか？」

「来るんじゃないかな。それに、ひょっとしたら魔族も来たりするかもな」

「魔族ですか、あの武装した魔物は中々手ごわいですし、その上そんなものまできたりしたら中々大変そうですね」

ソラの言葉にタマキはうなずいた。

「そうだな。どこから仕掛けてくるかわからないし、こつちもしっかり対策をしておかないとな。とりあえず俺が全体的に警戒するとして、お前達にはこの砦を中心に、細かいところを見ておいてもらおうか。上からじゃ屋内とかはわからないしな」

「わかりました！ 任せてください！」

ミラは自分の胸を叩いて力強く宣言した。それを見てうなずいたタマキを見て、ジャドは身を乗り出した。

「では、次は私の話を聞いてもらえますか？」

「ああ、聞かせてもらおうよ」

オーブと地下

タマキとジャドはあるテントの中に来ていた。ジャドは自分の荷物を漁って一冊の本を取り出すと、それをタマキの前に持ってきた。「これはこの世界に伝わる伝説を記したものです」

ジャドはその中の一ページを開いてタマキに手渡した。タマキはそのページに目を通してから、自分の顎に手を当てた。

「なるほど。これは面白い」

「そうでしょう。この世界にいくつか存在していると言われる、特殊な魔法のアイテムです」

「ドラゴンオーブね。強い魔力が凝縮されているのはわかっているけど、おそらく、それ以上のものがあるってわけか」

「確認されている限り、悪魔が探しているのはこれの可能性が一番高いと思われます」

「で、これはどこに？」

「我々の一族が一つだけ保管しているんです」

「それは危ないな。もしその存在が知られてるなら、あいつらも動きだしてるかもしれない」

ジャドはそれを聞いてにやりと笑い、腰に下げている袋を手にとった。

「実はここにあるんですよ」

袋から、ジャドの手に赤く透き通ったオーブが落とされた。タマキはそれを受け取り、適当にこねくりまわしてみた。

「確かに、これは妙な代物だな。魔力だけじゃない何かを感じる」
タマキはそのオーブをジャドに返した。

「まあ、これが正解かはあいつらの反応でわかるだろうな。しつかり持っておいてくれよ」

「もちろんです！」

「じゃあ、俺は見回りに行って来るから、後はよろしく」

タマキはそれだけ言うのと立ち上がってテントから出て行った。残されたジャドはオーブをしまつと、自分の短剣と、道具袋を確認してから立ち上がった。

「予想以上の人物だ」

そうつぶやきながら、楽しそうにしていた。

テントを出たタマキはクラット砦から離れ、適当な場所にカードを設置していた。サモンはそれを疑問に思っただけだった。

「何をしているんだ」

「これは何かが近づいてきたら反応するんだよ」

「罠か？」

「ただ音を出して光るだけだよ。誤作動して誰か関係ない奴が引つかかったりしたらまずいしな」

「また人間を使ってきたらどうする」

「それなら前と同じように正気に戻してやるさ。数が多かつたら、まあ適当に足止めするようにする」

「面倒くさいやりかただな」

「このほうが退屈しなくていいだろ」

サモンとそう会話をしながら、タマキはカードの設置を続けた。その頃、ミラとソラはクラット砦の前に来ていた。

「しかしまあ、ずいぶんと古びた砦じゃない」

「そうだね。いくつかの国が持ち回りで管理してるみたいだけど、どこも必要最低限のことしかやらないみたいだし、このあたりにはほとんど人も住んでないからね」

「別に悪い場所でもないと思うけど」

「どの国も本腰を入れてないから、危険も多いんじゃないかな。」

「ああ、そういうこと。ま、とりあえず砦に入ってみない？ 何か使えるものもあるかもしれないし」

「そうだね。たぶん会談はここだろうし、確認しておきたいし」

そうして二人は砦の中に入ってしまった。内部はある程度掃除など

はされているようだったが、所々ガタがきているところがあり、お世辞にもいい状態とはいえなかった。

二人はその中を歩き、ホールのような場所に到着した。それなりの大きさで、かつては内装などもしっかりしていた痕跡だけがあった。

それから二人はさらに奥に進み、会議室として使われていたらしい部屋に入った。

「ここなんて会談場所に使いそうじゃない？」

「じゃあ、このあたりをちゃんと調べようよ」

「それじゃ、あんたはあつちをお願い。私はこつちをやるから」
「了解」

二人は手分けをして皆内部を調べ始める。そうしてしばらくすると、ソラが驚いた声を上げた。

「姉さん！　ちよつと来て」

「なに？」

ミラがそつちに行つてみると、ソラが一見したところ何の変哲もない床に膝をついていた。

「どうしたの」

「この床は下に通路があるんだよ。精霊が教えてくれてる」

「それなら、ちよつとぶち抜いてみようじゃない！」

ミラは剣を抜くと、その床に向かって思い切り振り下ろした。大きな音が響き、床が崩れると、その下から地下に続く階段が現れた。

「これは、隠し階段？」

「さあ、僕もわからないけど、とりあえず降りてみようよ」

「ま、大したことはなさそうだし、行つてみようか」

ミラは剣を手に持ったまま、階段を降り始める。ソラはその後ろから、火の精霊の力を使って灯火を二人の頭上に出現させた。

その明かりを頼りに先に進んでいくと、数分後には天然の洞窟らしき場所に入っていた。二人は立ち止まり、周囲を観察した。

「見たところ天然の洞窟みたいだけど、まさかこんなものがあるな

んて」

「ここから城内に侵入とかできそうじゃない。しっかりチェックしないかね」

階段から先は一本道なので、二人は慎重に先に進む。だが、洞窟は地上につながっている様子はなく、ゆるやかにさらに地下に降りていくことになった。

「どこまで下に続いているんだかね」

「さあ。でも、なんとなく妙な雰囲気はあるね」

アーブレリオナ

ミラとソラが洞窟を進んでいくと、前方に帽子を被っているらしい人影が見えた。

「誰だ！」

まずミラは大声を出した。すると、その人影はゆっくりと近づいてくる。

「お前達、何者だ」

「そういつあんたの名前を聞かせてもらいたいもんだけど」

「それもそうだな。私はアーブレリオナ、魔族だ。お前達の名も聞かせてもらおうか」

それを聞いたミラはかすかな笑みを浮かべた。

「じゃあ、こつちも名乗るけど、私がミラ、こつちが弟のソラ。あんたが魔族っていうなら、ここで片付けさせてもらうよ」

「面白い。ちょうど失態をなんとかしたいと思っていたところだ。まずはお前達を倒して、それからあの男をなんとかすることにしよう」

アーブレリオナは帽子を投げ捨てた。

「ソラ、あれよろしく」

「わかった。火の精霊よ！」

炎がミラの剣を包み込み、それが剣を伝わってミラの体に流れ込んでいった。精霊の力を全身に漲らせたミラは、静かだが迫力のあつたたたずまいだった。

「ソラ、あんたはタマキ師匠にこのことを報せて。ここは私がなんとかする」

「でも、それじゃ」

「大丈夫。いいから早く行ってきた」

少し間を置いてから、ソラはうなずいた。

「無理はしないで」

ソラは走って去っていった。アーブレリオナはそれを黙って見送り、ミラに視線を移した。

「準備運動にはちょうどいい」

「調子に乗ってるじゃん。痛い目見るよ、あんた」

ミラは一気に踏み込んで、アーブレリオナに向かって剣を突き出した。だが、それはかわされる。後ろに大きく飛び退いたアーブレリオナは少し驚いたような表情をしていた。

「できるな。ならば、こちらも本気でいこう」

アーブレリオナの雰囲気が変わった。ミラはその圧力に気圧されることもなく、輝く剣を構えなおす。

それに向かいアーブレリオナは手のひらを向ける。すると、そこに雷のかたまりが発生した。それがミラに向かって投げつけられた。ミラはそれをかわしながら前方に走るが、アーブレリオナは落ちて着き払った様子で、一見したところ無防備な様子のままだった。

ミラはジャンプして上段からそれに剣を振り下ろした。だが、それは目に見えない壁のようなものに遮られ、アーブレリオナには届かない。

「チッ！」

舌打ちと同時にミラは見えない壁を蹴って後ろに下がった。アーブレリオナが腕を振ると、そこに五発の雷の矢が放たれる。

ミラは鋭く剣を振って、それを全て打ち払う。だが、そこにできた隙にアーブレリオナがいつの間にか目の前に現れ、正面から拳を突き出してきた。

ミラはそれをなんとか腕で受けたが、体は大きく後ろに吹き飛ばされた。体勢を立て直してから、追撃がこないのがわかったミラは顔を上げて、笑った。

「思ったよりも大したことないね。戦い方もなっちゃいないし」
それから、姿勢を低くして後ろに引いた右足をじりつと踏みしめる。

「いくぞ！」

ミラは地面を蹴って逆袈裟に剣を振り上げた。アーブレリオナはそれを身を反らしてかわしたが、ミラはさらに踏み込み、振り上げた剣を振り下ろす。

それかわされたが、ミラはそこから体を回転させ、回し蹴りを放った。それは見事にアーブレリオナの体の中心をとらえた。

アーブレリオナは衝撃に耐えられずに転がったが、ミラはそれを追いかけずに用心深く様子をつかがう。数秒後、その倒れた体はゆらりと立ち上がった。

「確かに、お前を侮っていたようだ」

すると、その全身から強烈な放電が始まった。そして、の稲妻が一斉にミラに襲いかかる。ミラは剣でそれを受けようとした。

「ぐあああああ！」

防ぎきれずに、ミラは稲妻にさらされた。だが、それはいきなり飛来したカードが発生させた魔法の盾に遮られた。

「まったく、せっかく見逃してやったのに、なんでこういうことをするのかな」

タマキがソラを伴い、洞窟の闇の中から手に光を灯して姿を現した。アーブレリオナはそれを見て放電を止める。

「来たか」

アーブレリオナは低い声でそう言うと、タマキのほうに足を踏み出した。

「ちよっと待った」

膝をついていたミラは立ち上がり、タマキを腕で制した。

「タマキ師匠。こいつのことは、少しの間でいいので任せてください」

「できるのか？ いや、やるんだな」

それだけ言つて、タマキはミラの背中を叩いた。

「じゃ、任せた。でも、危なくなったらすぐに手を出すからな」

「はい。師匠はそこでゆっくり見ていてください」

ミラは笑顔でそう言うと、ソラのほうに顔を向けた。

「ソラ、風の精霊の力をよろしく」

「でも、まだ同時には使ったことはないよ」

「いいから、勝つためにはそうするしかないの」

ソラはしばらく考えてからうなずいた。

「わかった。風の精霊よ！」

その声と同時に、ミラの剣が風をまとった。

「はあああああああああ！」

風は剣を通じてミラの体に取り込まれた。何かを抑えるかのように

にミラは歯を食いしばり、アーブレリオナに剣を向ける。

「待たせたね」

「くだらん手品だな」

アーブレリオナとミラは互いに構え、対峙した。

精霊剣

「おおおおお！」

ミラの叫びと同時にその足元から風が巻き起こり、その体を包み込んだ。

「ハアッ！」

今までよりも数倍の速度で、ミラの体が矢のように放たれる。アーブレリオナはかわすことができずに、雷をまとった腕でそれをさばくだけで精一杯だった。

それでも最初は余裕がありそうだったが、次第にさばききれず、浅いながらもミラの剣は確実にその体に届き始めていた。

予想外の力にアーブレリオナの顔から余裕が消えていく。力の火の精霊と速さの風の精霊という力の分担が非常に強力な効果をあげていた。

「調子に、乗るなあ！」

それまでの余裕を感じさせる雰囲気とは全く違う叫びが発せられ、アーブレリオナの全身から強烈な放電が起こった。ミラはそれに弾かれ、後ろに下がる。だが、ダメージはほとんどない。

「そんな手品、私には効かないよ」

「手品かどうか、自分で体感して確認するといい」

アーブレリオナが両手を広げると、そこから雷が発生し、全身をその雷が焼いた。黒焦げ、にはならず、強力な雷を全身にまとった。

「やっぱり手品？」

「どうかな」

二人は同時に地面を蹴り、激突した。風と雷が舞い、ソラは思わず腕を上げて、目を守った。タマキは腕を組んだまじつと二人の戦いを見ている。

戦いは激しさを増していき、双方とも、決定打とはならないまで

も、ダメージが蓄積していく。互角に見えたが、徐々にアーブレリオナのほうがミラを押していく。

ミラはなんとか攻撃をしのいでいたが、洞窟の壁際まで追い詰められていった。だが、ミラは突き出された腕を左手でしっかりとつかんだ。

「これで、逃げられないな！」

剣を片手でアーブレリオナに向かって突き出す。しかし、それはかすただけに終わる。ミラはつかんでいた腕を放し、剣を両手で握りなおした。

「食らえ！」

刀身に炎が走り、長さが増した剣がアーブレリオナに襲いかかる。炎はアーブレリオナの左腕をとらえ、まるで猛獣のように食いついた。

「おのれ！」

アーブレリオナは慌てて左腕を引くが、生きているような炎は食らいついて離れない。それは腕だけでなく、胴体まで侵食しようとする。アーブレリオナは一瞬だけ間を置き、自分の右手でその左腕を切り落とした。

「そこまでやる？」

ミラはあきれたような表情を浮かべるが、アーブレリオナはにやりと笑う。

「体など、いくらでも代わりはある」

体に力が込められると、右腕が切れた部分から、筋肉質でグロテスクな腕が勢いよく生えた。タマキはそれを見て首をかしげる。

「気持ち悪い奴だな。まともじゃないぞあいつ」

「確かに、そうみたいです。いいんですか、姉さん一人に戦わせて」

「大丈夫だろ。ミラは強いよ」

「でも、あの状態だと負担が大きいんです」

「いざというときはすぐに乱入するさ」

二人が会話をしている間にも、アーブレリオナの変貌は続く。全身がグロテスクな腕と同じように筋肉質になり、その顔も魔物のような醜いものになった。

だが、ミラはそれに気圧されることなく、むしろ余裕とさえ見える表情になる。

「的がでかくてちょうどいいよ」

その言葉に反応するかのように、アーブレリオナは形容しがたい雄叫びをあげ、ミラに飛びかかった。ミラはジャンプすると、天井をかすめるようにしてそれを軽やかにかわす。

着地すると、すぐに振り返り剣を軽く一振りした。

「精霊の力よ！」

振られた剣の刀身に炎が走り、それはさらに風をまとうて激しく燃え盛る。ミラはそれを振りかざした。すると、炎は洞窟の天井まで届くほどの巨大さになった。

「すごいもんだ」

タマキはつぶやいて、自分とソラを守るために魔法の盾を展開した。

「必殺！ 精霊剣！」

巨大な炎が振り下ろされ、アーブレリオナを押し潰す。

「うおおおおおおおおお！」

ミラの叫びに呼応するように、アーブレリオナの体を炎が包み、風と共に恐ろしいほどの渦を作りだした。

数秒後、風と炎が一気に消えると、アーブレリオナの姿はそこになかった。ミラは大きく息を吐き出してから、その場に膝をついた。

「姉さん！ まだだ！」

膝をついたミラの背後の地面に穴が開き、そこからぼろぼろになったアーブレリオナが飛び出してきた。だが、そこに一枚のカードが飛来し、爆発してその勢いを弱める。

「しつこいと嫌われるぞ」

マントを闇に染めたタマキがミラとアーブレリオナの間に飛び込

み、そのマントをつかんだ。

「今度は手加減は無しだ！」

マントが手に巻きつき、タマキはそれを下からアーブレリオナに突き刺す。

「いくぜ」

タマキはニヤツと笑うと、そのまま上に跳んだ。アーブレリオナを串刺しにしたまま、洞窟の天井を突き抜け、全く勢いを殺さずに一気に地上までの分厚い大地を貫いた。

「弾ける！」

空に飛び出してから発したタマキは、一気に力を解放し、その衝撃でアーブレリオナの体は光になって消えた。

タマキは地面に降りると、空を見上げた。

「馬鹿な奴だ」

女王と王子

翌日、砦の中の会議室でエバンスとキアンの会談が開始された。

タマキは外を警戒しているのだからそこにはいない。代わりというわけではないが、そこにはミラとソラ、後はキアンが連れてきた数名がその場にいた全員だった。

「エバンス王子、いや、もう王と言ったほうがよろしいかな」

「今はまだ王子だ。キアン女王陛下」

「そうか」

それから二人の間にしばらく沈黙が流れる。それからエバンスはおもむろに口を開いた。

「さて、今回の会談はそちらからの申し入れによるものだが、どういうことが教えていただこうか」

「率直な男だな」

キアンは愉快そうに笑う。エバンスは特別表情を変えることはない。

「切れ者と名高い貴殿のことだ。我々がやったことは、すでに勇者から伝わっているのではないか？ うらやましいものだ、あのよな者を使えるとは」

「タマキは私が命令を出せるような相手ではない。しかし、彼は友人だ。頼みを聞くこともあれば、色々な話を聞くこともある」

「そういうことならば事情は知っていると理解していいのだな」

キアンの問いに、エバンスは首を横に振った。

「わかっていないことも多いが、さしあたってはそちらの話を聞かせてもらおう」

「それよりも、貴殿の望みを聞かせてもらおう」

「望み？ そうだな、あのエミという少女は元の世界に帰ることが望みだ。そして、タマキ達もそれを望んでいる。私もそれを望まない理由はないな」

「ほう、それは立派な心がけだ。さすが、約束された英君といったところか」

「何も約束されてなどいない。それに、タマキには借りしかない。それに、我が国にもすでに悪魔の手先が侵入し、昨日はここにも魔族が出現した。貴国が行ったことは、すでに大きな影響を及ぼし始めているということがわかりか？」

エバンスは相変わらず表情は変えないが、口調はいささか厳しいものになっていた。キアンも表情を厳しくする。

「それがわかっていいるから、こうして会談を申し込んだのだ」

「では、悪魔と手を切る、ということを決心したと、そういうことですな」

「ノーデルシア王国と手を組んだほうがいいだろう。貴国の力は私の想像よりもはるかに上のようなだからな」

「我々にはどんな利益があるのか。それを聞かせてもらいたい」

キアンはエバンスの問いに顔をしかめ、一瞬言葉に詰まった。

「客観的に見たら、貴国にそれほどメリットはないだろうな。だが、平和を奉じる貴国にとっては我が国とここで強いつながりを作るのは悪いことではないだろう」

「それであなたの野心が満たされるのかな？」

キアンはその問いに口元を歪める。

「野心とはどういうことかわからんな。ただ、ノーデルシア王国と手を結ぶことができれば、我が国を富ませることができるのは確かだろう」

「時間をかけて、信頼関係を築ければそれも可能でしょうな」

二人はそこでしばらく黙ったまま向かい合っていたが、エバンスはおもむろに立ち上がった。

「少し休憩にしましょうか」

「わかった」

キアンも立ち上がり、自分の配下と共に部屋から出て行った。それが済んでから、ミラとソラがエバンスの隣に歩み寄る。

「なんか嫌な感じのおばさんですね」

「姉さん、あの人はそんな年じゃなさそうだけど」

「そういう問題じゃなくて、雰囲気さが」

「まあそう言うなお前達」

エバンスは笑いながら二人を止める。

「あの女王は野心はありそうだし、油断ならない人物だが、それほど悪い人間でもないだろう」

「そういうものですかね」

ミラは納得していないようで、首をかしげていた。

「それで、どうするつもりなんですか？」

ソラが聞くと、エバンスは苦笑ともなんとも言えない笑みを浮かべる。

「彼らの協力が必要だ。エミを元の世界に戻すためにもな。それに、私の理想のためにもそうしなければならぬ」

その強い意志が宿る目を見て、ミラとソラは顔を見合わせると、同時にうなずいた。

「エバンス様の理想のためなら、私達も全力で協力します」

「ああ、期待している。それより、お前達は休めるうちに少しでも休んでおけ。昨日の件もあるし、これから何が起こるかはわからないのだから」

「それは大丈夫ですよ。むしろ昨日はいい準備運動になりましたから。それに、上からはタマキ師匠が見張ってるんですから心配いりませんよ」

「それもそうだな、引き続き頼むぞ。では、我々も少し休むか」

そうして三人が部屋から出ようとした時、外から叫び声のようなものが聞こえてきた。三人は顔を見合わせるとすぐにその方向に急いだ。

包囲

三人の目の前には、スライム状のもの達に囲まれたキアン達が目に入った。

「ハアッ！」

ミラは考えるよりも先に剣を抜いてそのスライムに切りかかった。一見柔らかそうだが、妙に手ごたえがあり、簡単には両断できず、ミラはとりあえず剣を引いた。

「こいつ結構固いよ！」

エバンスも剣を抜いて構える。

「ソラ！ 奴等を牽制するんだ」

「わかりました！ 風の精霊よ！」

キアン達の周囲を突風が吹き、スライムにはいくらかのダメージが与えられたようで、弾き飛ばされると囲みが解ける。

その隙にキアン達はスライムの包囲から脱出して、エバンス達のほうに走り寄る。

「あれは一体どういうことだ」

エバンスが聞くと、息を上がらせながらも、キアンはしつかりしとした様子で口を開く。

「あいつら、突然壁から現れたんだ。見たこともない魔物だが」

「そうか、とにかく今は避難だ。ミラ、ソラ、ここは頼むぞ」

エバンスとキアン達は急いで外に出て行った。残されたミラとソラはそれぞれの武器を構える。

「姉さん、あれは必要かい」

「この程度の相手なら大丈夫。あんたも攻撃に集中して」

「わかった。火と風の精霊よ！」

集中した炎がスライムの一体に襲いかかり、それを包み込んだ。数秒炎に巻かれると、スライムは蒸発したのか、跡形もなくなっている。

「そっちは効くんだ。じゃあ、頼むよソラ」

「了解」

そこからはミラが牽制し、ソラが止めを刺すということで順調にスライムを片付けていった。

一方その頃、外では砦を囲むように大量の魔物が発生していた。戦闘力ではタマキが圧倒していたが、さすがに相手の数が多すぎて、簡単に撃退するというわけにもいかないようだった。

タマキはある程度の魔物を撃退してから、砦の上空から周囲を見回した。

「全く、これだけの数をどっから連れてきたんだかな」

「どうやら、以前にあったあの歪み、転移門が使われているな」

「気づかなかったのか？」

「突然大量発生したのだ。気づいても対応はできん」

「で、これはやっぱりあの悪魔の仕業なんだろうな」

「そうだろうな。魔族程度にここまでのことはできんだろ」

「じゃあ、とりあえず魔物がある程度減らして、元を潰しにいかないと。お、あそこにエバンスがいるじゃないか」

タマキは砦に向かって降下し、外に出ていたエバンス達の前に降り立った。キアンやその護衛は驚いたようだったが、エバンスは全く動じない。

「全員無事か？」

タマキの質問にエバンスはうなずく。

「ああ、砦の中にも魔物らしきものが出てきたが、今はミラとソラが対応している。外の状況はどうなんだ？」

「もうこの周りは魔物だらけだよ。とりあえず食い止めてるけど、元を断たないと面倒くさいことになりそうだ」

「そうか。どれくらいかかりそうだ？」

「とにかく一個ずつ潰していくしかないから、それなりにかかるな。少し持ちこたえられるか」

「この砦を使えばある程度はできるだろう。だが、あまり長い時間

は無理だな」

「たぶんそれで十分だ。じゃ、これも使ってくれ」

タマキはカードホルダーをエバンスに手渡すと、上空に飛び上がっていった。エバンスはそれを見送ってから、キアンのほうを向く。「では、守備を固めましょうか。南北にわけて、それぞれ指揮をとることにすればいいでしょう」

「わかった。では南はそちらに任せよう」

「ご武運を祈る」

それから二人は襲撃に備え、南北に別れた。タマキはその様子を上空から確認して、一番近くの転移門に向かった。

そして、その真上に来ると、急降下してその勢いのまま足に魔力をまとわせると、一気にそれを周囲の魔物もろとも破壊した。

「まずは一つ、と。あと何個ありそうだな？」

「三十くらいはあるだろうな。放っておくと大きくなるかもしれないから急いだほうがいいぞ」

「そうだな、ちょっと力入れていくか」

タマキは全身に魔力を溢れさせると、次の転移門に向かって地面を蹴った。

そんな調子で、特別に手ごわい敵も出てこなかったので、数時間後には全ての転移門を閉じることができ、魔物もほとんど掃討できていた。

タマキは多少疲れた様子で砦に戻り、エバンスの近くに降りた。

それに気づいたミラとソラがすぐに駆け寄ってくる。

「師匠、終わったんですか？」

ミラの問いにタマキはうなずく。

「ああ、まあほとんど片付いたはずだ。こっちはほうは被害とかなかったか？」

「はい、僕達のほうも、ロベイル王国のほうも軽い怪我人くらいです」

「そりゃ上出来だ。回復させるから、怪我人のところに案内してく

れ」

「はい、わかりました。こっちです」

ソラがタマキを案内して、怪我人を収容している場所に向かった。二人を見送ったエバンスは兵士達を見回す。

「皆、今日はできるだけ休め、明日になったら残った魔物の掃討を開始する」

協定

翌日、魔物を掃討してから、エバンスとキアンは今度はテントの中で向かい合っていた。

「さて、これで選択の余地はなくなったと思いますが」

「しかし、今回のことが悪魔の仕業であるとは限らないだろう」

エバンスは厳しい表情で首を横に振る。

「これはタマキの意見だが、あれだけの規模で魔物呼び出せるものなど、悪魔以外にいない。そして、このようなことをする目的を持つ悪魔は、一体だけだ」

キアンはしばらく沈黙してから、ため息をついた。

「そうだな。我々の行動が完全に敵対するものとしてとらえられたのは間違いないだろう」

「では、正式に話を進めるということで、よろしいですな」

「ああ、すぐに始める必要があるそうだ」

二人は立ち上がり、手を伸ばして握手をした。

その後、自分のテントに戻ったエバンスはタマキと一緒にお茶を飲んでいた。ミラ達も離れた場所で二人の話を聞く姿勢になっている。

「うまくいったのかい？」

まずはタマキが口を開く。

「ああ、さすがに昨日の件ではつきりと決心がついたらしい」

「じゃあ、そろそろ俺のほうは本格的に悪魔を相手にしないとな。

あれを引き寄せるための餌も見つかったし」

「餌というのは、ジャドが持っているあれか」

「ああ。あれだけの規模で攻めてきたってことは、狙いはお前達だけってことでもなかったんだろ」

「そうだな。それで、これからどうするのだ？」

「俺はドラゴンオーブを持って、悪魔にちよっとしかけようと思っ

てるよ。今回の件でちよつとわかつたこともあつたし」

「敵の本拠地がわかつたのか？」

「本拠地は多分この世界じゃないだろうから、まあそれは無理だと思つけど。でもまあ、奴がしかけてくる場所は二箇所しかないから」

「エミとドラゴンオーブか。しかし、それなら一箇所に集めておくべきではないか？」

「いや、俺が一人でいたほうが、連中にとっては楽に見えるんじゃないかな。それにあの娘を連れまわすのはちよつときつそうだし、あんまり無関係の人間を巻き込む方向にもしたくないし」

「だが、一人で本当に大丈夫か？」

「さあな。向こうが本気できたらどうなるかはわからない。でも別になつておけば俺がやられたつてすぐに駄目つてことにはならないだろ」

「そんなことは言うな。危なくなつたらすぐ退くんぞ」

「もちろん簡単にはやられないさ。でもどうなるかはわからないから、そつちはそつちでしつかり頼むよ」

それを聞いてエバンスはため息をつく。

「わかつた。お前が決めたのなら、何を言つても無駄だろう」

だが、ミラは納得していないようで、勢いよく身を乗り出してきた。

「納得できません！ ただ待つてろつて言つんですか！？」

タマキはその勢いを制するように手を上げる。

「いやいや、相手がどつちにくるかかわからないし、そつちのほうは人手が必要なんだ。お前達がしつかりしてくれてれば、俺も安心して色々できるから」

「でも！」

「心配するな。何かあつたら必ず連絡をするから」

それを聞いたソラは不満そうな表情のミラの肩に手を置いた。

「姉さん、師匠には何か考えがあるんだよ。僕達は師匠の言つ通りにしたほうがいいと思うよ」

ミラは振り返り、ソラの胸元をつかんだ。だが、何を言うこともなく、数秒後にはその手を離れた。

「わかったよ」それからミラはタマキに向き直る。「タマキ師匠、おいしいところを独り占めしないでくださいよ」

「ああ、たぶんお前達にも働いてもらうことになるさ」

二人は顔を見合わせてにやりと笑った。そこにジャドが歩み寄り、袋を差し出した。

「ドラゴンオーブです。貴重なものなので、できれば無事で返してもらいたいところですが」

だが、ミラがそれを横から奪い取った。

「もったいぶらないでさっさと渡せっての。はい、タマキ師匠」

タマキはミラから袋を受け取り、ベルトにくくりつけた。

「まあ、できるだけ大事にするよ。無事に返すって保障はできないけど」

タマキは立ち上がり、手を軽く振った。

「じゃ、俺はもう行くよ。まあ女王様を送っていくくらいはするけど」

そうしてタマキがテントを出て行ってから、ミラはため息をついた。

「まったく、師匠は相変わらずで困っちゃうというか」

「姉さん。タマキ師匠の考えはいつも僕達の上をいつてるんだし、変な心配はしなくていいはずだよ。後でどういうことかは教えてくれるだろうし」

「まあ、それもそうか」

「そうだ。お前達、頼んだぞ」

うなずいたエバンスはどことなく楽しそうな雰囲気だった。

翌日、クラット砦からは兵士達の姿が消え、もとの寂れた場所に戻っていた。タマキはキアンの一行と一緒にロベイル王国に戻る途中だった。

「さて、これからだな」

「どうするつもりなのだ？」

タマキはサモンの質問に、かすかに笑みを浮かべる。

「見てればわかるさ。まあどうなるかは俺にもわからないけどな」

背負った力

時間は経過して数カ月後。ノーデルシア王国では目立った襲撃もなく、平和と言える時間が過ぎていた。

ロベイル王国とは正式に同盟が結ばれる流れになり、今はまだ本格的な交流はないが、徐々に公私両方の動きが出てきていた。

また、ヨウコは無事に子を産み、エバンスの戴冠式の準備も平行して行われていたが、エバンス本人の意向で今回の件が落ち着くまでは延長されることになる予定となった。

「それにしても、タマキ師匠からの連絡も全然ないし、何がどうなっただか」

ミラは自室でベッドに横になりながらぼやいていた。窓から外を見ていたソラも振り向いてそれにうなづく。

「カレン師匠もどこかに出かけてることが多いし、兄さんは閉じこもってばかりだし、本当にどうなってるんだらうね」

「全く、このままじゃ退屈で干からびそう。訓練場行ってこようかな」

「もう今日は決めたぶんはやったんだし、無理しないほうがいいよ。それより、そろそろミニックが戻ってくるらしいし、何か面白い話が聞けるかもよ」

「あー、私はパス。戻ってきたらあんたが相手しておいてよ」

「わかったよ。じゃあ、ちよつと散歩してくるから」

ソラが部屋を出て適当に歩いていると、廊下の向こうからカレンが歩いてきた。ソラは急いでそこに駆け寄る。

「カレン師匠、どこに行っていたんですか？」

「少し見回りですよ」

「タマキ師匠から連絡はあったりしたんですか？」

「いいえ、それはありません。しかし、魔物が妙に減っていますね。もしかしたら悪魔が動いている影響の可能性もあります」

「悪魔、つていうことはタマキ師匠は」

少し不安そうな表情になったソラだったが、カレンは特に表情を変えない。

「相手が相手ですから、タマキさんでも簡単にはいかないでしょう。慌てずに信じて待つべきですね。それより、城内のことは頼みますよ、私はこれからまた出かけますから」

「わかりました。気をつけてください」

「ええ、あなた達もできるだけエミ様の近くにいてください」

そう言つてカレンは足早に立ち去つていった。ソラは本当はもつと聞きたいこと、聞くべきことがあるはずだったが、なんとなくそれが許されそうな雰囲気でもなかった。それからソラはバーンズに会うために兵舎に足を向ける。

バーンズはちょうど兵士達の訓練を見ているところだった。ソラはとりあえず黙つてバーンズの隣に立つて訓練を見ることにする。しばらくすると、バーンズは訓練を中断させて、ソラのほうに向き直つた。

「今日はどうしたんだ？」

「いえ、ちよつと散歩してるだけですけど、さっきカレン師匠に会いました」

「カレン殿に？」

「はい。またすぐに出かけてしまいましたけど。魔物が妙に減っているということで、悪魔の影響かもしれないと言っていました」

「なるほど、カレン殿がそう言うのなら何かあるのだろうな。他には何かなかったのか？」

「できるだけエミさんの近くにいたいということでした」

「そうか。そういうことなら、他のことは我々に任せて、お前達はエミ殿の警護に集中してくれ」

「わかりました」

それからソラはバーンズと別れて、エミがいるはずのヨウコの部

屋に向かうことにした。警備の兵士に用件を告げて室内に入ると、ちょうどヨウコと恵美が向かい合って座り、お茶を飲んでいるところだった。

「いらつしゃい。どうしたの？」

ヨウコは笑顔でソラを迎えた。恵美も振り返って頭を軽く下げる。「先ほどカレン師匠に会ったのですけど、最近妙なことが起きているようなので、エミさんの近くにいろと言われたので」

「そうだったの。私も用心しないとね。じゃあ、ソラ君にはあの子のことを見ておいてもらおうかしら」

ヨウコはそれから振り返り、仕切りの向こうに向かって手を叩いた。すると、仕切りの向こうから一人の侍女が出てきて頭を下げた。「アランはどう？」

「今はお休みになっております」

それを聞いてヨウコはうなずくと、ソラのほうに再び顔を向けた。「ソラ君、しばらくの間、子守を頼まれてくれる？」

「はい、わかりました」

「あの子は精霊にも好かれているせいかな、あなたが近くにいると落ち着くみたいなのよ。恵美ちゃんは大体この部屋にいるし、日中はアランと一緒にいてくれればいいんだけど、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。夜は姉さんに来てもらうことにしましょう」

「それがいいわね。恵美ちゃんもいい？」

「はい。心強いです」

「それじゃ、早速今からお願いな」

ソラはうなずいて仕切りの向こうに行き、赤ん坊、アランが寝ているベッドを覗き込んだ。

親から受け継いだのか、水と大地の精霊の加護を受けた子ども。王族ということに加え、自分と同じように二種の精霊の力を使えるということを見ると、かなり大きなものを背負うのだろうということは予想ができた。

そこまで考えて、ソラは手を伸ばしてその額に軽く触れる。立場

も何もかも違いますが、なんとなく自分にとって近い存在のような気がした。

変わった客

数日の間、ミラとソラは交代でヨウコの部屋に入り浸っていた。ソラは大体子守、ミラはできるだけ恵美を無理矢理起こしておいておしゃべりをしていた。

そしてある日、ソラがアランのベッドの隣の椅子に座っているといきなり背後に気配を感じて立ち上がり、振り返った。

「やあ、初めまして」

ソラの視線の先には、見たことのない長髪の男が立っていた。

「あなたは？」

ソラは警戒しながら、いつでも精霊の力を使えるようにしていた。男はそれに気がついていているようで、笑顔を浮かべて手を広げる。

「別にそう警戒しなくてもいいよ。僕はファスマイド、聞いてないかな？」

ファスマイド。ソラはその名前はカレンから聞いていた。敵かどうかはわからないが、油断のできない存在。

だが、警戒を解かないソラとは逆に、ファスマイドはリラックスした感じで部屋の中を見回す。

「なかなかいい部屋だね。まあ、そんなことはおいといて、僕は君達に協力しに来たんだよ。だからちょっと力を抜いてもらえると嬉しいね」

その会話に気づき、恵美が仕切りの向こうから顔を出す。ファスマイドの姿を確認すると、表情を固くして息を呑んだ。ファスマイドはそちらにも笑顔を向ける。

「やあ、久しぶり。どうやら元気になっていたようだね」

「え、ええ、はい」

恵美は戸惑ったようにぎこちなく返事をするだけだった。

「どうしたの？」

さらにそこにヨウコが顔を出し、ファスマイドの姿を見ると、軽

く首をかしげた。

「どちらさま？」

「これはお初にお目にかかります。ノーデルシア王国王子妃殿下」
ファスマイドはうやうやしく頭を下げた。ヨウコはそれに特に反応せず微笑を浮かべると、一同を見回した。

「お客様なら立ち話というわけにもいかないから、こちらにどうぞ」
ヨウコはそう言うのと仕切りの向こうに姿を消した。ファスマイドは感心したような様子でうなずき、その後が続く。ソラと恵美も顔を見合わせてから、少し遅れて続いた。

「さあどうぞ、お客様」

ヨウコは自らの手で入れたお茶をファスマイドの前に置いた。

「ではご馳走になりますよ」

ファスマイドはお茶を口にしてから、ヨウコのことじつと見た。

「さすがに落ち着いてらっしゃる」

「そう、ありがとう。あなたのことはカレンや恵美ちゃんから聞いてたけど、思ったよりも来るのが遅かったのね、ファスマイドさん」
「僕の名前をご存知とは嬉しいですね」

「こういう立場になると人の名前を覚えるのは得意になるの。それより、もっと気楽にしてもらっていいのよ」

そう言われてファスマイドはにやりと笑う。

「それはありがたい。僕はあまり堅苦しいのは好きじゃないんでね」
「それで、あなたはロベイル王国にいるはずだったと思うけど、向こうはいいの？」

「あつちはまだ安全になってるよ。そういうわけでタマキ君との約束も果たしたことだし、まあこっちのほうが面白そうだからね」

「つまり、あなたの考えでは近いうちに何かが起こると、そういうこと」

「まあ、そういうことだね。タマキ君がどこに行ったかわからないっていうのもあるし。僕が見つけれないんじゃないやあいつらも見失ってるだろうから、次に何かあるならここしかないというわけだよ」

「ちょっと待ってください。あなたは協力しにきたんですか？ それとも、ただの見物ですか？」

ソラが口をはさむと、ファスマイドは軽く首をかしげる。

「まあ見物だけにしたいんだけどね。場合によっては多少手を貸してもいいけど」

「手を貸すって、あなたに何ができるんです？」

「ああ、そういうことなら少し教えられることがあるよ、例えば結界術とかね。君は才能がありそうだから、やってみるかい？」

「結界術？」

ソラは言葉に詰まったが、ヨウコはソラに笑顔を向ける。

「いいんじゃないの、教えてもらえば」

「でも、今はこっちのこともありますから」

ソラが手を横に振って断ろうとしたのをヨウコは遮った。

「気分転換は必要でしょ。それに、別にこの部屋でもできるかもしれないじゃないの」

ファスマイドはヨウコの言葉に我が意を得たりとうなずいた。

「そう、その通り。別に座ったままだつてできるものはあるさ。それに、覚えておけばかならず役に立つと思うよ」

そう言われて、ソラは少し考えるようにしてからうなずいた。

「わかりました。そういうことなら教えてもらいます」

ファスマイドはその返事に満足そうな表情を浮かべる。

「決まりだね。じゃあ、君の姉上にも挨拶をさせておいてもらおうかな」

「ここで待っていればそのうち姉さんは来ます。血の気が多い人ですから、おかしなまねはしないほうがいいですよ」

「ご忠告ありがとうございます」

ファスマイドはそう言ってからお茶を一気に飲み干し、立ち上がる。

「じゃ、護衛に励もうじゃないか」

師弟関係

翌朝、ソラは機嫌の悪そうなミラに起こされた。

「たくつ、あの男は何者なんだっての」

「いや、カレン師匠が言ってたじゃないか」

「そういう問題じゃなくてさ、あの態度がむかつく」

ソラはその反応を見てため息をつく。

「まあまあ、僕はあの人から結界術を教わることになったし、きつと力になってくれると思うよ」

「そう思うなら勝手にやっとして、私は遠慮するから。じゃ、お休み」

それだけ言うとミラは自分の部屋に戻っていった。ソラはそれを見送ってからヨウコの部屋に向かう。部屋に入ってみると、ヨウコだけが起きていて、恵美はまだ寝ているようだった。ファスマイドの姿は見えない。

「おはようございます」

「おはよう。恵美ちゃんはまだ寝てるわよ」

「姉さんに夜遅くまで付き合わされたんでしょうか？」

「そうみたいね。ミラちゃんはなんだかいらいらしてたようだったし」

ヨウコは声を出さずに笑った。

「ファスマイド君はどこかにいってしまったようだけど、そのうち現れるでしょ。それまでゆっくりしていればいいんじゃない？」

「わかりました」

ソラはそれからアランのベッドの隣にいつて、いつものように椅子に座ってアランを見守った。今は後ろで恵美も寝ている。

しばらくそうしていると、ファスマイドが普通にドアから入ってきて、ソラの隣に椅子を持ってきて座った。

「人間の子どもというのはよく寝るね」

「それだけじゃありませんけど。特にこの子は特別です」

「ま、そういうことなら君のほうがよくわかるか。僕は精霊っていうのはよくわからないからね。ま、それよりも早速結界術について教えてあげようか」

「座ったままでいいんですか？」

「ああ、かまわないよ。さて、結界術っていうのは基本的には魔力を使うものだけど、まあ精霊の力でも問題ないね。得意なほうを選べばいいよ」

そこでファスマイドは立ち上がり、その場でぐるぐる歩き出す。

「そうは言っても、これは簡単なものじゃない。簡単だったら、一応資料も残ってるんだし、誰もが使うはずだからね。ところが、僕の知る限り、現在これをちゃんと使える人間はいない。例えば」

ファスマイドは自分の目の前で指を素早く動かした。それから口を動かしたが、ソラには何も聞こえない。それからファスマイドはまた指を動かして口を開く。

「今のは簡易な結界だよ。まあ空中に作るのはちょっと難しいんだけどね」

「どうやってたんですか？」

「結界というのは、特定の位置に魔力なりなんりの力を置いて、壁や盾のようなものを作り出すものでね。この城みたいに城の構造そのものを使って結界を作ったりするものもあるけど、まあ原理は同じだよ」

そこでファスマイドは一枚のたたんだ布を取り出して、それを自分が座っていた椅子の上に広げた。さらに、その上に小さな駒のようなものをいくつか置く。

「これだけあれば地面を使った結界の練習はできるから、やってみようか。まずはお手本と」

ファスマイドはまず駒を一つ中心に置き、その周囲にほかの駒をゆっくり配置していった。そして、並べ終わると指を一つ鳴らす。すると、中心に置かれた駒が消えた。

「これは一種の壁を中心に作り出すものだよ。駒を並べるだけで簡単だからやってごらん」

ファスマイドは配置した駒を崩してから、それをソラに手渡す。ソラはファスマイドがやった通りに駒を並べてみた。

「じゃ、駒に魔力でもなんでもいいから力を込めてみなよ」

「こうですかね」

ソラは風の精霊の力を使って、わずかな力を並べた駒に力を注いだ。だが、何も起こらない。

「ずれてるね。その手前の駒を少しだけ前に動かして、その隣はもう少し右側だよ」

ファスマイドの指示通りソラは駒を動かす。それからもう一度精霊の力を注ぐと、今度は中心の駒が消えた。それと同時に拍手の音が響く。

「さすがだね。今のが基本で、あとは目的に合わせて色々なやりかたがあるわけだけど、まあ君なら空中に力を配置するやりかたもすぐに覚えられるだろうね。とりあえず、これが完璧に、できるだけすばやくできるまで練習だ」

「わかりました」

ソラは素直にうなずくと、駒を崩して最初からやり直し始めた。そのままソラは、たまにアランの様子を確認しながら練習を続けていると、いつの間にかファスマイドは姿を消し、恵美がソラの手元を見ていた。

「それはなんなの？」

「おはようございます。これは結界術っていうものの練習ですよ」

「結界術？」

「色々便利なものらしいですよ。中々難しそうですね」

そこでソラは立ち上がって体を伸ばした。

「それより、姉さんが夜遅くまでつき合わせてるみたいですけど、大丈夫ですか？」

「ううん、大丈夫」

「それなら良かったです」

「じゃあ、私は朝食に行ってきます」

「はい。気をつけて」

脅威の影

数日後、部屋の全員が寝た後で、ミラは立ち上がって窓から外を見ていた。幸い今日はファスマイドが姿を見せないで、ミラの機嫌は悪くなかった。

しばらく外を見てから室内に戻ると、力を抜いてそれを構えた。それからゆっくりと形の動作を始める。

集中していたので、どれくらいの時間が経ったかわからなかったが、ミラがおかしな雰囲気を感じると同時に、何かが窓から飛び込んでこようとした。だが、それはヨウコの力によって強化された窓に弾かれた。

ミラはすぐに窓に駆け寄り外を確認した。だが、何が飛んできたのかはわからない。とりあえずミラは恵美とヨウコを起こすことにした。

「何があつたの？」

ヨウコはアランを抱いてミラに尋ねる。

「何かが飛んできたみたいなんですが、窓を破れなかったようで、弾かれたみたいですよ」

「そうなの。土の精霊の力で弾かれたということは、大したもののが来たわけではないのね」

「でも、油断はできませんよ」

「それもそうね」

ヨウコはうなずいてから、恵美にアランを預けた。

「下手に動くよりも、ここで守りを固めたほうがよさそうだから、二人とも少し待ってて」

そう言つてヨウコは部屋を出ていった。残されたミラはとりあえずアランを抱えた恵美をベッドに座らせ、自分はその前に立った。

しばらくして、バーンズと兵士二人を伴つてヨウコが戻ってきた。「お待たせ。これでミラちゃんは恵美ちゃんを守るのに集中できる

わね。じゃあ、三人とも、窓のほうはよろしくね」

「わかりました」

バーンズはそう言ってから兵士二名を窓の脇に立たせ、自分は窓の正面に陣取った。そして剣を抜いてカードをそのスロットに入れた。

だが、結局その後は何も起こらなかった。とりあえずその場は兵士に任せ、ミラが自分の部屋に戻ってみると、朝食を食べているソラとカレンがそこにいた。

「あれ、いつ戻ってきたんですか？」

ミラはそう言いながら、空いてる椅子に座った。

「ついさっきですよ」

「それより、昨夜はなんかが来て大変だったんですよ。まあ実害はなかったんですけど」

「そのことなら先ほど聞きました。話を聞く限り、偵察かもしれないですね」

「じゃあ、近いうちに本格的に攻めてくるってことですか？」

「その可能性はありますね。魔物の数は減っていますが、転移門を使えばそれも問題ではありませんし、備えは必要ですね」

「それなら、カレン師匠もここに残ってくれるんですか？」

ソラの質問に、カレンは首を横に振った。

「いえ、こちらはあなた達に任せます」

それだけ言うと、カレンは立ち上がった。ミラもすぐに立ち上がり、その行く手を遮るようにする。

「ちょっと待ってください。そろそろ何をやってるのか教えてくれないじゃないですか？」

「大したことではありません。少し広範囲に警戒をしているだけですよ」

「それなら一人でやらなくてもいいじゃないですか」

「ここの守りを少しでもおろそかにするわけにはいきません。私ならばすぐに戻ってくることができますから、心配いりませんよ」

カレンはミラの肩を軽く叩くと、返事は待たずにさっさと出て行ってしまった。ミラはその後を追おうとしたが、ソラに止められる。「姉さん、僕達はここでできることをやろう。それに徹夜の後なんだし、今は休んだほうがいいよ」

「ああ、それもそうか」

ミラは頭を押さえてベッドに向かった。

「それじゃ、僕はいつてくるから。おやすみ」

「はいはい、おやすみ」

それからソラが部屋を出ると、ドアの脇にファスマイドが立っていた。

「やあおはよう」

軽い挨拶をするファスマイドに、ソラは立ち止まった。

「朝からどうしたんですか？」

「いや、まあ歩きながら話そうか」

二人は並んでゆっくりと歩き出した。

「ところで、夜になにかあったらしいね。せっかいいい機会だから、結界を使ってみないかい？」

「結界ですか」

「そう、あの部屋はすでに精霊の力で守られているようだけど、結界を使えばそれを二重にできるからね」

「確かにそれはよさそうな考えですね。でも、僕はまだあの小さな基本しかできませんよ」

「大丈夫さ、あの部屋の窓一面にやるだけだから、そんなに難しくはないよ」

話しているうちに二人はヨウコの部屋に到着した。そして、ちょうどいいタイミングで中からバーンズが出てくる。

「ソラか。変わったことはないが、何が起こるかわからない。注意してくれ」

バーンズはソラにそう言うってから、ファスマイドに鋭い視線を向けた。

「おかしな真似はしないでもらおう」

「いやいや、そんなことはしませんよ。その剣で切られちゃたまらないし」

「それならかまわない」

バーンズはその場から去り、それを見送ったソラとファスマイドはヨウコの部屋に入った。

一人でやること

カレンは城を出ると、町を出る方向に向かった。今は町は平和で変わった様子はなく、寄り道をすることもなく素早く町を抜けた。到着したのは、町から離れた人気のない小さな林の中。そこで立ち止まったカレンは空を見上げた姿勢で待った。

数分後、上空から黒く小さな鳥が舞い降りてきて、カレンが差し出した手にとまった。それと同時に鳥は一通の手紙に姿を変える。カレンはその手紙を開いて一読すると、すぐに力を込めてそれを燃やしてしまった。そして、その場をすぐに離れた。

そしてカレンが向かった先は、かつてタマキと共に闇王と戦った草原だった。戦いがあつてから時間も経っていたが、今でも戦闘の跡は残り、近づく者はほとんどいない場所だった。

その中心あたりまで到着すると、カレンは剣を抜いて地面に突き刺した。すると地面が陥没するようにして、ちょうど人間二人分くらいの穴が現れた。カレンは躊躇せずにその穴の中に飛び込んでいった。

地下はけっこう大きく、人間が立つて歩くには十分なスペースがあった。カレンは抜いた剣に炎をまとわせると、その明かりを頼りに足を進める。そして突き当たりまで来ると、剣を地面に挿して手を離し、壁に寄りかかった。

一方その頃、ソラはファスマイドの見ている前で壁に結界のための印をつけていた。窓一面だけでもソラだけではどうすればいいのかわからないので、作業は中々進まない。

「いや、そこじゃないよ。ああ、そこも違うね」

ファスマイドの言葉に従い、ソラは結界を張るためのポイントを修正していく。

「今回は、まず持続時間だね。まあ窓自体を隠す必要はないし、ここはすでに精霊の力で強化されてるから、強度も大して必要じゃな

い。だからまあ、これでも簡単なほうだね」

「これで簡単なんですか」

「壁に印をつけてできるんだから簡単なんだよ。空中じゃそんなことはできないんだからね。ああ、そこはもつと上だよ」

「はい」

ファスマイドにいちいち直されながらも、ソラは結界の準備を進めた。ヨウコは後ろからそれを眺めながら、感心したような顔をしている。ヨウコはそれからおもむろに立ち上がり、ファスマイドの隣に立った。

「ずいぶん人に教えるのがうまいのね」

「まあ、これでも自分で一からじっくり覚えたからね。それに別に教えるのは始めてってわけじゃないし」

「ふうん、そうなの。あなたからは色々話を聞きたいところね」

「それは勘弁してもらいたいね」

「そう。それは残念ね」

それだけ言ってヨウコは自分の椅子に戻った。ファスマイドはそれに軽く頭を下げてから、再びソラの結界作成の指導に戻った。

そして、その頃カレンの目の前には空間の歪みが現れてきていた。カレンはそれを確認すると剣を地面から引き抜いて、歪みから二歩ほど離れた。

数十秒後、その歪みから何かの手のようなものが出てきた。明らかに人間のものではない太く鋭い爪を持ったものだったが、カレンは特に剣を構えることもなく、ただその様子を見ている。

手が出てきた後は腕が出現し始めた。普通の人間の三倍はある腕がカレンの側まで伸びる。カレンはそこでその腕を抱えると、髪の毛と瞳を白銀に染め、上に飛び上がった。

一気に地面を突き破り、上空に舞い上がったカレンは引きずり出したものを地面に向けて叩きつけた。そして自分はそれから少し離れた場所に柔らかく着地した。

カレンは引きずり出したものをじっくりと観察する。それは強靱

な肉体を持ち、一見したところオーガのようにも見えるが、明らかにるかに危険な存在なのは明白だった。

その存在は手を地面について体勢を立て直すと、そのままよつんばいで真つ赤な目をカレンに向ける。それでもカレンは剣を構えず、力を抜いた状態でそれを見ている。

次の瞬間、魔物の体はカレンに向かって放たれた。その勢いはおそらく城壁をも粉碎するような威力だったが、カレンは地面を蹴って簡単にその突進を飛び越える。

魔物は地面を大きく削って勢いを殺すと、振り返り再びよつんばいになる。しかし、いつの間にか距離を詰めていたカレンがその腕に剣を振るう。腕は切り裂かれたが、瞬く間に再生しカレンを殴り飛ばそうと振るわれる。

カレンは体をひねってそれを剣で受け止めたが、その体は大きく弾き飛ばされる。だが、地面を転がるようなことはなく、足から着地して体勢を崩さなかった。

「大体わかりました」

小声でそうつぶやくと、カレンは剣を白銀の輝きに変えた。魔物は再び突進してきたが、カレンが剣を振ると、それは真つ二つになってその背後に転がった。両断されても魔物の体は蠢いていたが、カレンがその二つに向かって剣を連続で振ると、剣の輝きが刃のよな形状になりそれに襲いかかった。

光の刃が命中すると、魔物の体は消滅していき、後に残るものは何もなかった。

それを確認したカレンは自分が開けた穴に近づくと、そこから地下の歪みに向けてもう一度光の刃を放った。

明かされたこと

城に戻ったカレンは、まずヨウコの部屋に向かった。カレンが室内に入ると、ヨウコは待つていたかのように立ち上がって迎える。

「おかえりなさい。今日はどうしたの？」

「はい。エバンス様にお話したいことがあるのですが」

「じゃあ、ここに呼ぶ？」

「そうしていただけるのなら、お願いします」

ヨウコはうなずいて立ち上がった。

「少し待つてて」

ヨウコが室内から出て行くと、奥でソラと話をしていたファスマイドがカレンに近寄ってきた。

「さすがだね、王子妃様をそんな風に使うなんて」

「ヨウコ様にやっていただいたほうが角が立ちませんから。それに、この部屋のほうが都合がいいので」

「なるほどね」

カレンはそれに軽くうなずいてから、ソラに顔を向ける。

「ソラ、ミラとバーンズ様をここに呼んできてもらえますか」

「わかりました」

それからしばらくして、その部屋にはエバンス、ヨウコ、バーンズ、ミラ、ソラ、ジャド、恵美、ファスマイド、そしてカレンが集まっていた。

椅子に座ったエバンスがまず口を開いた。

「カレン、話を聞かせてもらおうと言いたところだが、その男にも聞かせてよいのか？」

「どうせここにいないくてもどこかで聞いているでしょうから、気にしても仕方がないと思います。それに、今まで特に邪魔をするようなこともしていません」

ファスマイドはそれを聞いてにやりと笑う。エバンスはそれをち

らつと見た。

「そうか、お前がそう言うならかまわない。話を始めてくれ」

「私は最近タマキさんから連絡を受けて動いていたのですが、先ほど少々厄介なことがわかりました。どうやらここに魔物が送り込まれるような計画があるようなのですが、問題はその魔物の力です」

「強力な魔物なのか」

「はい。一体倒してきましたが、普通の魔物とは比べ物になりません。ミラ達やバーンズ様ならば十分に対応できるでしょうが、普通の兵士ではかなりの数を揃える必要があります。あれが大量に襲ってきたら対応は難しくなりなるでしょう」

「エバンスはバーンズに視線を向け答えをうながす。それを受けてバーンズは口を開く。」

「カレン殿がそう言うのなら、間違いないでしょう。そうになると我々としては、こことは違う場所で迎え撃つか、それともこちらから攻めて各個撃破を狙うかでしょうか」

「そうだな。その両方を組み合わせて対応するのがいいだろう」

「そこでミラが胸を張って立ち上がる。」

「そういうことなら、攻撃は私が！」

だが、カレンは首を横に振る。

「いえ、それよりも悪魔を引きずり出さなくてはいけません。そのためにはある程度相手の戦力を揃えさせておく必要もあります」

「でも、それまで相手を放っておくんですか？」

「もちろんそれはしません、私がある程度は数を抑えるようにします。今までもタマキさんと連絡を取ってやっていましたから」

「まったく、そんなことを秘密にしていたなんて」

ミラは不満気にそうつぶやいたが、カレンはそれに軽く微笑む。

「あなた達にはエミ様を守って欲しかったんです。それに、悪魔を引き出すためには、エミ様にも協力していただかなくてはいけません」

「それは恵美ちゃんをおとりにするっていうこと？」

ヨウコは心なしに厳しい表情になっているように見えた。カレンは動じることなくうなづく。

「危険はありますが、今のようには予想できない状況よりも対処はしやすいと思います。それにその状況を乗り越えられれば、もしかしたらエミ様が帰る手立ても見つかるかもしれません」

「それはタマキ君がそう言ってるのね」

「はい」

カレンがヨウコにした返事に、恵美は身を乗り出し、ファスマイドはかすかに眉を動かした。

「具体的な方法はわかるのか？」

エバンスが聞くが、カレンは首を横に振る。

「いえ、それは聞いていません。ですが、タマキさんには何か確信があるようです」

その言葉にその場は少しの間沈黙する。そして、その沈黙を破ったのはエバンスだった。

「できればタマキから直接話を聞きたいところだが、そうできない理由があるのだろう。危険な手段はあまりとりたくないが、カレンの言うようにするのが、結果的には一番いいのかもしれない」

エバンスが一同を見回すとソラが手を上げる。

「カレン師匠に聞きたいのですが、時間はどれくらいあるのでしょうか？」

「断言はできませんが、それほど時間はないでしょう。その時がくれば、私が連絡をします」

それからカレンは立ち上がる。

「では、申し訳ありませんが私は準備に戻ります」

「わかった、頼んだぞ」

エバンスがうなづく、カレンは一礼すると部屋を出て行った。それからエバンスは部屋にいる者達に向かい口を開く。

「聞いての通り、近いうちに激しい戦いがあるだろう。各々、戦いに備え、自分のやるべきことをしっかりと見極めて欲しい。私から

はそれだけだ」

決戦の場？

カレンの話から数日後、バーンズは数名の兵士を伴って町の外に出ていた。今のところ特に変わったことはなく、平和であることが確認できているだけだった。

それからしばらく歩き、駐在所の近くまで来ると、一人の兵士が走ってきてバーンズの前でひざまずいた。

「なにがあつたのだ？」

「はっ！ 近くの村の者から魔物が出現したという報告を受けまして、今報告に上がるうとしていたところです」

「魔物か。すぐに案内してくれ」

「了解しました！」

それからバーンズ一行は駐在の兵士一人と村人一人を加え、魔物が出現したという場所に向かう。到着したのは草原を見渡せる小高い丘。村人がそこから小さな藪を指差す。

「若い者があのあたりで魔物を見たっていうんです」

今は魔物の姿は見えなかったが、バーンズは剣を抜いて振り返った。

「全員散開して魔物の搜索にあたれ。魔物を発見したら交戦せずすぐに報告するように。くれぐれも一人で戦おうとするな、わかつたな」

「了解！」

兵士達は勢いよく返事をして散っていった。バーンズも用心深く足を進める。搜索が数十分経った頃、突然叫び声がして一人の兵士が藪の中から吹っ飛ばされた。

バーンズはすぐにそこに向かって走る。その間に魔物が藪の中から姿を現した。それはカレンが戦ったものと同じ魔物で、初めて見るバーンズも、すぐにその危険性が理解できた。

「全員下がれ！」

叫びながらバーンズは剣のスペルカードを入れ替え、その力を発動させる。

「アイスソード！」

連続で振られた剣から氷の刃が飛び、魔物に直撃する。だが、よめる程度で大きなダメージは与えられない。しかし、それで作られた隙について、バーンズは倒れた兵士と魔物の間に駆け込む。

「動けるか！」

「は、はい」

「ここは私に任せて、他に魔物がいないか警戒をしる！」

返事は聞かずに、バーンズは魔物と一対一で対峙する。魔物は姿勢を低くし、次の瞬間にはバーンズに向かって飛びかかってきた。

バーンズはそれを横に転がってかわすと、すぐに膝について体制を立て直すと剣のカードを入れ替える。そこに最初の突進よりは勢いが落ちるが、十分な速度で魔物が突っ込んでくる。

それを十分にひきつけてから、バーンズは剣を跳ね上げる。同時に大きな爆発が起こり、魔物の

巨体を跳ね返した。バーンズはそれから立ち上がると前に走り出す。魔物はなんとか立ち上がり、バーンズを迎え撃とうと腕を振り上げる。そしてそれが振り下ろされるが、バーンズはそれに向けて剣を叩き込む。

腕と剣が接触すると同時に爆発が起こり、魔物の腕が吹き飛ぶとその巨体がよろめく。バーンズはそこで素早くカードを入れ替えた。「止めた！ トルネードスラッシュ！」

剣が竜巻状の風をまとい、それが振るわれると魔物に向かって凄まじい竜巻が襲いかかった。魔物は空中に巻き上げられると同時に、風の力で体中を切り裂かれる。バーンズが剣を振り下ろすと、勢いよく魔物は地面に叩きつけられ、動かなくなった。

結局、現れた魔物はその一体だけで、バーンズ達は魔物の死体を運ぶ準備をしていた。すると、そこにカレンがどこからともなく、ふらつと現れた。

「これはカレン殿、どうされたのです？」

「こちらで妙な気配を感じて来たのですが、私は遅かったようですね。それに、魔物の体を手に入れるとは、さすがですね」

「いえ、運が良かったのですよ。それでも一人負傷者がでてしまいました。それよりカレン殿、手が空いているならば、手伝っていただけますか」

「はい。ところで、バーンズ様はここをどう思われますか？ この近くには転移門もないようですし、魔物を迎撃するにはいい場所かもしれません」

「しかし、ここは村が近すぎます。何か手立てを講じないことには」
「その通りですが、魔物がここに現れたということは、おそらくこの場所には何かがあるのではないでしょうか。それならば、どちらにせよここには魔物が集まる可能性があります」

「なるほど。そういうことなら、いつそこを戦場にしてしまうべきかもしれませんね」

カレンはバーンズの言葉にうなづく。

「では、この死体を運んでから詳しい話をつめることにしましょう」
それからカレンも手伝いをして、近くの村から持ってきた荷台に魔物の死体をくくりつけると、交代でそれを引いて城への道に戻り始めた。

しかし、その途中でカレンは突然足を止める。バーンズもそれに気づいて立ち止まる。

「どうしました？」

「どうやら、また魔物が現れたようです。すみませんが、行かねばなりません」

「了解しました。迎撃地点のことに關しては、私からエバンス様に申し上げておきます」

それからカレンはバーンズの一行と別れた。

戦いの始まり

バーンズがエバンスに上申したことは認められ、あの丘の近くの村はすぐに避難の準備が始められた。さらに、その周囲には簡易的なバリケードがすぐに作られ始めた。そしてその中心には、小さな砦とも言えそうな、いかにも頑丈そうな家があったという間に建てられた。

そこには家財道具やらなにやらが運び込まれ、恵美がミラとソラと一緒にそこに住み込むことになった。危険な囷としての役割だったが、恵美は自らの意志でそれをこなすことを了承したのだった。

ミラは早速室内を見て回って、色々チェックしていた。ソラは結界を張るべき場所を探し、恵美はなんとなくベッドを整えていた。一通りのことが終わると、三人は集まって座り、恵美が準備したお茶を飲んでいた。

「ざっと見たところ、不具合はないみたい。こんだけ短期間でよくこんなもん作れたね」

まずミラが感心したように言い、ソラはそれにうなずく。

「ヨウコさんが土の精霊の力を使って作ったんだからね。見た目よりもずっと頑丈で頼りになるよ」

「それもそうか。ま、そういうことなら本格的に攻められなきゃのんびりできそうじゃない。それじゃエミ、なんかゲームでもしよう」

ミラはカードをテーブルの上に置いた。それから三人で簡単なカードゲームをして時間をつぶし始めた。結局その日は何も起こらず、夜はミラとソラが交代で警戒をした。

翌朝、目を覚ました恵美の目の前には椅子で寝ているミラの姿があった。恵美は起き上がると、ミラの肩に手を置いて声をかける。

「ミラ、ミラ」

ミラはその声に反応してゆっくり目を開けて恵美の顔を見た。

「ああ、エミおはよう」

「眠そうだけど、大丈夫？」

「平気平気。ちょっとさっきまで起きてただけだから」

「ごめん。それじゃ、起こしたのはまずかったかな」

「まあ朝食済ませてから軽く寝させてもらっよ」

それから恵美とミラは居間に向かう。そこではソラが朝食の準備をしていた。

「二人ともおはよう」

「はいはい、おはよう」

ミラは頭をかきながら椅子に座る。

「ところで、何も変わったことはなかったの？」

「何もなかったよ」

「何もねえ。早いとこ来てくれたほうが楽でいいけど、できれば昼に」

「それもそうだね。はいどうぞ」

ソラはそう言いながら、朝食の配膳を終えた。そしてそれを食べ始めてすぐ、ドアをノックする音が響いた。

「緊急事態です！」

ミラがため息をついてからその対応に出て、すぐに戻ってきた。

「魔物が出たみたいだから、あんたちよつと行ってきて」

ソラはうなずくと立ち上がった。

「じゃあ、姉さんはこっちをよろしく」

「わかってるって、早く行ってきな」

「気をつけて」

ソラは二人に見送られて外に出て行った。ミラは急いで朝食を詰め込むと立ち上がった。

「それじゃ、こっちも備えておかないとね。さ、早いところ食べて」

ミラはそう言ったが、恵美は急な事態に食欲が無くなってしまったようだった。そういうわけで、食事はそのまま寝室に持ち込み、二人はそこに立てこもることになった。

外に出たソラは兵士に連れられて魔物が出たという地点まで急いだ。現地に着いてみると、そこには数名の兵士とが一体の魔物を必死に食い止めている情景があった。

「炎よ！」

ソラは駆け出しながら、魔物の前に炎の壁を作り出した。魔物は炎に遮られその動きを止める。ソラはその間に兵士と魔物の間に割って入った。

「魔物はこの一体だけですか！」

「いえ！ あと二体いましたが取り逃がしました！」

「それなら早く倒さないと駄目ですね」

ソラは杖を構え、その先に炎を集中させる。変わりに炎の壁の勢いが弱まり、魔物はそれを一気に乗り越えてくる。

だが、ソラは動じずにそれを引きつけると、杖の先端を魔物に向け爆発的に炎を噴出させる。魔物の巨体はその爆発に跳ね返された。今度は指先に風の精霊の力を凝縮させ、魔物の頭に狙いを定める。

「風よ！」

凝縮された風が弾丸のように魔物の頭を正確に撃ち抜いた。魔物は踏ん張ることもなく、爆発に押された勢いのまま後方に倒れ、動かなくなった。

ソラは魔物に止めをさしたのを確認すると、すぐに兵士達のほうに振り返った。

「すぐに残りの魔物を追いましょーう」

「はっ！」

兵士達は勢いよく返事をし、歩き出したソラの後に続いた。しかし、数歩もいかないうちに禍々しい咆哮が一行の背後から響いた。振り返ると、数百メートル先には魔物が十体ほど、忽然と姿を現していた。ソラは驚きながらも前に出て杖を構える。

「すぐに増援を呼んでください。ここは僕がなんとかします！」
「了解しました！ ご無事で！」

兵士達が走っていくのを背中で感じながら、ソラは魔物達をじっ

と見据えた。

異常な魔物達

ソラが魔物との戦いを開始した頃、別の場所でも一つの小隊が魔物と遭遇していた。

「ファイアボール！」

火の玉が魔物の脇腹に直撃し、体をぐらつかせる。だが、魔物はすぐに立ち直ると雄叫びを上げると、脇腹の傷もあったという間に塞がっていく。

「クソッ！　なんて奴だ！」

魔法を使った兵士は悪態をついて剣と盾を構える。だが、小隊の中で隊長と思われる女性がそれを抑えるように一歩前に出る。

「落ち着け、敵は一体だ。攻撃を集中させて一気に押し込むぞ」

「了解。で、どうします」

「私が奴を食い止める。その間に魔法で一斉に全方位から攻撃する準備を整えるんだ」

「はい！」

返事と同時に小隊員は分散し、魔物を包囲する配置についた。隊長は剣も抜かずに魔物の前に立つ。

「さあ、来い！」

魔物はそこに突進、ではなく口を開けるとそこから炎を吐き出した。

「プロテクション！」

突き出した手から魔法の盾が発生し、その炎を遮る。だが、炎の勢いはその盾を徐々に侵食していく。兵士は動こうとするが、隊長は目でそれを制する。

「まだ動くな！」

隊長はぎりぎりまで耐えてから、一瞬で身をかがめる。

「バースト！」

地面に手をつけ爆発を放ち、隊長はその勢いで炎をかわしながら

一気に上空に跳び上がる。

「ライトニングボルト！」

雷の矢が魔物の足を射抜き、その膝を折らせた。

「今だ！」

合図と同時に、魔物を包囲していた兵士達が氷の牙を一斉に放った。魔物はそれを避ける間もなく、四方から串刺しにされ、その場に倒れた。だが、全身に氷の牙を突き立てられながらも、魔物は再び動き出す。

「それでも駄目なのか」

隊長はそうつぶやいてから剣を抜いた。魔物は跳ね起きると全身に力を込め、刺さった氷の牙を砕くと、一瞬で加速した。隊長はなんとか横っ飛びにそれをかわそうとしたが、わずかにかすり、その勢いで派手に転がった。

魔物はすぐに反転して、もう一度突進しようと足を踏みしめる。

しかし、その背中に雷の刃が直撃し、魔物の体がぐらつく。

そうしてできた隙に、再び小隊の魔法、今度は火の玉が魔物に襲いかかった。火の玉は次々に魔物に着弾し、その巨体はもう一度倒れた。

倒れていた隊長が起き上がると、魔物の向こう側にバーンズの姿が見えた。バーンズはまず倒れた魔物に走り寄ると、その首を切り落とし、止めを刺した。

バーンズはそれから剣を収めて隊長に近づき、起き上がるのに手を貸した。

「大丈夫か？」

「はい、隊の者に負傷者も出ていません。まだ戦えます」

「そうか、それなら私と一緒に来てくれ。魔物は他にも出ているよ。うだから、援護に向かう必要がある」

「了解です！ 全員大丈夫だな？」

「もちろんです、隊長！」

隊員達の力強い返事を聞き、バーンズはうなずく。

「では行くぞ」

バーンズを先頭にしてい行が移動を始めようとすると、他の兵士達が走ってくるのが見えた。

「どうした！」

「十体ほどの魔物が現れまして、現在ソラ殿が交戦中です。救援をお願いします」

「十体だと？　いくらソラでもそれは厳しいだろう。すぐに向かう、案内してくれ」

「はっ！　直ちに！」

兵士達に案内され、ソラのところに着いてみると、そこには倒れた魔物達の中で一人立っているソラがいた。兵士達はその光景に圧倒されて動けなかったが、バーンズだけは動じることなくソラに近づいていく。

「よくこれだけの数を一人で相手にしたな」

「ちょっと大変でしたけど、なんとかまりました。他の場所はどんなってるんでしょうか？」

「魔物は出現しているが、ここほどではない。お前はあの小屋に一旦戻ってくれ、もしかしたら陽動の可能性もあるしな」

「それもそうですね。じゃあ、僕は戻らせてもらいます」

バーンズはソラの返事にうなずき、小隊のほうに顔を向けた。

「お前達小隊はソラと共に小屋に戻れ。残りの者は私についてこい」「了解！」

それから二手に分かれ、ソラは小屋に戻ってきた。幸い、小屋の周囲に魔物の姿はなかったが、ソラにはそれがかえって不気味なものに感じられた。

だが、その心配をよそに、ソラが小屋のドアを叩くといつも通りの表情のミラが顔を出した。

「思ったより早かったじゃない」

「まあね。魔物が十体以上出てきて大変だったけど、とりあえずはなんとかなったよ」

「そう。じゃ、あんたとそっちの兵隊さん達はしばらく休んで。外はあたしが面倒見ておくから」

「わかったよ、気をつけて姉さん」

「大丈夫だって。ま、危なくなったらすぐ呼ぶから寝るんじゃないよ」

ミラはそう言つと、その場にいる全員の肩を叩きながら、外に出て行った。兵士達はそれに戸惑いを見せたが、ソラはとりあえず全員を小屋の中に入れる。

だが、隊長だけは一人で歩くミラを見て、少し声を落としてソラに問いかけた。

「ソラ殿、ミラ殿を一人で行かせてよいのですか？」

「大丈夫ですよ。姉さんならあの魔物に負けるようなことはありません。僕達は少しでも休んでおきましょう」

足止め

「お客さんはまだか」

そうつぶやきながら、外に出たミラは小屋のバリケードの周囲を見回っていた。今のところ魔物の姿も、変わったこともなかった。

だが、ちょうど一回りして入口に戻って来ると、そこにはボロボロになっている兵士五人と、カレンがいた。ミラはすぐにそこに走る。

「カレン師匠、これはどうしたんですか？」

「魔物に奇襲を受けていたんです。幸い全員重傷ではありませんが治療は必要ですね」

「それなら多分、中にいる連中ができますよ」

「それなら、ここはお願ひしますね」

「はい、任せといてください」

ミラの返事にカレンはうなずき、兵士を一人ずつバリケード内に運んでいった。それが済んでからカレンはミラに歩み寄る。

「さて、これからの話ですが」

「いえ、その前に聞きたいことがあるんですけど」

「なんですか」

「カレン師匠なら魔物がどの程度出てるのかわかってるんじゃないですか？」

「全て把握はできていませんが三桁はいるでしょう。ただ、これでもだいぶ減らした結果です。それと、私以外の者も動いている気配はありますね」

「それってまさか、あのいけすかない野郎のですか」

「そうかもしれません。信用はできませんが敵ではないでしょうし、今は人手があつて困ることはありません。あの男の今までの行動からすると、直接的に手を出すようなことはないでしょうが」

「まったく使えない。それより、これからどうするんですか？ さ

つさと魔物を片付けるとか」

「いえ、魔物はあなたに任せます。私はまだやることがありますから、それが終わるまで負傷者が出ないようにうまく立ち回ってください」

「それだけでいいんですか」

「ええ、本番はこれからですから、無理はしないでおいってください」
「わかりました。じゃ、適当に頑張ってください」

「頼みました」

それからカレンはその場から立ち去り、ミラはソラに一声かけてから小屋を離れた。適当に歩いていると、早速一体の魔物と遭遇した。

「まさかこんなすぐに遭遇できるとはね」

ミラはつぶやいてから笑みを浮かべ、剣を抜いた。そこに間髪入れずに魔物が飛びかかってきたが、すれ違いざまに輝く剣が振るわれ、魔物の首が落ちた。倒れた巨体が動かないのを確認してから、ミラは剣を鞘に収めて再び歩き出す。

一方その頃、ソラは小隊と一緒にバリケードの外に出ていた。怪我人はバリケード内や小屋の中で休んでいる。

「ソラ殿、我々はこれからどうするのですか？」

「外の魔物は姉さん達がどうかしますから、僕達はここで時間稼ぎですね。戻ってくる人たちもいるでしょうし」

それから、小隊から二人ほどがバリケード周囲の見回りをして警戒していたが、魔物の姿は見当たらなかった。

しかし、それから数十分後、正面から走って戻ってくる、兵士達の姿があった。その背後には数十体に及ぶ大量の魔物。ソラはその光景を見てすぐに反応する。

「僕が牽制します！ その間にあの人たちを！」

「了解！」

ソラと小隊員は一斉に動き出した。

「伏せて！」

まずソラが叫ぶと、兵士達とはかく一斉に身を投げ出した。

「炎と風よ！」

ソラは強烈な熱風を作り出し、魔物達の足元を薙ぎ払った。魔物は一斉によるめき、そのできた隙に小隊員は走りだし、伏せた兵士達を抱え起こして一気に小屋を目指した。

その間にも魔物は体勢を立て直して再び走り出そうとする。だが、その真ん中の魔物の首がいきなり飛んだ。

「姉さん！」

「出し惜しみしないで、あんたも思いつきりやんな！」

「わかったよ！ 真ん中はよろしく！」

「はいよ！」

ミラがまず魔物の中心で大暴れし始めた。鋭く振るわれる剣に、さすがの魔物達も動きを乱されて、兵士達を追うどころではなくなる。さらに、ソラが放った炎の竜巻が両端から迫り、魔物をじわじわと追い詰めていく。

だが、そこに見回りをしていた兵士が慌てた様子で戻ってくる。

「大変です！ 後方から魔物の集団が現れました！」

ソラはそれを聞いて歯をくいしばってから声を張り上げる。

「姉さん！ ここは頼んだよ！」

「わかんないけどわかった！ こっちは任せな！」

「それじゃあ、隊長さんとその二人は僕と一緒に来てください。後の人は怪我人の収容と姉さんの援護をお願いします！」

ソラの言葉に兵士達は素早く反応して、ソラについて行く者とその場に残るものにわかれた。ミラは戦いながらもそれを横目で見て口を開く。

「とにかく怪我人を運ぶのを最優先で！ それが終わったら魔法で足止め！」

鬼気迫るミラの指示に兵士達の動きはいつそう早くなる。

そして、バリケードの後方に走ったソラは、六体の魔物がバリケードを破壊しようとしているところになるとか間に合った。

「風よ！」

とにかく強烈な風で魔物を吹き飛ばし、ソラと二人の兵士はバリケードの前に立ち上がる。

「バリケードをなんとかもたせてください！」

「了解！」

兵士は半分崩れたバリケードを乗り越え、なんとかそれを立て直し始める。それを背中を感じながら、ソラはわずかに口を動かした。

「カレン師匠、まだなんですか」

それぞれの切札

カレンは魔物と遭遇しないように慎重に足を進めていた。魔物をこのあたりに送り込んでいる存在を探すためには、派手なことではできない。幸いミラやソラ、バーンズ達が派手に動いているおかげで、魔物はそちらに引きつけられているようだった。

それは知らずに、魔物と戦っている者達は目の前のことに集中している。

「全員下がって魔法で援護しろ！」

バーンズの指示に兵士達は後方に下がって一斉に火の玉を放つ。

三体の魔物は爆発に包まれて動きが止まる。その隙にバーンズは右の魔物の頭部を叩き潰し、さらに真ん中の魔物に炎の刃を飛ばした。狙い通り、炎の刃は魔物の頭部を直撃し、それを吹き飛ばす。そのまま三体目に向かって走り、相手が攻撃するよりも速く、その喉元に剣を突き立てた。

「バーンズ様！ 新手です！」

バーンズが顔を上げると今度は五体の魔物が現れたのが目に入った。そして、すぐに剣のカードを入れ替えてそれを構える。すると、剣が激しい雷を帯びた。

「ライトニングスラッシュ！」

剣から発した雷が伸び巨大な剣のように魔物を薙ぎ払った。直撃を受けた魔物達は黒焦げになり、その場に崩れ落ちた。バーンズは再びカードを入れ替え、魔物がいないのを確認してから、兵士達に手で指示を出して先に進んだ。

一方、ソラはまだバリエードの前で魔物を食い止めていた。魔物を焼いたり貫いたりして、確実に止めを刺しているが、それでも次々に現れてくるので、押し返すこともできない。

「少し派手にいきます！ 伏せていてください！」

大声で宣言してから、ソラは杖を地面に突き立てて両手を広げた。

右手には炎、左手には風が集まりだし、それはさらに杖を中心としてソラの目の前で球状に混ざり合い始めた。

その間にも魔物達は近づいてくるが、ソラはそれを見ていないかのような落ち着きで力を溜めている。

「風と火の精霊よ、今こそその力を解放するんだ」

小さいつぶやきのすぐ後、杖を中心として混ざり合っていた精霊の力が爆発的に勢いを増した。ソラは広げていた手をその力を包み込むような形に変え、溢れ出そうとする力を制御する。

だが、その間にも魔物達は迫り、ソラとの距離が数十歩のところまで来た瞬間、ソラは両手でそっと力の塊の球体を押し出した。

球体は魔物達の目の前までに到達すると、炸裂した。それは魔物を粉碎する程度の範囲にしか広がらなかったが、後方にも強烈な衝撃波が発生した。

ソラは膝をついてそれに耐えてから、後ろを振り向く。幸いバリケードは大したダメージを受けずに、無事な様子だった。安心したように息を吐き出してから、ソラは立ち上がって口を開く。

「これで少しは余裕ができそうです。今のうちにバリケードを直しましょう」

「了解！」

兵士達は勢いよく返事をして、バリケードの補修を再開した。

そして、ミラは遭遇する魔物を片付けながら歩きまわっていた。

今のところ魔物は単体でしか出現せず、ミラはなんとなく物足りない気分だった。

しかし数分後、ミラは戦闘の音を聞きつけ、その方角に走りだした。すぐに魔物五体と戦う兵士達が見え、ミラはスピードを上げる。「おらおらおらあ！」

叫びを上げてその場の全員の意識を自分に引きつける。ミラはそれを確認してから、剣を抜いて低い姿勢になって駆ける。

「そこ！ なんでもいいから攻撃をして！」

その声に兵士達はそれぞれ武器や魔法で魔物に攻撃を再開する。

そうして魔物が牽制されている間にミラは兵士の前方にすべりこみ、魔物の前に立ちはだかった。

「これで全員なの!？」

「いえ、近くで別の小隊も交戦中です!」

「じゃあ、さつさと済まさないかね、ちょうどこれを試すいい機会だし」

ミラはベルトの袋から小さなブロックのようなものを取り出し、それを真上に放り投げた。

「大地の精霊の力よ!」

声と共に剣を突き上げてそれを砕くと、それはそのまま剣に吸い込まれるようにして消えた。ミラは何かを確認するように腕を軽く振る。

「なるほどね。生の力ほどじゃないけど、こいつら相手なら十分すぎるほどか」

そうつぶやいたミラが足を踏みしめると、その足は地面に沈み込んだ。そして、その体からは想像できないような力強さで地面を蹴った。

まず一番近くの魔物を胴を切り裂き、そこに振り下ろされた腕は自分の腕で簡単に受け止めと、それを弾き返した。そこで重低音を響かせ地面を蹴って跳び上がると、よろめいた魔物の頭を剣で切る、というより粉々に砕いた。

そのままの勢いで、ミラは地面を陥没させながら、魔物を次々に粉碎していく。そうしてあつという間に五体の魔物を始末すると、ミラは剣を収めて兵士達のほうを向く。

「近くの小隊のほうにも案内してもらえる?」

「はい、直ちに!」

ミラは兵士に先導されて歩き出した。

終わらない戦い

ミラはとりあえず合流した兵士達と一緒に小屋に戻ることにした。帰路では魔物の大群と遭遇するようなことはなく、無事に戻ることができた。小屋の前にはバーンズ達も戻ってきていた。

バーンズは顔を上げてミラ達を見ると、わずかに表情を緩める。

「無事だったか」

「怪我人はいますけど、全員無事ですよ」

「そうか。とにかく、まずは怪我人を中に運んで治療だ。手伝ってくれ」

「わかりました」

二人は負傷していない兵士と協力して、負傷者をバリケード内に運び込む。そうしている間に、ソラが兵士達と一緒に戻ってきた。

「あんたのほうはどうだったの」

「壊されそうだったバリケードを直してきたよ」

「ああ、そういうこと。じゃあ、なんとかあったの？」

「とりあえずは大丈夫だけど、そんなに長くは持たせられないと思う」

ミラは腕を組んでため息をついた。

「カレン師匠は詳しいことは教えてくれないし、魔物はまだまだいるみたいだし、先が見えないのはまいっちゃうね。さっさと本命が出てきて欲しいもんだけど」

「きっと大丈夫だよ」

「ま、そう思っただけじゃないか」

同じ頃、小屋からだいぶ離れた場所に、危険な雰囲気が漂う場所があった。魔物が何かを守るように立ち並んでいて、その後方には何か人影のようなものが見える。

そこに上空から一筋の光が飛来し、魔物達を薙ぎ払った。無事だ

った魔物は素早く動き、光が落ちた地点を取り囲む。

土煙がおさまると、そこには白銀の輝きを身にまとったカレンが立っていた。カレンは周囲の魔物は気にせず、後方の人影を見する。

「言葉がわかるなら、返事をしてもらえますかね」

カレンの言葉に人影は全く反応しない。だが、魔物達は包囲の輪を狭めてくる。それを見たカレンは軽く息を吐いてから、体を漆黒の鎧で包み、白銀に輝く剣を抜き放つ。そのままゆっくりと前方に歩き出すと魔物が飛びかかってきた。

その圧力は圧倒的に見えたが、まるで紙切れのようにカレンの振る剣に切り裂かれていった。カレンはそのままペースを落とさずに進み、人影がはっきり見える距離まで到達した。そこでカレンはわずかに眉を動かした。

「ずいぶんと変わった姿ですね」

変わった姿どころではなく、人影は倒したはずの魔族、アーブレリオナとフィルガロエが半分ずつ混ざったものだった。合成魔族とでも言うべきその存在は、グロテスクな顔でおかしな笑みを浮かべる。

「オメガ様の力だ」

声は二重に聞こえ、嫌な響きを持っていた。カレンは静かに剣を構え、それとの距離を少しづつ詰めていく。そして後数歩というところまで迫った時、合成魔族が手を上げるとカレンの目の前で凄まじい爆発が起こった。

しかし、カレンは上空に舞い上がりそれをかわしている。合成魔族はそれを見上げると、その目から熱線が発せられた。カレンは体を回転させてそれをかわすと、そのまま合成魔族に向けて急降下していく。

そして剣を振り下ろすが、それは見えない壁に阻まれた。それでもカレンは剣をさらに押し込み、その壁との間に火花が散る。

「甘いな」

合成魔族が口を開くと同時に、見えない壁が実体化し、カレンに向かつて炸裂した。直撃を受けたカレンは瞬間的に腕を交差させてそれを防いだ。が、体は後方に吹き飛ばされる。

空中で体勢を立て直したカレンは膝について着地する。そこに間髪いれずに魔物が跳びかかるが、剣の一振りですそれを両断すると、カレンは低い姿勢のまま地面を蹴って合成魔族に向かう。

だが、カレンは直前で地面に手をつく、そこを中心に体を横に回転させて合成魔族の後ろに回りこむ。そして、次は相手が反応するよりも早く、その上を跳び越える。それから着地すると振り返らずに合成魔族の頭に蹴りを放つ。

それは確実に頭をとらえ、合成魔族の体を一瞬ぐらつかせる。カレンはすぐに足を引くと、そのまま振り返る勢いで剣を横に薙いだ。手ごたえは、ない。

「やはり貴様と戦うのは得策ではないな。ここは、なに!？」

合成魔族は突然驚いたような声を出した。

「いったん退却なんて、つまらないことはやめてもらいたいね」

いつから現れたのか、ファスマイドが合成魔族の背後に立っていた。

「貴様！ 何をした！」

「別に、転移をできないようにこのあたりに結界を張っただけだよ。気がきいてるだろ？」

「この裏切り者が。何が目的だ」

合成魔族の言葉に、ファスマイドは実に楽しそうな表情になった。

「僕は誰かに従ったり、どこかに属したりした覚えはないんでね、裏切るなんてとんでもない。ああ、目的なら、こんな楽しいものを中断させたくないってだけさ。わかってもらえたかな？」

「貴様！」

「おっと、君の相手は僕じゃないだろ」

ファスマイドはそう言って、カレンのほうに意味ありげな視線を投げかける。それまで黙っていたカレンはそれを受けて、剣で合成

魔族を指した。

「そうですね。こうなったら、そちらも出し惜しみしている場合ではないでしょう?」

合成魔族は一瞬だけ呆けたような表情を浮かべたが、すぐに凶暴な笑みを浮かべる。

「いいだろう。お前達の行動を後悔させてやろう」

そして、合成魔族の雰囲気が一気に変わった。

悪魔の一部

「あれ、ちょっとやばそうじゃない」

カレンと合成魔族の戦いは、光が見えたという以外に詳しいことはわからなかったが、ミラやソラにも何かが起こっているということだけはわかった。二人は顔を見合わせてうなずいた。

「バーンズさん、僕達はあっちの様子を見てきます」

二人と同じように異変を感じていたバーンズは首を縦に振った。
「わかった。ここは我々に任せておけ」

返事を聞いたミラとソラはすぐに走り出した。おかしいことに、二人は全く魔物に遭遇せずにカレント合成魔族が対峙している場に到着した。そして、いきなり背後から声が聞こえてきた。

「君達、いいところにきたね。これから盛り上がるところだよ」

ミラは振り向いてから、ファスマイドの姿を確認するとそれに詰め寄った。

「これはどうなってるの!」

「まあ、見てればわかるよ。下手に手を出せるような戦いでもないしね」

「そんなことは!」

ソラは興奮するミラの肩を押さえた。

「姉さん、落ち着いて。カレン師匠が本気を出すんなら、今は僕達は見ているだけのほうがいい」

ミラは言葉の意味を飲み込んでから、力を抜いた。

「それもそうか」

それだけつぶやくと、ミラはカレンのことだけをじっと見つめた。カレンはその様子を横目で確認して、一歩足を踏み出した。合成魔族はそれを見て歪で獰猛な笑みを浮かべる。

「その余裕がいつまで続くかな?」

「無駄口はいいですから、早くしてもらえませんか。待って差し上

げますから」

しかし、待つ間もなく、合成魔族の体の中心に空間の歪みが生じると、それは広がり、その全身を包み込んだ。

そして、歪みをまとったそれが足を踏み出すと歪みは消え、そこに現れたのは半分ずつのグロテスクな怪物ではなく、全身が闇に覆われ、顔も何も無い形だけは人のような影だった。

それは腕を顔の高さまで上げ、手のひらをカレンに向ける。カレンがとつさに剣を自分の顔の前に上げると、そこに熱線が直撃した。熱線は剣に当たって弾かれたが、後ろに押されたカレンの前に、いきなり影が姿を現す。

だが、カレンはそれに素早く反応して後ろにステップする。次の瞬間、今までカレンが立っていた場所の地面から炎が噴出した。カレンは着地する前に剣を横に振り、光の刃を飛ばす。

光の刃は炎を切り裂いたが、影は横に移動してそれをかわす。そのまま横に流れながら、影は両手に火の玉を作り、それをカレンに投げつけた。

カレンは地面を蹴って前に飛ぶと、素早く剣を振ってその二つの火の玉を両断する。そのままの勢いで影を切りつけようとしたが、それは真上に飛んだ影にかわされた。そして、上空から影は熱線を撒き散らした。

爆発が巻き起こり、その場の全員が一時的に動きを封じられ、ミラとソラが上空を見上げた時には影はその姿を消していた。

「ちっ！ あいつどこに」

ミラが慌てた様子で周囲を見回していると、カレンの落ち着いた声が答えた。

「おそらくエミ様のところでしょう」

「じゃあすぐに追わないと！」

「もちろんです。私は先に行っていますから、あなた達もすぐに来てください」

そこまで言うとかレンはすぐに飛んで行ってしまった。ミラとソ

ラはすぐにその後を追い、ファスマイドはいつの間にか姿を消していた。

その頃、恵美のいる小屋の前で展開しているバーンズと小隊の前に、いきなりあの影が姿を現した。バーンズはすぐに剣を構え、兵達を散開させる。

「貴様、何者だ！」

バーンズの問いに影は答えず、ゆっくりと進んでくる。攻撃しようとする兵士をバーンズは手で制すと、剣のカードを入れ替えた。そして、バーンズは一気にその影に向かって走り、大きく跳躍した。

「メテオスマッシュ！」

剣は勢いを失わずに影を両断し、そのまま地面に激突した。地面は陥没し、真つ二つになった影はその場で消え去る。だが、バーンズはすぐにその場から下がって再び剣を構えた。

「人間がこれほどの力を使うようになったか」

奇妙にかすれたような声が上がって響いた。バーンズが見上げるとそこには見た目は若い男が、まとう雰囲気は全くその容姿とそぐわない青年風の男がいた。

その男はゆっくりと地面に降りると、目を閉じて体を伸ばした。一見隙だらけだったが、その静かな圧力にバーンズはそれに手が出せない。

数秒後、その男の背後にカレンが降り立つ。カレンは状況を確認してから、男を見て、口を開いた。

「あなたは何者でしょうか」

男は軽い動作で振り返ると、にやりと笑った。

「お前達はオメガデーモンと呼ぶな」

「なるほど、あなたが黒幕ですか。待ちきれなくなってきたというわけですね」

それにオメガデーモンは嘲笑を浮かべる。

「魔族を二体も使えば、お前達を相手にするくらいの力はこの世界

で発揮できる」

「そういうことならば、試してみますか」
カレンは剣を構えた。

悪魔の力

カレンは先手をとってオメガデーモンに向かって踏み込んだ。オメガデーモンはそれを引きつけると、急上昇してそれをかわす。カレンも地面を蹴ってすぐにそれを追った。

それに向かつてオメガデーモンが軽く腕を振ると、三日月形のエネルギーの塊がカレンに襲いかかった。カレンはそれを剣で両断しようとしたが、剣はエネルギーの塊と拮抗する。しかし、そこで押し負けずに剣がエネルギーの塊を弾き返した。

カレンはそこで上昇を止め、空中でオメガデーモンと対峙した。

「あれを弾くとは、さすがの力だ」

「そちらこそ」

それだけ言葉をかわすと、二人は激突した。その瞬間衝撃波が発生し、オメガデーモンの腕とカレンの剣が激しく競り合う。

力はオメガデーモンのほうが上のようで、カレンは押し込まれそうになったが、それをいなして横に回りこむ。そしてそのまま体をひねってオメガデーモンの後頭部に蹴りを叩き込もうとした。

だが、オメガデーモンはわずかに体を沈ませてそれを空振りさせる。そのままオメガデーモンは体を反転させてカレンを見上げる形になると、腕を振ってエネルギーの塊を放った。

カレンは一瞬だけそれに手をつき、その勢いで体を回転させながらそれをかわす。間髪入れずにオメガデーモンは急上昇してカレンの頭上に出る。そこから足を振り上げ、それをカレンの頭上に振り下ろした。

カレンは片手でそれを受け止めようとしたが、衝撃に耐えられずに頭から勢いよく落下し始める。オメガデーモンは急降下しながらカレンの頭を狙って足を突き出し、さらに追い討ちをかけようとした。

しかし、カレンはそれを身をそらせてかわすと、目の前の足をつ

かんだ。そこから膝をオメガデーモンの背中に突き刺し、その勢いでオメガデーモンが下になるように体を入れ替える。そのまま二人は地面に激突した。

土煙が立ち昇り、その中から二つの影が互いに反対方向に飛び出した。カレンは小屋とバーンズ達を背後に立ち、オメガデーモンはその反対側に立った。

「これは受けられるか？」

オメガデーモンは両手をカレンに向ける。それにたいしてカレンが剣を強く握ると、剣は巨大な闇の塊をまとった。そして、それを待っていたかのようにオメガデーモンの構えた手から巨大な熱線が発射される。

カレンはその熱線に上段から闇の塊を叩きつけた。熱線は闇に激突すると、小さく分散して周囲に撒き散らされる。バーンズや兵士達はそれを伏せてやりすごし、カレンも熱線を受け止めるのに精一杯だった。

そして熱線がおさまると、オメガデーモンの姿はその場から消えていた。カレンが振り返ると、すでにその姿は頭上を越え、小屋に迫っている。

「風よ！」

そこに烈風が襲いかかり、オメガデーモンの足が止められる。

「そこまでだ！」

さらにミラが大声をあげて注意をひく。オメガデーモンはとりあえずといった様子で地面に降りると、ミラとソラのことを見た。

「邪魔者が増えたか」

オメガデーモンはそうつぶやいてから腕を組んで見せた。それを余裕と見たミラは表情を険しくする。

「ソラ！ 両方よろしく！」

「わかった。火と風の精霊よ！」

ミラの剣が炎と風をまとった。

「おおおおおおおおお！」

気合と共にそれが吸収されると、その体の周囲に円状に炎と風が発生する。カレンはそれを見てから、剣の闇の塊を消し、白銀の輝きに戻してミラに目配せをした。

返事は待たずに、カレンはジャンプをして上からオメガデーモンに斬りかかった。それからわずかに遅れて、ミラも風をまとして反対側から低い姿勢で走る。

オメガデーモンは慌てずに組んでいた手をほどくと、左右の手から同時に三日月形のエネルギーの塊を放った。

カレンはそれを剣で受け止め、ミラは飛び越える。そしてそのまま剣をオメガデーモンに振り下ろすが、それは軽くバックステップでかわされる。しかし、ミラは慌てた様子もなく剣を握る手に力を込めた。

「くらえ！」

剣が激しい炎と風をまとい、同時にそれが下から振り上げられる。激しい風と炎がオメガデーモンの体を飲み込み、そのまま天をつくような勢いで燃え盛った。

だが、その炎の中からオメガデーモンが真上に飛び出した。エネルギーの塊を弾いていたカレンはすぐにその後を追う。しかし、その差は縮まらないどころか引き離されていく。

あるところまで上昇すると、オメガデーモンはいきなり静止し、片腕を上げた。一瞬でその手の上にエネルギーの球体が形成され、腕が振り下ろされると同時に、上昇してくるカレンに向かってそれが放たれる。

カレンはそれを正面から剣で受け、一瞬だけ止めたが、すぐに押され始める。

「これはおまけだ」

オメガデーモンはさらにそこに向けてエネルギーの塊を放った。それは球体に着弾し、その勢いを受けた球体はカレンごと一気に地面に向けて落下する。

そして、地面に着弾すると、球体はその場にいた者達を飲み込む

には十分な爆発を起こした。

だが、爆発が収まったそこにあつたのは、倒れたカレン達ではなく大きく広がった漆黒の布、のようなものだった。それは見る間に収縮していき、カレンの傍らに立ち、その手を握っている一人の男の手にまとまっていった。

「ちょっと遅くなっただけ、はじめましてだな、オメガさんよ」

タマキはその場にそぐわない、なにげない笑顔を浮かべていた。

遅れてきた勇者

オメガデーモンはタマキを一瞥すると、とりあえずは何もせずに地面に降りる。それを見たタマキはカレンの手を放して一歩前に出た。

「遅い到着だな、勇者。それにドゥームデーモン」

「そうだな。それより、あんたに会ったら聞きたいことがあったんだけどさ」

タマキはそこで腰の袋からドラゴンオーブを取り出した。

「これって、あんたが欲しいものかな？」

オメガデーモンはわずかに眉を動かしただけで、何も言わない。タマキはその反応を見てから、オーブを元に戻した。

「まあ、どっちでもいいか。どうせ行動でわかるしな」

タマキは手に持っていた布、マントを肩にかけた。それからカレンに目配せをして軽くうなずきあい、タマキは前に出て、カレンは後ろに下がった。

「さて、始めるか」

その言葉と同時にマントをひるがえすと、それは一気にタマキの右腕に巻きついてドリルのような形状になった。そしてタマキは地面を蹴って空に飛び上がる。

「ライトニング！」

稲妻がオメガデーモンを撃ったが、それは指の一本で軽く払われた。そしてオメガデーモンはすぐにタマキに向かって急上昇をする。タマキもそれに応えるように、急降下し始めた。

そして交差する瞬間、互いに右腕を突き出し激突した。タマキのドリルとオメガデーモンの右腕が激しく交錯し、二人は位置を入れ替える。

タマキは着地してすぐに振り返ると、左手に魔力を込めて炎を生させた。

「三十倍！ 濃縮版ファイアボール！」

手のひらサイズの大きさの火の玉が、一瞬でオメガデーモンに到達する。そして、それはその体を飲み込む程度のサイズになり、強烈な熱を発した。だが、それは弾け飛び、中からは無傷のオメガデーモンが姿を現す。

「さすが」

タマキの声がその背後から響くと同時に、風を切る音が響いた。オメガデーモンは振り向かず腕を上げ、振り下ろされた漆黒のドリルを受け止めた。

「ノーデルシアの勇者の力はこの程度か？」

その言葉にタマキはにやりと笑う。

「どうだろうな」

そこでドリル状だったマントがほどけ、一瞬でオメガデーモンの腕に巻きついた。

「よっしやあああああ！」

タマキはそれを引っ張り、頭の上で一回転させると、急降下しながら地面に叩きつけた。タマキはすぐにマントを自分の手元に戻すと、前に走り出す。

そこにオメガデーモンの落下地点から熱線が放たれるが、タマキはマントでそれを払う。そして立ち上がっていたオメガデーモンに向けて手を突き出した。

「二十倍！ バースト！」

巨大な爆発でオメガデーモンの体が吹っ飛んだ。

「今だ！」

吹っ飛ばされた先にいたミラはすぐに反応して、ソラを見てから剣を構える。

「火と風の精霊よ！」

精霊の力を受けたミラは加速して空中のオメガデーモンとの距離を詰めた。剣が風と炎をまとい、激しく燃え上がる。

「必殺！ 精霊剣！」

激しい炎がオメガデーモンを直撃し、その体を地面に押さえつけた。

「こいつ！ 消えろおおお！」

炎がいつそう激しさを増し、地面を削りながらさらに地中にめり込んでいく。だが、その炎の中からオメガデーモンが飛び出した。

「逃がすか！」

そこにタマキが斜め上方から蹴りをくらわし、再びオメガデーモンを地面に叩きつけた。そして、地面を転がるそれにバーンズが剣のカードを入れ替えながら走る。

「三十倍！ マシンガンアイスバイト！」

立ち上がろうとしたオメガデーモンにタマキの放った小さな氷の牙が降り注ぎ、動きを封じた。その隙にバーンズは剣の間合いまで近づき、氷の牙が途切れると同時に剣を振り下ろした。

「ファントムクラッシャー！」

剣がオメガデーモンの左肩に食い込む。だが、オメガデーモンは強引に立ち上がると、そのまま後方に跳んで逃れた。

その体は今までの攻撃によりダメージを負っているのが明らかだった。それでもオメガデーモンは余裕を持った表情に見える。

「いい攻撃だったが、それではまだ足りんな。それとも、まだ手があるのか？」

タマキはその言葉にうなずきながら地面に降り、楽な姿勢をとった。

「いいや、本番はこれからだ。ゲストも来たしな」

タマキが小屋の方に目をやると、オメガデーモンもつられて同じ方向を見る。そこにいたのはカレンと、その背後に立つ恵美だった。オメガデーモンは視線をタマキに戻し、目を細める。

「何を考えている？」

「さあ？ 少なくともあんただけに都合のいいことじゃないのは確かだよ」

タマキの答えにオメガデーモンは口元を歪めて笑みを浮かべた。

「まあいい。お前達の思惑などで潰すまでだ」

そこでオメガデーモンの雰囲気が変わる。タマキは力が一気に高まったのを感じ、カレンと一瞬だけ視線を交わした。

手段

「いよいよ大詰めって感じだね」

離れた場所から戦いを眺めていたファスマイドは楽しそうにつぶやく。

「どうなるか、じっくり見させてもらうよ」

その視線の先では、タマキとカレンがオメガデーモンを挟むような位置で立っている。恵美はミラ、ソラ、バーンズに守られるようにして離れた位置にいた。

オメガデーモンはゆっくりとタマキに向かって歩き出した。タマキもカレンも動かず、じっとそれを見る。そのままオメガデーモンはタマキの目の前まで到達し、ゆっくりと右手を上げた。タマキも黙って左手を上げて、片手で組み合った。

二人が同時に手に力を込めると、力の波動が発生して二人の周囲の地面が沈みこむ。力はオメガデーモンが上でタマキを押し始めるが、そこでタマキはマントを巻きつけた右手を突き出す。オメガデーモンはそれを右手でつかみ、さらに力を込めた。

「これがあんたの本気か!？」

タマキの言葉にオメガデーモンは笑う。

「まだまだだ」

そして、より力が込められる。タマキは一気に押されて膝をついた。だが、そこに上空からカレンの剣が振り下ろされる。だが、オメガデーモンはタマキを持ち上げて、それに向かって振り回した。カレンは剣を止めるが勢いで体勢を整えることができず、さらにオメガデーモンはタマキを放し、放られたその体はカレンが受け止めることになった。

そこにオメガデーモンの腕が振るわれ、球状のエネルギーの塊が二人を襲う。タマキはなんとかマントを広げてそれを防いだが、衝撃で二人は飛ばされた。

カレンがタマキを抱えたまま着地すると、そこにもエネルギーの塊が襲いかかってきた。カレンがタマキを地面に下ろすのと同時に、二人は左右に別れてそれを避ける。だが、そのエネルギー弾は二つに分裂してそれぞれ二人を追った。

「色々やってくれるな！」

タマキはマントをドリル状にして腕に装着すると、それを貫き、霧散させた。一方カレンは剣でそれを真つ二つにしていた。

オメガデーモンはタマキに狙いを定めたようで、加速してタマキの真上に出ると、そこから軌道を変えて急降下をする。タマキは右手のドリルを横向きにしてその蹴りを受けたが、勢いは殺せずそのまま地面に激突し、地面を削った。

そこにカレンの放った光の刃が三発飛来するが、オメガデーモンはそれを予期していたかのように、上空に飛んでそれをかわした。邪魔がいなくなったタマキは立ち上がり、ドリルを元のマントに戻して右肩にかけた。

「まったく強い強い。どうしたもんかな」

タマキは頭をかいてオメガデーモンを見上げる。それに返ってきたのは冷やかな表情だった。

「ならば、すぐにあの娘とそのオーブを置いて立ち去るのだな」

「そんなことしたらあんたが完全に実体化するんだろ？ 俺はこの世界に住んでるんだし、そういうのは困るんだよ。魔族二体ぶんの体とは言っても、仮の姿でその力だ。あんたの世界の力そのままですっちに来られたら、さすがに手がかかりそうだからな」

「ならばそこで見ているがいい」

オメガデーモンが右手を軽く横に動かすと、タマキの周囲から、あの魔物が数十体地面を突き破って姿を現した。

それが一斉に飛びかかり、タマキの姿が見えなくなる。オメガデーモンはすでに恵美目指して動いていたが、その前にカレンが立ちふさがり、白銀に輝く剣が袈裟切りに振るわれる。オメガデーモンをそれを受けることなく、急激に軌道を変えてかわす。

そのままオメガデーモンは恵美に向かってさらに加速していく。ミラ達は迎え撃つ間もなく、その勢いに吹き飛ばされた。

そしてオメガデーモンは恵美の数歩前で急停止すると、歩いて近づく。恵美は一步後ろに下がるが、すでに相手は目の前に到達していた。

「さて、お前の力、使わせてもらおうか」

オメガデーモン腕が恵美をつかもうと伸びた。しかし、そこで恵美は素早く背中に手をまわすと、何かをつかんでそれをオメガデーモンに突きつける。

「発動！」

恵美の手に握られたカードが光り、オメガデーモンにむかって凄まじい爆発が起き、その体を後ろに押しやった。そして、その隙にカレンは闇をまとった剣をそこに振り下ろす。

爆発の影響を受けていたオメガデーモンは避けきれず、背中にその一撃を受けた。だが、二撃目は大きく前方に跳躍してなんとかかわす。そして空中で静止したが、そこにも雷の矢と氷の牙が襲いかかる。

それは腕で振り払われたが、さらに横殴りの竜巻が現れ、オメガデーモンの体はそれに巻き込まれた。しかし数秒後、その竜巻は打ち破られ、オメガデーモンは空中に静止する。

「こいつはお返しだ！」

さらに上空からタマキの強烈な急降下キックが炸裂した。タマキは反動で宙返りをして恵美の背後に降りる。

数秒後、オメガデーモンは叩きつけられた場所からゆっくり起き上がった。だが、それは明らかに傷つき、かなりのダメージを負っているのがわかった。それでも、オメガデーモンの表情に焦りのようなものはうかがえない。

「さて、ここからが気の抜けないところだぞ」

「はい。わかっています」

タマキとカレンも油断なく構えた。

開かれた門

ミラとソラは立ち直って、タマキ達を見ながら会話を交わしていた。

「さっきのあれ、おかしいと思わない？」

「そうだね。ただのインスタントスペルカードなら、あんな威力は無理だよ」

「じゃあ、ひよっとするとあれがエミの力？」

「力の増幅というわけだね」

そこに兵士達を退避させたバーンズが戻ってきた。

「二人ともここから離れたほうがいい。すでに我々の介入できる戦いではないぞ」

ミラはうなずいたが、動く気配はない。

「まあそうだと思えますけど、でも最後まで見届けたいんですよ。それにエミのことも守らないと」

「そうか。ソラ、お前も同じか？」

バーンズが聞くと、ソラは黙ってうなずく。

「そういうことなら私も付き合おう」

それから三人は恵美の側に移動した。恵美はそれに気がついているようだが、振り返らずにタマキ達をじっと見ている。

ミラは恵美の手をとって移動させようとしたが、ソラがそれを止めた。

「エミさんはこれを見届けるつもりだよ。僕達もここでそうしよう。ミラはうなずき、黙って恵美の横に立った。

タマキは後ろをチラッと振り返ってから、オメガデémonに向かって口を開いた。

「さて、ギャラリーも集まったことだし、そろそろ始めるか」

「いいだろう」

オメガデémonは一気に力を開放した。それを見たタマキは笑み

を浮かべる。

「いよいよですね」

カレンが小さくつぶやき、タマキはそれにうなづく。それとほぼ同時にオメガデーモンの手から熱線が発射された。タマキはそれをマントを広げて受けると、すぐに真上に上昇する。だが、オメガデーモンはさらにその上をとった。

そして腕が振るわれると、三発のエネルギー弾がタマキに向かって放たれた。タマキは再びマントを広げたが、その直撃をつける

と強烈な爆発に巻き込まれた。

その爆発の中をカレンが急上昇してオメガデーモンに迫ったが、それはなにか見えない壁に阻まれる。そこでオメガデーモンの腕が振られると、カレンの体は弾き飛ばされた。

そして、オメガデーモンはさらに自分のまわりに十発のエネルギー弾を発生させると、その半分をタマキとカレンに向けて一斉に放つ。

土煙の柱が立ったが、その中をカレンが上昇してくる。そこにオメガデーモンは三発のエネルギー弾を撃ち込み、カレンを地面に叩き落した。

それからすぐに振り返ると、背後に現れていたタマキに残りの二発を放つ。それは両方直撃し、タマキは地面に落ちていく。そうしてできた隙に、オメガデーモンはタマキの腰からドラゴンオーブの入った袋を奪い取った。

そして恵美の前に降りると、一瞬の動きで攻撃をしてきた三人に膝をつかせた。恵美はとっさにカードを取り出したが、オメガデーモンはそれを指で貫いて発動を止める。すぐにその手で恵美の腕をつかむと、その体を引き寄せた。

「時間があまりない。今すぐ来てもらおう」

それだけ言うと、オメガデーモンは体の横で軽く腕を振る。するとその空間が歪み、虚無としか言えないものが現れた。それは徐々に広がっていき、人が二人通れるほどのサイズになった。

オメガデーモンが恵美をその中に突き飛ばすと、恵美の体はゆっくりと落ちるようにその虚無に飲まれていく。オメガデーモンもそれに続いてそこに入ってしまった。

だが、そこに漆黒のロープのようなものが伸び、その二人を絡め取った。オメガデーモンが驚いたように首を回すと、そこにはそのロープを握った晴れやかな笑顔のタマキがいた。

「待ってたぜ、あんたが門を開くのな」

オメガデーモンは動じずに、余裕の表情を浮かべる。

「それがどうした？ これを閉じてしまえばお前の攻撃など届きはしなくなる」

それから空間の歪みは徐々に小さくなり始める。しかし、そこにカレンがゆっくりと近づく。髪と瞳の色は元に戻っていて、傷ついた鎧を見ると、すでに力が残っているようには見えなかったが、その目は鋭い。

そして、タマキの横に並ぶとゆっくりと剣を片手で振り上げた。

「正直、あまりこの技の名前は好きではないんですが。せつかくタマキさんがつけてくれたものですから、使わせてもらいます」

オメガデーモンは余裕の表情を崩さないが、カレンは軽く息を吐き出してから自らの全てを研ぎ澄まし、鋭く剣を真下に振り下ろした。

すぐには何も起こらなかったが、数秒後、空間の歪みに剣の軌道と同じ亀裂が走った。

「次元斬」

カレンがつぶやくと空間の歪みが亀裂にそって一気に拡大する。同時にタマキはロープを思い切り引っ張って二人を歪みから引っ張り出した。

そこからすぐにタマキはロープを放し、高速で移動して一瞬で恵美とオーブを奪い返し歪みの後ろにまわると、すぐ横についてきていたカレンに一人と一つを渡す。

そしてすぐに振り返ると、すでにロープから逃れたオメガデーモ

ンと向かい合って口を開く。

「さて、今のあなたの後ろになら、いくらでも強烈なものをぶちかませるよな」

カレンは恵美を自分の背後に守るように隠し、タマキの手を握った。

ただいま

「いきます」

カレンは剣を地面に突き立て、その手をオメガデーモンに向ける。タマキも黙って空いている手を同じようにした。

タマキの体からは漆黒のオーラ、カレンの体からは白い光が発生し、それが二人の手に集中していく。そしてそれは手の間で一つにまとまった。

そして、それが一気に光線として放たれた。オメガデーモンはそれを手を伸ばして止めたが、じりじりと押されていく。

「こんなもんじゃ、ないぜ！」

タマキが気合を入れると光線はさらに勢いを増し、オメガデーモンの体は光線に飲み込まれた。

数秒後、光が収まるとそこには何の姿もなくなっていた。だが、圧力のある気配と、低く、頭に直接響いてくるような声が聞こえてきた。

「これほどの力だったか。体も失ったことだし、今回は退くことにしよう」

そして、気配は一気に消え去った。それを感じたミラはタマキとカレンに駆け寄った。

「師匠！ 終わっただんですか？」

「いいや」

タマキは首を横に振ってから、握っていたカレンの手を放した。「あいつのとりあえずの体を消しただけだし、これからが本番だ。でもまずは」

タマキは恵美に視線を移し、歩み寄った。

「さて、帰る準備は？」

そう聞かれた恵美は戸惑いながらもうなずいた。そこにカレンがドラゴンオーブを差し出す。

「エミ様、帰るのに必要なものです」

「あ、はい」

恵美はそれを両手で受け取って、胸に抱いた。そこにソラが不思議そうに口をはさむ。

「帰るっていうのは、一体どうするんですか？」

タマキはまだ開いている空間の歪みをあごで差した。

「あれを使うんだよ」

「じゃあ、まさかあれのためにあいつと戦ってたんですか？」

「そうだよ。あれを開くのは俺もカレンもできなかったからな。だからあいつにやってもらう必要があったんだよ」

「って、つまり手加減してたわけですか」

ミラは多少あきれたような表情をしていた。タマキは頭をかいて苦笑いを浮かべる。

「そうだと言えればいいんだけど、そうでもなかったな。それよりも、早くやることをやらないと」

カレンがうなずき、恵美の手を取った。

「ではエミ様、これからあの中に入ってくださいます。私達も途中までは一緒にしますので、ご安心ください」

「はい。それで、私はどうすればいいんですか？」

「そのオーブを離さないようにしっかり持っていてくれりゃいいよ。そうすればそのオーブが元の世界まで案内してくれるはずだから」

「わかりました。それで、あの！何か持っていくものとかありませんか？」

「ああ、そういえばこれがあったんだった」

そう言ってタマキは一枚の紙切れを恵美に差し出した。

「俺とヨウコさんの向こうでの住所が書いてある。探してみると楽しいかもよ」

恵美はそれを受け取ると大事そうにポケットにしまった。

「さて、それじゃあそろそろ行きますか」

そうして全員が空間の歪みの前に移動した。タマキは振り返り、

後ろの三人に笑顔を向ける。

「じゃあ、俺とカレンはしばらくは戻らないと思うから。その間はよろしく頼むよ」

「え？ ちょっと、それはどういうことですか」

ミラが足を踏み出すと、カレンがそれに答える。

「オメガゲーモンの本体はほぼ無傷ですから、それをなんとかしてくるんです。そのためにはこの世界から離れる必要がありますからね」

「そういうこと。どれくらいになるかはわからないけど、戻ってくるからな。じゃ、行くぞ！」

ミラが次の質問をする前に、タマキ達三人は歪みに入って姿を消してしまった。その数秒後、歪みは徐々に正常に戻り、その姿を消した。

ミラはそこに近づき、しばらく何かを探すようにしていたが、しばらくして大きくため息をついた。

「なんか、いつも置いてけぼりにされてる感じじゃない？」

「そうではないだろう」

バーンズがミラの隣に並んで口を開く。

「戻ってくるという言葉信じよう。そして、それまでは我々がなんとかするんだ」

「そうですね。姉さん、今はとにかくノーデルシア王国に戻って、これからのことを考えるのはそれからしようよ」

「まあ、そうするしかないか」

三人はその場から立ち去り、撤収の準備を開始した。

一方、一連のことを見ていたファスマイドは満足気な表情で体を伸ばしていた。

「とりあえずは、タマキ君の完勝って感じだったね。いいもの見せてもらったし、僕は僕で適当に色々やっておくとしようか」

ファスマイドは姿を消した。

それから数日後、ノーデルシア王国ではエバンスの戴冠式が行われた。世界中から様々な人々が集まっていたが、その中でミラとソラは里帰りの準備を進めていた。

「もう少しゆっくりしていてもいいんじゃないの？」

ヨウコがそう聞くが、ソラは首を横に振った。

「いえ、今回は元々あまり長居する気はありませんでしたし、一度帰ってからまた来るつもりですよ。僕としてはご子息が気になるので」

「そういうことなら、また近いうちにアランの顔を見に来てね」

「もちろん！ そうさせてもらえるなら喜んで来ますよ！」

ミラは自分の胸を勢いよく叩いた。ヨウコはそれを見て微笑み、それから窓の外を見た。

「恵美ちゃんは今頃無事に帰っているのかしら？ それに、タマキ君とカレンは。いや、あの二人なら何があっても大丈夫よね」

遠く離れて

恵美は気がついたら自室のベッドの上に座っていた。手にはオーブを握っているはずだったが、そこにあったのはただの丸い石だった。

それから色々なことが次々に起こったが、恵美は無事に高校生活に帰ることができた。春休みになると、恵美はタマキから渡された住所を思い切って訪ねてみることにした。

まずは葉子の住所。そこは小奇麗な一軒家で、なんとなく葉子のイメージとマッチしていた。恵美がチャイムを鳴らして葉子のことを口に出すと、手紙でやりとりをしていたので、すぐに初老の上品な感じの女性、葉子の母親が現れた。

そして、恵美は家に上がって自分が出会った葉子のことを話し始める。葉子の母親は話が進むと、恵美の語っていることは自分の娘に間違いないと確信し、真剣さを増していく。話ははずみ、いつの間にか時間は夕方になっていた。

「とっても楽しかったわ。今日はうちの人もいなかったし、また機会があつたら葉子の話を聞かせてね」

「はい。今日は突然押しかけたのに、話を聞いていただいてありがとうございました」

それから三日後、葉子はタマキの住所を訪ねていた。その家は古ぼけた平屋で、チャイムを鳴らすと、恵美が見たところ三十歳くらいの女性が顔を出した。

「初めまして、手紙でご挨拶させていただいていた塩畑恵美です」

「ああ、あたしは高崎佐織。わざわざ来てくれたんだ。ま、上がった」

恵美は居間に案内され、座布団に腰を下ろした。佐織はお茶を入れてきて、それを置いてから自分も座る。

「それで、あいつのことを詳しく話してくれるみたいだけど」

「はい。簡単に言うと、タマキさんはこことは違う世界に勇者として召喚されて、すごい大活躍をしたんです」

「勇者ねえ」佐織は楽しそうにやりと笑う。「まあ、あいつならそういうのありそうだね。性格的に」

「あの、タマキさんはどんな風だったんですか？」

「まあ、何かあると呼ばれもしてないのに首を突っ込んで、色々かき回すんだけど、なぜか問題が解決しちゃうようなね。我が弟ながら、そんな感じの面倒くさい奴」

「なんか、すごいイメージ通りな感じですね」

「わかる？ まあ会ってるならわかるか。で、今はどうしてるかわかるの？」

「私をここに送ってから、また違う世界に行ってしまったんです」

「ふーん。それは一人で？」

「いいえ、カレンさんという人と一緒にです」

「名前からすると、女か。そうかそうか、あいつもやるじゃないか。どんな人なのかな？」

「私が向こうで一番お世話になった人です。いつも落ち着いていて、とても強くて優しい人でした」

「なるほどねえ。年上？」

「はい、そうですけど」

そこで佐織は腕を組んで力強くうなずいた。

「わかってるな。年上がいいんだよ年上が」

恵美はなんとなくそれには曖昧な笑顔で応えた。

「まあ、元気でやってるのがわかってよかったよ。どうせ高校卒業したらどっかに消えちゃいそうな奴だったし」

そう言う佐織は天井を見上げた。恵美はお茶を飲んで、二人の間には沈黙が流れる。しばらくして、恵美はおもむろに立ち上がった。

「それじゃあ、私はそろそろ帰ります」

「ああ、そういうことなら駅まで送っていくよ」

二人は家を出ると、並んでゆつくりと歩いていく。しばらくは黙っていたが、恵美が口を開いた。

「あの、タマキさんに帰ってきて欲しいと思いますか？」

「帰ってきたいと思えば、勝手に帰ってくるんじゃないの。あいつだつてもう一人前なんだろうし、私から言うことは何もないね」

「それなら、いつかまた会えるかもしれないね」

「そんなことがあったら、楽しいだろうね」

そうしているうちに駅に到着し、恵美は改札の前で佐織に礼をした。

「今日はお話を聞かせていただきありがとうございました」

「こちらこそ。何があったのかわかってすっきりしたよ。ありがとう」

そして春休みも終わり、恵美はまた日常に戻っていった。平和な日々だったが、そんな中でもあの世界での出来事が頭の片隅から離れることはなかった。

しかし、目の前のことを片付けていくうちに、それはただの思い出になっていった。だが、それまでとは違い、ヨウコの家族とはあれから二回ほどだったが、佐織とは継続的に会っていた。

今では恵美はあの世界に行って様々な人に会えたことをよかったことだと考えていた。周囲も、以前のよりもずっとしっかりととして落ち着いた雰囲気を持つようになった恵美の変化を好ましいものと感じていた。

それでも時々、あの世界のことを思いをはせることがあった。今ではもう手の届かない、はるか遠くの世界に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7606p/>

ノーデルシアの勇者 第二章

2011年6月14日22時40分発行